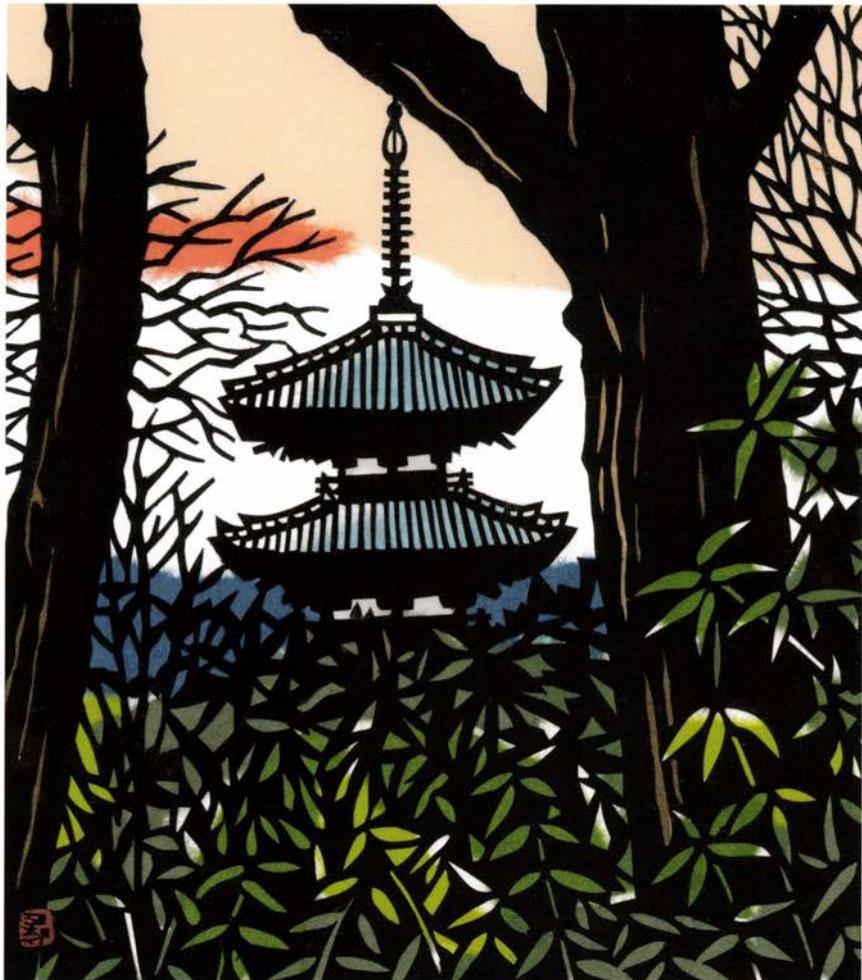


川柳塔

平成三十年十一月一日発行(毎月一日発行)
創刊大正十三年 通卷一〇九八号



日川協加盟

第24回 川柳塔まつり特集

No. 1098

十一月号

お知らせ

第7回 春の川柳塔まつり誌上大会案内

課題と選者（各題二句 共選）

「鍵」 真島久美子（番傘川柳本社）
三宅保州（川柳塔社）

「顔」 岡崎守（札幌川柳社）
山本希久子（川柳塔社）

「雑詠」 赤松ますみ（川柳文学コロキウム）
小島蘭幸（川柳塔社）

投句料 一〇〇〇円（切手は不可）

締切 平成31年2月20日（水）消印有効

※詳細は12月号

★新年号特集★

一一〇〇号記念同人参加（二人一句）

「私の一句」

■今年中に発表された句に限ります。
■締切 11月20日（本社事務所宛）

★事務所受け付け時間のお知らせ

土・日曜、祝日を除く平日の10時から15時までにご利用いたします。

年賀広告募集

本誌一月号に掲載する年賀広告を募集いたします。
同人・誌友ならびに各句会（川柳会）のアピール及び誌上名刺交換の場として、積極的にご利用をお願い申し上げます。

★個人 一口 1/9頁 二、〇〇〇円
1/6頁 三、〇〇〇円

（巻末の台紙に原稿を貼付または記入してお申込み下さい。）

★団体 次の四種といたします。

- ① 1/3頁 六、〇〇〇円
- ② 1/2頁 九、〇〇〇円
- ③ 2/3頁 一二、〇〇〇円
- ④ 1頁 一八、〇〇〇円

▼原稿締切 十一月二十日

川柳塔社

第70回西日本川柳大会

小島 蘭 幸

庵に似よおれに似るなと子をおもひ 路 郎

麻生路郎氏の句碑は、建立から68年経った今も、弓削駅前にはスツクと建っていました。私は句碑に掌を合わせて、「川柳塔社は来年初立95周年記念川柳大会を開催致します」とご報告させて頂きました。

川柳の小径、公園も散策して、中島生々庵、西尾葉、橋高薫風、歴代の川柳塔社主幹の句碑にもご報告させて頂きました。

初めて出席した前夜祭は、とても楽しいものでした。美味しい料理、美味しいお酒、カラオケ、私も久し振りに一曲唄わせて頂きました。宴の途中、東京から、やすみりえさんが出席、一瞬で会場がパッと華やかになりました。

弓削川柳社創立70周年、第70回西日本川柳大会は、平成30年10月14日、久米南町文化センターで開催されました。アトラクションは久米南中学校吹奏

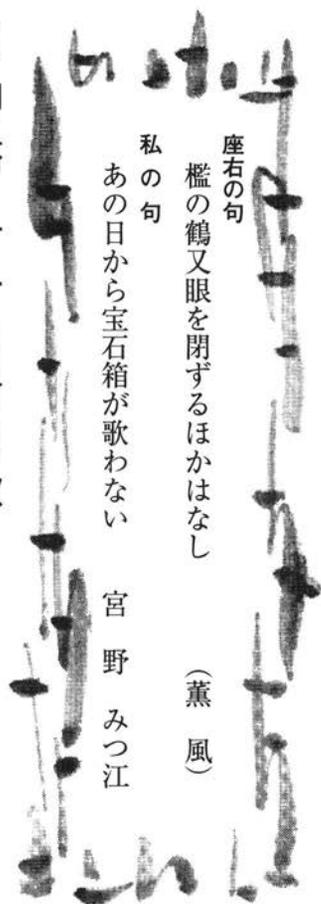
楽部と川柳傘踊りでした。選句中でしたがモニターテレビで拝見する事が出来ました。

上の子は足だけ母にふれて寝る

弓削平

弓削川柳社創立に尽力された丸山弓削平さんの一介を紹介して、誕生寺で開催された第19回西日本川柳大会で薫風先生にお会いしたこと、現在315基になった川柳の小径、公園の句碑が歳月を重ねて美しくなっていたこと…。私は一般社団法人全日本川柳協会理事長として、お祝の言葉を述べさせて頂きました。

大会出席の醍醐味は、選者の披露を生で聞ける事です。今回も佳句をたくさん聞く事が出来て、とても幸せな一刻を過ごす事が出来ました。ジュニアの皆さんの作品もキラキラととても可愛いかったです。すくすくと成長して世界一の川柳の町を更に盛り上げて頂きたいものです。さて冒頭に書きましたように、来年は大阪で、川柳塔社創立95周年記念大会を開催致します。第71回西日本川柳大会と続きますが岡山の皆さんも是非今から出席の予定に入れて頂きたいと願います。



座右の句

檻の鶴又眼を閉ずるほかはなし

(薫風)

私の句

あの日から宝石箱が歌わない

宮野みつ江

川柳塔 十一月号目次

題字・中島生々庵／表紙きり絵・前田 尋「当麻寺・東塔」

■巻頭言 第70回西日本川柳大会

勲章

小島 蘭 幸 … (1)
仁部 四郎 … (2)

川柳塔 (同人吟)

小島 蘭 幸 選 … (4)

川柳塔の川柳讃歌

木津川 計 … (41)

自選集

細川 花門 … (45)

■ショートエッセイ 句集

細川 花門 … (45)

温故知新

細川 花門 … (45)

水煙抄

西出 楓 楽 選 … (46)

句集の森

西出 楓 楽 選 … (46)

橘高薫風句抄

吉村 侑 久 代 … (64)

英語 de Senryu

吉村 侑 久 代 … (65)

誹風柳多留一二篇研究

吉村 侑 久 代 … (65)

第24回 川柳塔まつり

同人総会 … (66)

同人総会・おはなし・各賞発表・記念句会・懇親宴

勲章

仁部 四郎

戦後の総理大臣経験者に、大勲位^①というニックネームをもつ人がいるというのは私のアヤフヤな記憶だが、戦後は、文化勲章が最高位の勲章だという説もあるらしい。戦後は民間人にも叙勲の範囲が大きく広がられたのは事実で、春と秋には、俳優、画家、俳人、歌人、落語家などなども話題を提供しているのはまことに結構なことである。

春と秋とに限らずに新聞の片隅に死亡叙位、死亡叙勲の記事が出る。元町会議員、元校長といった人々に「正六位」などと出るのは、私の感覚では「さびしい」ことである。どうせのことなら生前に「従六位」の方がよかつたらうと云えば遺族に失礼ということにならうか。

「古稀薫風」に次の二句が収められている。

A 「勲章の欲しい七才七十才」

B 「勲一等黒き旭日大綬章」

愛染帖	……	新家完司選	……	(84)
檸檬抄	「アンテナ」	川端一步・山岡富美子共選	……	(88)
せんりゆう飛行船 ^⑤	……	新家完司	……	(91)
一路集	「やりくり」	中居善信選	……	(92)
	「珍しい」	関本かつ子選	……	(93)
初歩教室	「突然」	居谷真理子	……	(94)
川柳塔鑑賞	……	竹村紀の治	……	(96)
水煙抄鑑賞	……	久保田千代	……	(98)
■追悼文(松村里江さんを悼む)	……	山田耕治	……	(99)
句会燦燦	……	大西泰世	……	(100)
基金会報告・御礼	……	弘津秋の子	……	(102)
各地柳壇(佳句地十選/川上大輪・鴨谷瑠美子)	……	……	……	(103)
川柳塔WEB句会「呼ぶ」	……	平宗星・栃尾奏子共選	……	(115)
十一月各地句会案内	……	……	……	(116)
柳界展望	……	……	……	(118)
■編集後記(ひとこと/初代正彦)	……	朱夏・憲彦	……	(120)

座右の句

一つずつ石積んでゆく誕生日

(楓 楽)

私の句

近いはずなのに遠くなって夕日 川名洋子



この二句の解釈は、もちろん算数の答えのようにはいかない。いかにもうがちの利いた句であることは論をまたないのだが、夏目漱石の「わが輩は猫であるから辞退する」を引き合いに出して論評しているものか、私としてはどなたかに訊ねてみたいところである。

なお、Aの句は、『川柳表現辞典』(田口麦彦編者・飯塚書店)では、「七歳」「七十歳」になっているが、私としては「古稀薫風」もそうしてほしかった。

ふらふらしたことを言うのはそれくらいにして、『川柳表現辞典』に出ている句を楽しむことにする。

作業衣に似合う勲章なら欲しい

斎藤 正人

女の勲章美しくしたたかな

中島 和子

生存も死後も叙勲はこぬ野武士

鈴木 如仙

勲章は野菊だけです農五代

阿部 絹雄

勲章は玩具売り場で買い給え

佐伯 国雄



小島 蘭 幸 選

桜井市 安 土 理 恵

早よ帰ろうが遅帰ろうがひとりやし

もつと揺らしてあなたの愛が本気なら

じいちゃんの案山子に杖を持つてくる

義理ひとつ果たし帰りは雨になる

お隣りの奥さんアンドロイドかも

ちよこ一杯サブリメントの盗み酒

西宮市 緒 方 美津子

コップから湯呑みに替り心風く

そだねそだね災害続く募金箱

ニッポン日本負けへんで物作り

嬉しいねえへそくり狙う孫がくる

酷暑に厚化粧心意気みたり

美しい乱れ方なら玉三郎

札幌市 三 浦 強 一

米寿祝って子が招待の登別

冥土へのためと見ておく地獄谷

大食堂蟹三味のバイキング

少食の妻山と積む蟹の殻

万緑のシャワーも浴びる露天風呂

散策の樹間目が合う北狐

榎原市 居 谷 真理子

虹の下傘と心が干してある

閉校に小さな店もたままれる

時は金などと貧しいことを言う

闘う日コーヒー豆をまず砕く

君がいて会えて話せて大ジョッキ

夏は秋に負け秋は冬に勝てず

松江市 石 橋 芳 山

深爪にチョット未来が見えている

チョコレートフォンデュに包み込むイヤミ

まだ冬を感じられずにいるうなじ

やる気なくすでに駱駝になつて

くるぶしの古傷思いだすぬめり

秋用のかかると替えようと思う

大阪市 平井美智子

肩先に触れてきたのは秋の恋
笑うしかなかつたいきなりの別れ
矢印が消えたあたりで昼にする
コンビニへ平均点を買いにゆく
ドーナツの穴を抜ければ青い空
寝る前に少し自分を誉めてやる

鳥取市 両川無限

置き去りのピアノと秋の日を語る
旧姓の恋文二通持つている
石ひとつ庭師は山も海も抱く
少年の視線の先に父の壁
酒が出る予定帰るに帰れない
女は朝を男は明日を待つている

大阪市 谷口義

つつしんで秋お待ちしておりました
姉さんもひとりで角力を見ている
音量を上げて今日から秋場所に
背中を向けたままで水を飲んで
着払いにしておきました以下余白
友だちの友だちもポケットの中に

米子市 吉田陽子

自惚れも充分生きる力なり
重い荷を背負ってくれたのは月日

後期へと答えが一つずつ揃う

守備範囲無くしのっぺら棒になる
煽られて弾みつまずいては止まる
満月のあいだよそ見をしてました

尼崎市 山田耕治

起こさずにおく大の字で寝てる猫
終活はまだ本気ではやってない
ケーキ屋で名前書かれた誕生日
救助犬に表彰状を読みあげる
手の染みを隠し給うな初デート
いつの間にか翁の面になってきた

河内長野市 山岡富美子

台風と地震で静止画になった
底辺を支えるポランテア走る
手作りの時間を掛けた皺と染み
愚痴をいうたびに壊れてゆく時間
一行詩ネットワークは無量大
液状化の脳にピノキオの手足

倉吉市 牧野芳光

五十年前と変わらぬ家はばかり
都会の田固定資産税が残す
よそ見する間に竹藪が攻めてくる
朝ドラをいつも邪魔するトラクター
穴倉で蟹は静かに脱皮する
脳トレにピタゴラスの定理を買う

寝屋川市 伊達郁夫

秋だから澄んだジョークを持ち歩く

優しさに触れて明日を膨らます

秋の野の真ん中に置く古日記

解脱して童話の川に浮いている

平凡を幸せと読む笑い皺

他人の目気にする程の元氣です

三田市 北野哲男

平和とはベットの医者が街に増え

猫連れて帰省するとは思わざる

孫来るとスイッチオンになる夫

消去法一つ残った五七五

夜叉菩薩どちらも私です介護

息抜きに釣竿提げて缶ビール

松江市 藤井寿代

ヨイシヨドッコイシヨで始まる一日

鏡にはニッコリもう一人の私

モナリザの逆流性胃炎止まぬ

暇すぎて字余り続く25時

若者よスマホを置いて前向いて

自動ドア季節は巡り鱈雲

鳥取市 山下凱柳

大風呂敷にまんまと乗って地獄見る

引き返すことできぬ敬老仲間入り

独居老人安否確認窓明かり

虹が立ち歴史飾った甲子園

延命治療遠慮しますと言ったけど

遊び心もって余生を生きている

大阪市 升成好

不器用を恥じぬいつでも自分流

宣誓の背筋天まで伸びている

わがままになれよとストレスに言われ

犬が居るだけで人生倍になる

生きてきた通りに顔が刻まれる

無駄だった筈の遊びに癒やされる

和歌山市 古久保和子

綴じ糸が緩む私の備忘録

どうしても力入らぬ一人めし

病葉の一枚想う人のいて

新語造語に置いてきぼりの街灯り

じつくりととろ火にかける幸せ度

まだ欲があつて鏡を覗き込む

西宮市 西口いわゑ

一期一会生きているとはそんなこと

あの時の負けは価値があつたと今思う

どの色も似合わぬ齢になり候

天辺の椅子のひと言嵐呼ぶ

ふところの深いお人を裏切れぬ

知らぬ間に年を重ねていた葦よ

沖繩県 森山文切

義理堅い男のマンゴーが甘い
ダイエツトすると宣言したお尻
空腹を感じた時のカキツパタ
飛行機の窓から見えるのが虚像
不吉とはあまり言われぬ四番打者

北九州市 小松紀子

元氣かいほほ笑みかける黒リボン
言わぬがはなあちこち悪い老いだから
あちこちの火種あるあるスポーツ界
犬猫の可愛い動画いやされる
楽しいと思えば脳もそうだろう

唐津市 坂本蜂朗

傘寿越え父母へつくづく有難う
孫のガッツポーズも見たぞ有難う
戻らない妻にうろろするばかり
妻の愚痴補聴器外し聞いている
孫の夢暫し憂いを遠ざける

唐津市 山口高明

臨幸の陛下迎える旗の波
古書店のお客何方も学者風
不自由は感じぬスマホ無くっても
嫁はんにすれば出費の元はとれ
三十年続け詩囊も枯渴ぎみ

熊本市 杉野羅天

花切れが続く心の川乾く
夏終る薔薇が占うように咲く
絶大な無力感台風だとさ
酷暑対策美味いケーキとコーヒート
天災へ誰も解決策がなく

札幌市 小沢淳

震度7生きていたかと笑い合い
震度7ブラックアウト脆きかな
笑ったらゆつくり融ける角砂糖
学ばせて長男坊は根なし草
餌のいらぬロボット犬が売れている

青森県 松山芳生

燦々と風に召されて散るさくら
生きたくて籠を緩めておきました
秒針を長針にして生きのびる
この先も夢を伴走して生きる
満天をつつくと涙が降ってきた

弘前市 稲見則彦

プライドがあるのかしらと問う妻と
継ぎ接ぎを余儀なくされた僕の夢
読みかけの本風がパラパラめくります
針がとぶレコードにある青春譜
心地好い眠りの中の深夜便

弘前市 今 愁 女

西から北へ災害続き悲惨なり
南海トラフとやまだ見ぬ恐怖あるという
原発いらぬソーラーパネル屋根に乗せ
スマホほど仕事熱心やったなら
眠れぬ夜は川柳塔を二度、三度

弘前市 高橋 洋子

褒められて心の籠を締め直す
ひと言の言葉足らずで機を逃す
話すより重くなります手紙文字
水不足生命力が試される
好き勝手言つて笑つて遠い耳

塩竈市 木田 比呂朗

チャレンジャー言つてはいるが楽でない
断捨離をもっと急げという鏡
まだまだと登りの続く八十路坂
ピンポンに呼ばれて気づく妻の留守
計算は容易くなると消費税

男鹿市 伊藤 のぶよし

間引き菜の隙間をうめてやつと秋
生きていく褒美新米たきあがる
枯れたつて夢は捨てないスキの穂
颯雲サンマばかりが秋じゃない
恋敵野辺のけむりで行つたきり

東京都 川本 真理子

芋虫よ急げ 秋は釣瓶落し
けんかして三日目にふと口をきく
昼の月見てはいけないものがある
お住まいはと聞かれ煙の立つあたり
やつと知る端居の意味と人生と

東京都 まえで とよこ

咲くはずの朝顔咲かずあつい朝
ジャスミンの小花こぼれる熱帯夜
よっこらしよ座れば眠くなりねむる
干したかとおもえば乾く今朝の照り
男優賞演技ではない微笑洩れ

八王子市 川名 洋子

踏ん張つてみたが何とも頼りない
祭り終え長い休みをとる神輿
ただ拍手真似の出来ないポラントイア
朝露が涙のようにポトリ落ち
多機能を使いこなせぬままにある

横浜市 菊地 政勝

本音だけ聞きたがつてるイヤリング
毒舌の妻だが的をはずさない
南から北へ募金がまだ続く
穏やかな口調で釘を差してくる
心では便利な妻と思つてる

さいたま市 星野育子

戦争がある限り平和は虚構
想定の内外が変る線引き

先輩の十八番一度は歌いたい

人生の必修科目なのか恋

季節毎人で賑わう悲話の里

朝霞市 前田洋子

ユニフォーム真つ黒もえる甲子園

ボランティアスパーマンの尾畠さん

引越しに持って来たのが捨てる方

私の耐用年数いかほどか

ふっと今狂つてみたい祭の夜

上尾市 中村伸子

娘に甘い婿の明るい顔が好き

美しく成長久しぶりの孫

孫の会社すつと出て来ぬカタカナ語

保存食あと三年と確かめる

さば缶とレシピセットで買ってくる

可児市 板山まみ子

暑すぎて蚊も出てこない盆休み

移り気な人思ひ出す夏の雲

終活に嫁入り筆筒処分する

押入れの八割方は不用品

猛暑日はやつと終つて鬨雲

愛知県 早川遯行

酒飲めるうちは家督は譲らない

天国もいいけどこの世にも未練

ミシユランも知らない旨い店がある

そのうちにとは当てのない別れ際

八十を過ぎると神社よりお寺

犬山市 金子美千代

キンキンのビールジョッキも冷やしとく

いちじくのジャムふつふつと豊かな日

カタログを三日寝かせてやはりやめ

ご近所の情けが染みる台風禍

バンドラの箱世紀末思わせる

犬山市 関本かつ子

効率の良い真夜中の作句帳

大学の孫にも古希の知恵袋

桃と梨送り田舎に住む誇り

金婚も終えて前向く七合目

年功序列今も話が合う同期

鈴鹿市 小河柳女

悪魔のように難病が入ってきた

難病の魔物の声を聞く深夜

愚痴話青空に聞いてもらう

人を笑うペットボトルの中において

敗者の屋根バカリと割れて青い月

富山市 島 ひかる

また一人幼馴染が星になる
太陽族の真似をちよっぴりした月日
クラス会孫のはなしをした無口
アルバムを開く青春溢れ出る
現実に戻る夫の声がする

神戸市 上 田 和 宏

八十路にもあすなろという登り坂
町若返るたつた一夜の盆踊り
立ち話犬の尻尾がじれてる
ツクツクボウシ台風一過スズムシに
どっこいしょと座りよいしょと立ち上がる

神戸市 奥 澤 洋次郎

濁流に平成最後の夏消える
恵まれぬ人と比べてなくさめる
一人から二人になって落着かず
当り前のようにされてる予定外
機器社会一歩先ゆく知能犯

神戸市 富 永 恭 子

見なかったことにしましょうお月さん
ジムマット正座で並ぶシニアたち
同窓会昔の傷がくつきりと
蒔いた種否応無しに発芽する
恐ろしいニユースばかりで籠りがち

神戸市 能 勢 利 子

お隣のカメラに我が家見守られ
夕焼けが消えないうちに今日の礼
後からスマホ自転車来る歩道
力は無いが話の相手なら出来る
老母の爪切るのが恐い骨みたい

神戸市 細 川 花 門

広島空に戦火はいらんけん
ヘルベスのような線状降雨帯
師と仰ぐ句碑に佇む秋日傘
夏座敷ころろが和む蘭草の香
水飲んでますか塩飴舐めてるか

神戸市 松 井 文 香

籠の鳥家事の楽しさ知りました
ぎこちなさ取れ付き添いも早や一年
穏やかな夫を変えていく病
「転移なし」胸なでおろし深呼吸
一安心今日見る空の青いこと

神戸市 山 口 光 久

白少し混ぜてほんわかした気分
テリトリーだんだん狭くなるような
畏まってばかりじゃ疲れ増すばかり
好き勝手に闊歩してます自分流
世の中の動きを察知する素足

神戸市 山口 美穂

酢橘の香ふるさと思う夕餉箸

大地震秋刀魚も泣いているだろう

敬老会接待側も老いの色

立ち話秋の蚊しぶとく邪魔をする

猛暑のつけ怠惰のあとがそここに

明石市 梶谷 和郎

陽が落ちて暖簾は揺れる気は揺れる

半分は僕のです子のDNA

回り道押し花ひとつ増えました

老いたとて夢のあなたは若いまま

死ぬまでは生きなきゃならぬ飯を焚く

芦屋市 黒田 能子

後は子供に託しますからよろしくね

メモ一枚失くして右往左往する

時時は言い合いもしてああ夫婦

手作りのケーキ美味しいお母さん

うきうきとケーキ買ってる男子です

芦屋市 竹山 千賀子

ご近所はバステルカラーでお付合い

落着いて家に居れます今日は雨

出る幕がまだまだあって生きられる

衝動買いままたまたゴミになりそうだ

幸せな一日だったと羽根たたむ

尼崎市 永田 紀恵

子雀に交通整理した一茶

聞かない日なんだかさみし妻の愚痴

仕事だと思えば出来ぬボランティア

インタビューカーカメラ目線で泣いている

主流から外れて見えた横の糸

尼崎市 藤井 宏造

S席に近いA席かなり得

時間かけ僕の薄い血吸う蚊蚊

香奠拝辞故人の意志とほんとかな

薩摩切子で飲んだって一人はひとり

亡き妻が背後にいる気してならぬ

尼崎市 藤田 雪菜

ハイテクの波が私をおいて行く

ノルマあるようだ働き蟻走る

ホース手に足踏みをして蚊を払う

エアコンをつけて布団かけて寝る

負の心払い今日から練り直す

川西市 山口 不動

左耳時々居留守使います

年下の有名人の計が続く

いますネエ アジア大会強い人

台風が番号順に途切れない

平和ボケ北朝鮮に降参す

篠山市 北澤 稠民

入院で加齢の重さ知りました
通帳を溜息ついてみています
退院も別れが辛いナースさん
病院は何時の間にやらすぐ友に
風鈴をやっとしまった長い夏

篠山市 酒井 健二

人の世の憂さを満載終電車
よそ者で銭湯入る恥ずかしさ
おぼつかぬ足でも逃げは何と無く
白日夢おとぎの国で目を覚ます
日常の非日常の旅景色

篠山市 酒井 真由

お互いに地が出てからのお付き合
朝な夕な夫が見舞いに来て呉れる
裏窓に緑陰なせる一樹あり
幹撫でて樗大樹の気を貰う
ベッドに西日虚心坦懐には遠し

三田市 足立 つな子

打てば響くなんと見事な歳重ね
する事なす事浅はかなれど憎めない
素晴らしい今までどおり遣ればいい
若き日の別れの握手わすれない
人生のゴール間近のプレッシャー

三田市 上田 ひとみ

泥んこのユニホームまだ泣いている
拍手ですきのうの私そして君
おもいきり泣いていたのは僕だった
知らん顔してくれていた何もかも
たくさんでなくていいから抱きしめて

三田市 尾崎 一子

里から届く暑中見舞のスイカ
炎天のスイカパシッと割れてまっ赤
夫と姑の忌法要一日豪雨
なごやかに故人を偲ぶ老いの顔ぶれ
たくましく仕切る我が子を見る遺影

三田市 久保田 千代

趣味の域出ないからこそ楽しめる
追伸にある真心を受けとめる
別姓のまままで体温見つめ合い
打ちあけて許されそうな風みどり
守り継ぐ子のない家を普請する

三田市 多田 雅尚

逆らった父に今なら謝れる
「せごどん」と呼べる総理が出て来ない
予報士がやたらと使う身の危険
サザエさん声優だけは寿命あり
災害の規模も大きくなる日本

牛の真似なんかするなよ鼻ピアス
三田市 谷口修平

食欲の秋に逆らうダイエツト
ギヤグを言うページが決めてある講師
寄り添ってくれる脂肪と背後霊
明日より今日を大事にする余生

三田市 野口真桜子

逃げ道が無いまま夫婦続けてる
避難指示解けて郷川鮭帰る
何故なんだ必死に生きてまだ迷う
スクランブル交差点過去と未来がつきまとう
棺桶をねぎる終活おさめの日

三田市 福田好文

故郷に続くレールがある至福
スイッチバックしながら登る喜寿の坂
神仏を忘れて過ごす絶頂期
泊まるなら枕持参と娘のメール
豊漁だなやけに秋刀魚が膳に乗る

三田市 堀正和

台風一過大根の種播きましよう
熱爛にしろとスズムシ鳴いている
確かめました主治医の出身校
プチ整形シワとりくらいなら許す
しつかりと鉛散蒔いて多数決

万歩計忘れ歩いて損をする
三田市 村田博

あとひと花もうひと花と古稀越えて
目いっぱい生きたおまけと昼寝する
こだわりを捨てれば僕が僕でない
ピアガーデン昔はもつと飲めたのに

高砂市 松尾柳右子

デイ休み長い一日もて余す
ストレスを消すカラオケも5曲まで
裏庭の花も久しく雨に映え
八十路過ぎばかりが集うデイの友
介護士に助けられての楽しデイ

宝塚市 田中章子

おしゃべりがメールばかりでつままない
ご亭主は酒の肴にされクシャミ
友の輪は失敗談で盛り上がり
友の愚痴いつしか自慢にまあいいか
女子会に年齢制限ありません

宝塚市 丸山孔一

戸隠の山の冷気がキュンと鳴る(夏の信州戸隠へ)
戸隠の神の館に霧が降る
戸隠の唐松の森神居ます
熊も出る話聞きつつ蕎麦すすする
海の無い信州で食う握り寿司

西宮市 秋元 てる

「あつごめん」それがきつかけ絆とは
耳遠くする事が無くする笑顔

「今時」には勝てぬと悟り寝るとしよう

断捨離と気取って淋しくなった書棚

孤独死と言うな死ぬ時皆ひとり

西宮市 亀岡 哲子

法師蟬ひと声聞いてまた真夏

ゴキブリも蚊も御無沙汰をした猛暑

酷暑なお遊びに余念ない若さ

いつ死んでもいいわと言うてまた会おね

次の句が浮かんで先の句を忘れ

西宮市 福島 弘子

初物のサンマの色艶足止まる

携帯の圏外の過疎虫の声

晩ごはん一緒に食べよ息子の電話

手作りジャムアイルランドの娘の土産

二十余時間まさかの停電お手上げだ

西宮市 福田 正彦

台風が攫っていったあの酷暑

天災の全てを見せた夏終る

停電で人の弱さを知った夜

義援金晩酌やめることにする

願い事月に映して神に告ぐ

西脇市 七反田 順子

ふるさとのおごじよでいたいカタツムリ

大阪はメトロおしゃれになって来た

ホームには柵が作られないことだ

山頭火花へんろにも一場面

叔母の死に曾孫五歳が涙する

南あわじ市 萩原 狸月

未婚少子絶滅危惧種ランクB

接待の酒は社運を賭けて酌ぎ

二日酔戻る記憶が恥ずかしい

十年後平年並は猛暑日か

台風の逸れて被災のニュース見る

奈良県 安福 和夫

劣化する脳を作句でリニューアル

全身をセンサーにして家を出る

ウォーキングメモは拙句で真つ黒け

被災地を明るくできる句を模索

川柳は運休もなくエンドレス

奈良県 谷川 憲

人として見事に生きる尾島さん

明日香路に秋の気配の風動く

災害を乗り越え咲いた彼岸花

親しかった人の訃報が増えて秋

台風が関空島を孤立させ

奈良県 中原 比呂志

ベン置けば日付が替わる鎌の月

偶像を信じて協道に迷う

天地知るドライブレコーダの証言

一命を救う一列ヘルメット

土石流取り巻き人の小さきこと

奈良県 長谷川 崇 明

沿道のパワーが取らず金メダル

診断をすれば河川は便秘です

竹だけが春を謳歌の散歩道

暑過ぎた夏が育てた赤トンボ

煽がずに手に持つ団扇秋祭り

奈良県 渡 辺 富 子

まあまあのくらしほんのり月に酔う

ああついに来るものは来た目がかすむ

ゆっくりと自分の色で咲くつもり

試行錯誤解のしっぽをつかまえた

反戦の叫びだんだん弱くなる

奈良市 阿 部 紀 子

上高地残暑八月行きました

霧の雨帝国ホテル赤い屋根

車椅子孫に押されて河童橋

雲覆い穂高連峰望めない

深緑親子三代思い出を

奈良市 宇 賀 史 郎

遠雷に夕立を待つ熱い街

点滴の針の太さに縛られて

父親の再婚祝う娘の本音

宮参り毎に年金から無心

カヌー漕ぐ秋呼ぶトンボ並び飛ぶ

奈良市 大久保 眞 澄

照れくさかろうな遺影が若過ぎる

こいさんと呼べばニーハオとこたえる

川柳が落ちていそうな浮世風呂

オスプレイ運がよければ落ちません

震度6記念の盾が足の上

奈良市 高 橋 敬 子

猛暑日はカロリー無視し好きなもの

愛犬のカロリーだけはチェックいれ

目玉商品サイズの合わぬ服ばかり

子の咲くを念じてかけるプレッシャー

外人さんも平気で泊まる釜ヶ崎

奈良市 辻内 げんえい

ためらわずエアコンつけて夏を越す

しんどいと言ってるうちは大丈夫

念のためと言われたことは覚えてる

昭和ギャグ言うてひとりで照れている

子は昭和孫平成で曾孫何

奈良市 山本昌代

和みますやっぱり母は福の神
さわやかな笑顔一皮むけたかな
明日に夢ころりセットして笑う
上がるわヨ弾んだ声で友が来た
独り者同士で祝う誕生日

奈良市 米田恭昌

雑念も生きてる証しする座禪
間違い電話に愛想のいい孤老
不祥事続発はくそ笑む日大の大狸
熱暑台風いじめ足りぬとまた地震
平成を名残り惜しむか天狂う

生駒市 飛永ふりこ

どっこいしょ秋のページとマロンパフェ
マッサージずっこける程腕に差が
黙考を促すような森の秋
ストリートな言葉が醸すお人柄
紅葉にまやかしの恋それもいい

香芝市 大内朝子

驚異的猛暑をよくぞ生き延びた
人生の夕暮れどきの真人間
ふる里をぐっと引き寄すアキアカネ
穏やかに等身大を生きている
秋風にばったり出合う街の角

香芝市 山下純子

はつきりと返事ないのが返事かも
聞き耳をたてて長居の喫茶店
名ガイド聞けば歴史が近くなる
衝動買いサイフが軽い気が重い
叱つたら逆ギレされた孫5歳

和歌山市 磯部義雄

逃げ道を開けて叱っていた積り
秋口になっても暑いが口癖
算段をしながら実家訪れる
利き腕でなくてよかった字が書ける
AIの時代に挑む高齢者

和歌山市 上田紀子

心にもサブプリメントを笑いの句
楽すれば老いはどんどん加速する
物欲を捨てよう肩の荷も下りる
長生きにためらいがいる国となり
保護色に混じり解けてく意気地なし

和歌山市 喜田准一

夏野菜高値止まりで手が出ない
吐き捨てるように言うから角が立つ
簡単にカネを稼ぐと言うけれど
手が震え首も振ってる八十路坂
惜しまれる内に行き度い冥土旅

和歌山市 坂部 紀久子

携帯もテレビもクーラーもある一人
台風が来るぞ来るぞと脅されて
公園の木蔭ベンチの老夫婦
友も老人時々話食い違ふ

民謡と云う趣味今日も満ち足りて

和歌山市 武本 碧

母さんの次に私はお人好し
組んでみて初めて知った手の温み
セレブには遠いが老いの身嗜み
頭一つ抜き出た人の風当たり
夢二の絵ブックカバーにした昔

和歌山市 土屋 起世子

廃屋にもタワービルにも月は照る
一番に行つて後の席に着く
補聴器を忘れにこにこしています
老いの愚痴無視されやる気湧いてきた
恥ずかしいことはみんな歳のせい

和歌山市 福井 菜摘

一行を生むきつかけの風に逢ふ
入つて知る群れの温さと厳しさと
輪の中にも持論は崩さない
マイペースだから見えます絵空事
道しるべ生涯杖となる辞典

和歌山市 堀 富美子

負けん気と弱気がいつも交叉する
ポリユームを上げ台風の音を消す
切り抜けた病に座る肝つ玉
気分転換笑い話を引き寄せる
幸せは趣味に没頭させるとき

和歌山市 松原 寿子

クロスワード埋め切れぬまま人生譜
折々のドラマ愛しく抱く手紙
天空へ叶わぬ夢をちりばめる
心の汚点魔法の鏡写し出す
自由と病天秤にかけ生きている

岩出市 藤原 ほか

ゲリラ豪雨温暖化だけは待った無し
非常時に備えて薬入れ直す
お裾分け我が故郷を思い出す
鼻唄を口ずさみながら生きてゆく
鼻唄を聞きたびうかぶ友の顔

海南市 小谷 小雪

水だけはたつぷりどうぞ地蔵盆
花のない庭に朝晩水を撒く
美容室拡大鏡が読む雑誌
三回忌まだ哀しみの生乾き
さっぱりとしたくて午後の風呂洗う

海南市 堂上泰女

あちこちの部品競争して痛む
竜胆が初秋の風を連れてくる
アスリートの必死に揺れる上層部
お互いの弱さを庇う老夫婦
この先は細くて狭い道つづく

紀の川市 宇野幹子

沈黙を破り石榴の実が爆ぜる
空洞に秘密を抱いている古木
喉仏言いたい事は明日にする
美辞麗句本音は腹でかみしめる
ステッキが邪魔でワルツが踊れない

紀の川市 北山絹子

大粒の涙が秋の星となる
人生の節目に落とし穴がある
悪友の電話待ってる妻の留守
ポリシーを持つているから崩れない
デパートに流行色が満ちている

紀の川市 楠原富香

世界平和委ねる人が出て来ない
川柳の血を通わせる禿びた辞書
リハビリの汗こそ未来との絆
思い切り抱いてほしくて弾み毬
紅させば足音までも弾み出す

紀の川市 山東日出男

腹を据え頭上のリング狙い打つ
鐘の音に我に返ったシンデレラ
叱るだけでは人間は育たない
秀逸の宴会芸で生き残る
裏の顔見せない月のミステリー

橋本市 石田隆彦

鈍行の旅で日本の広さ知る
宇宙への旅はあの世で練りなおす
びったりと寄り添う影も老いている
進む道そつと黙示の父の背な
政権を庇う議員にある疼き

京都市 清水英旺

突然に止まった姉の残日計
ああ骨になってしまった息をのむ
これが人の一生なのか白い骨
骨つばに尽きぬ思いも共に入れ
改めて思う死のこと生のこと

京都市 三宅満子

打ち水で凌げた夏の遠花火
無力ですせめて節約してカンパ
長寿国今ある命愛おしむ
嫁さんがしつかり者で丁度良い
テニス界にエンゼル颯爽とデビュー

長岡京市 山田葉子

揺れている思いをたたむ秋が来る

台風を避けた旅行に追いつかれ

よく遊び加齢のピンチ裏返す

叱られる時に名指しをされている

それなりの距離もめぐりを避けている

八幡市 今井万紗子

母のお迎えなぜかスキップしたくなる

運は天にこの世すいすい泳ぎ切る

夢あまたいっばい食べてさようなら

母とした謎々あそび蚊帳の中

老人も難無く熟すスマホゲーム

大阪府 米澤俣子

喜びも悲しみも等身大で生きている

アンテナを下ろし一日人間休みます

もう競うライバルも無し遠花火

海は詩人金波銀波が夕陽のむ

釣銭の勘定ぐらゐまだ出来る

大阪市 岩崎玲子

情報過多そこからチョイスして生きる

五十肩治る病氣と言われても

老いましたメモ書きばかり増えてゆく

家族留守マイワールドの趣味広げ

人知れず古都の穴場で身を清め

大阪市 磯島福貴子

茶の湯の席しびれ切らしてオットット

衣食住足りてまずまず暮し立つ

嫁ぐ娘へへその緒そつと荷の中へ

夏五輪杞憂で済めばいいけれど

背なに湿布猫の手よりも夫の手

大阪市 内田志津子

きっぱりと過去は捨てたと眉を引く

清濁も苦楽も共に古時計

ひと粒の尊さ旨さ説いた母

スポーツ界パワハラ連鎖止まらない

居住いを正した母のすわり胼胝

大阪市 宇都満知子

大らかな母ときめ細かな父と

台風一過ほつと笑顔でご近所と

自然はもうとつくに秋の顔をして

連れ合いが見るから見てる大相撲

俄雨うふふ可愛い傘を買う

大阪市 江島谷勝弘

大阪に台風来ないはずだった

今いちばん好きなものは諭吉さん

あの頃はなにもかも好きだったのに

お二人さん後ろ姿が似合ってる

広辞苑がどうのこうのと自慢して

大阪市 榎本 日の出

ずぶ濡れになって謝る照る坊主
年金と自由をくれて先に行き
ずば抜けたDNAがなく平和
晩学の辞書には広い空があり
私のブーメラン何故戻らない

大阪市 榎本 舞夢

子や孫に張り切ってるねと冷やかされ
御別れは病気以外に天災も
ニユース見て被害少ない幸思ふ
秋空を見上げ明日から頑張ろう
夫回復宿題も出来外出す

大阪市 大川 桃花

災害は人の手抜き突いてくる
総理選ぶ権利ないのがもどかしい
大きな文字気遣い嬉し子の便り
ちみもうりよう居据わっている永田町
減塩食新作レシビ模索中

大阪市 大治 重信

もみじ手が母を掴んで離さない
朝顔の明日咲く数を目でかぞえ
夫婦喧嘩くすぶりながら三日たち
その上ででんと構えて鬼瓦
手を握りあなたの真意聞けぬまま

大阪市 奥村 五月

ロボットが人間支配もう近い
熱中症忘れ湯豆腐あつい酒
大木になると島出た子が無心
鍋磨く妻の背中が恐ろしい
米国も日本も赤字抜けられず

大阪市 小野 雅美

転んでも荊の道はまだ続く
青信号続き待ってた落とし穴
愚痴こぼす私を許せ空の青
花柄のスカート履けば立ち直る
透き通る海が秘密を浮かばせる

大阪市 笠嶋 恵美

葉増え効いてほしいの順に飲む
立秋に心が動く大掃除
子等別々に二回楽しむように来る
付添いを孫に頼んで救急車
子や孫に頼める距離に住む安堵

大阪市 金川 宣子

台風の機嫌見てから夕支度
新学期ママの気合に背を押され
妻の留守のらりくらりと飲み始め
車座の熟女の宴が乱れ出す
思惑がピタリはまらぬ嫁姑

大阪市 川端 一步

美容院から帰った妻をすぐ褒める

競争車孫の整備が一位取る

ふるさとの山川無冠にも笑顔

居酒屋も地震台風一色で

光つても光らなくても黒子役

大阪市 熊代 菜月

川柳をやつてて良かった今老後

カラフルな思いか友のひとりごと

毛染めする出掛けるあてをさがしつつ

親と子で作るおせちの味二つ

絵手紙の下手がいいよに誘われる

大阪市 古今堂 蕉子

孫の来た日は遠のいてまた二人

メシお茶に反応しなくなった耳

脳異変カラカラカラと音がする

お迎えはまだよ彼岸の墓詣り

なんでもない日の積み重ねこそ宝

大阪市 近藤 正

酷暑に汗極寒しのぐ彬の碑

壇上に主なき青い帽子置く

自然エネいっぱいあるぞ日本国

三千万署名で安倍を黙らせる

松井知事カジノで市民カモにする

大阪市 坂 裕之

採めるのは時代のずれか親と子の

時代越え母の教えが子を育て

良い時代生かされている心地よく

喜寿の絵を色鮮やかに描き上げる

新聞を止めてスマホで済ませます

大阪市 高杉 力

馬鹿になることが出来ないお馬鹿さん

真珠婚と言うらしいです三十年

勲章もムシヨも縁なく生きて来た

一円玉使い切つたる達成感

いつになく張り切る介護認定日

大阪市 高杉 千歩

生きてますスマホしてます車椅子

はんなりは死語になったか大都会

地下街の人出でんでん虫は何処へ

蝶々にも赤トンボにも見捨てられ

アッチ向いてホイ瞳を合さないうりハビリ

大阪市 田中 ゆみ子

秋ですねボジョレヌーボーさつまいも

自惚れも劣等感も財産だ

私にもできる呪文をかける朝

夫にも尊敬できるとこはある

恋の予感老いには老いの周波数

大阪市 田中廣子

台風の爪あときつくフェンスとぶ
満員で座りなさいとやさしい声

ねだられて予定外です ゆきち去る

コンサート幕がおりても余韻ある

我が人生幕引ききれいに飾りたい

大阪市 津村志華子

胸襟を開くと友が増えてくる

本音の中に少しジョークも混ぜておく

びつしりと巻いたキャベツに隙は無い

忠告のきびしい中に温かさ

お神楽の面の様だなざくろの朱

大阪市 寺井弘子

ふる里はいいなあ五感冴えてくる

賑やかに過疎の絆の盆踊り

百歳を目処に残高割ってみる

形だけの式で満足五十年

秋刀魚焼く秋刀魚に合った酒を酌む

大阪市 寺本実

これで底いつも思うがまだ沈む

暑いので帰るのよすと彼岸から

深夜便浅い眠りに誘いこむ

びつたりと腕絡ませてみる火花

反論ができぬ時には石になる

大阪市 原田すみ子

お味噌汁日々のあれこれ浮かべ飲む

年経ても夢持つ友の歩は確か

元氣くれる孫 帰る時持ち去る

クーラーに今年の夏は生かされた

やりくりと献立脳トレにしてる

大阪市 平賀国和

地震台風疼き続ける深い傷

天変地異に思い出し読む方丈記

大地震我が家の備えチェックする

十八歳の告発劇も震度7

人生に数多転がる木の根っ子

大阪市 藤田武人

故郷は唯一無二の処方箋

立ち上がり怒りあらわのスフィックス

記念日と正月だけは神戸牛

誕生日厳しい父と交わす酒

ふり出しに戻れば見える分岐点

大阪市 藤原千恵子

墓石にそつと水かけ呼びかける

草抜きは彼岸に廻そ墓参り

ナスらの清らかな笑み天の声

九月号見るとドスン震度3

なんでかな秋田応援甲子園

大阪市 山本 加お里

朝夕に住職まねて経あげる

長生きの秘訣テレビで学んでる

介護終えこれから私旅にでる

僕生んでくれた日だねと感謝され

おばちゃんはいるだけでいい甥や姪

大阪市 吉内 タカ子

雷の目覚め防災ああ準備

戦中派百歳時代生き延びる

また台風また停電や何の罪

国会まで揺らぎ過ぎます汗の金

歯痒くて拉致の解決世界の目

大阪市 若本 安代

良い人がまたいい人を連れてくる

赤蜻蛉この指いつも空けている

爽やかで苦労話はせぬ貴女

手触りであなたの良さは分からない

アルバムを開き家族の声を聞く

堺市 奥時 雄

横綱でなけりゃ今頃序の口だ

勝ちゃいいはモンゴル勢には当然

大学で相撲のピークやり過ごし

勇み足関取負けた気がしない

一人ではもう立てもせぬ溜席

堺市 柿花 和夫

定年後鞆に代えてレジ袋

反抗期褒められてから尚無口

天災続き避難袋と添い寝する

悪筆も齢を経ると味になる

百計を案じて予定まだ立たぬ

堺市 源田 八千代

何故斯うも災害惨事続くのか

停電に不自由な時代甦る

台風前後ご近所さんに助けられ

玄関飾り嫁のセンスに任せます

しがらみを捨て断捨離に本気出す

堺市 齋藤 さくら

わたくしを氣遣う人が居てくれる

カルチャーの仲間に助けられている

台風が去って青空美味いお茶

なんとなく読めて書けない文字が増え

悔しさをバネにするには細い腕

堺市 坂上 淳司

歓呼の声に送られ行つた学徒兵

どの国の総理かと問う原爆忌

総理よりキラリ少女の反戦詩

戦争を知らぬ総理の改憲論

小一の僕を狙つたグラマン機

堺市澤井敏治

茨木市島田誠一

暑氣払いさて一献に華胥の夢

大落暉無垢なところが蘇る

飲んで寝て明日考える葦である

サギ電に学ぶ父母への見舞い

難聴を見透かすような憎つき蚊

堺市遠山唯教

子をふたり生んで良かったなとおもう

諍いの傷をのこした虫メガネ

敗戦の過去は未来のみちしるべ

親友を道連れにして陽が沈む

丸い背で今日も臍を漕ぐふたりです

堺市内藤憲彦

新元号へじつくり戦後読み返す

アレアレソレソレソレの二刀流

テネシーワルツ母が成りきる江利チエミ

簡単にうっかりなんて言わんとき

パワハラセクハラ後の祭りで済まされぬ

堺市矢倉五月

サヨナラも言わずに消えた夢いくつ

医者いわく現状維持は上等だ

他人だが案じる酷暑ガードマン

惚けた者勝ちと不覚に思う日も

子の誘いいつもわたしはスポンサー

警報とJアラートで夏が去き

暗転の里呆然と見る惨禍

素人に手柄取られた捜索隊

図書館で舟漕いでても腹は減る

肩の荷が降りて男の色気失せ

貝塚市石田ひろ子

本当はあなたと話す独り言

心まで染める竜胆の紫

台風一過何とか無事でさんま焼く

食べ頃になつてらつきよう子に送る

風鈴の夏の未練を抱いて鳴る

河内長野市大島ともこ

青い星に生きてる意味を抱いて寝る

お見舞いにたつぷり準備笑いネタ

風穴を一つ二つと嫁姑

そもそもは標など無い一人旅

疼き出す古傷初心連れてくる

河内長野市梶原弘光

2時からの安いジョッキで盛り上がる

催事場の便利グッズに目が無くて

検診がマルでお昼はロング缶

夏バテの蚊に点滴を所望され

気分迄一新風呂のリニューアル

河内長野市 木見谷 孝代

ご神木さえも台風なぎ倒す

優先順位決めて予定を立てる朝

毛筆の手ほどき孫と近くなる

絵手紙へ季節先取りして送る

読みごたえあった最後のページ閉じ

河内長野市 黒岩 靖博

表札もポストも豪雨洗い去る

廃校で悔しさ辛さ有り難さ

朗らかな生徒の声に癒される

台風一過瓦飛び散り庭は荒れ

諍うてメールで会話する夫婦

河内長野市 辻村 ヒロ

付き添いの娘が母の顔になる

老いたとてちよっぴり残す恋心

風鈴の侘びさびやっと感じてる

歳重ね人柄光る苦勞人

なんぎやな病増えても遊び人

河内長野市 藤塚 克三

爽やかな記事を見つけて妻とお茶

現し世は斜めに見たら判るかも

踏ん張るもヒヨイヒヨイ進む老いる坂

隙間からまるで木漏れ日記憶力

不義理したかけらが刺さり胸疼く

河内長野市 村上 直樹

口うるさい妻は元氣の名コピー

予定表三日月紙の不安感

海鼠腸をつまめば酒が止まらない

老生自己研鑽は繩のれん

ままならぬ時はワハハと朗らかに

河内長野市 森田 旅人

戦争はするなと彬もう八十忌

残照の命見つめる砂時計

帰っておいでとあれもエールだった

添えた手を払う元氣をよしとする

法要に悲しくたつて足しびれ

河内長野市 山室 光弘

格好良過ぎるこれぞ誠のボランティア

海老反りで歌う校歌に玉の汗

首の皮一枚だけで涼をとる

王手飛車気合を込めた駒の音

始末書はつなげた首の誓約書

岸和田市 岩佐 ダン吉

偶然の勝利と言うが汗光る

最後尾彬の光見て歩く

続くものあって私の道になる

直線を走り疲れてないですか

手を打とう私が負けたことにする

四條畷市 吉岡 修

先送りしとけば時が片づける
真つすぐに行けと聞いても迷つてる
無器用でロマンズの芽がまた消える
迷つてるハートを押してキューピッド
恐ろしい裁きが待っているあの世

吹田市 木下 敏子

もう一度あなたとボート漕いでみる
頑張つてお尻歩きで足鍛え
減塩で足腰元氣出るならば
連休もひとりのんびり本ひらく
台風に負けてしまった花の彩

吹田市 須磨 活恵

おかつぱの私に逢つた里帰り
猛暑をのり越えましてほつと秋
草むらで暑さ残して虫の声
満月をそつと抱きしめ秋を噛む
平凡と言う日がいちばんありがたい

吹田市 野下 之男

大統領部下はほめずになすもの
高齢者今の新語に追いつけぬ
台風はよほど日本が好きなのさ
鹿だつておれの家だよ言いたい
よくやるね夜も寝ないで扇風機

高槻市 片山 かずお

気がつけば空の青さが増して秋
彼岸花秋の彼岸を忘れない
豊穡の秋を演出する稲穂
赤トンボ見つけて秋だと思ふ
春とは違い秋の七草食べられぬ

高槻市 島田 千鶴子

ピーマンの嘆きひき肉詰められる
上機嫌軽く一杯飲んだだけ
逆風もささり躲せる老いの知恵
プランター最後のトマトもいで秋
伝統の祭りもバイト頼みです

高槻市 初代 正彦

終章へ余白しつかり空けておく
百歳の恩師を囲むお茶の会
ひな壇へ無理して座るちゃんちゃんこ
台風に甘い備えを叱られる
お茶の間の主役はおどけ口の孫

高槻市 杉本 義昭

土砂降りのなかを会いたい人がいる
被災地に元氣与える大花火
極楽に太いパイプを引いている
個人情報隠し人情薄くなる
ぐちゃぐちゃの昨日の鬱をゴミに出す

高槻市 富田 美義

怠けもの見事たけてる手抜き術

賀状にも定年有るの80歳

この俺の夢まで狙うこのカルテ

消去法のネタ教材に住所録

フルムーン見知らぬ町じゃ腕を組み

高槻市 富田 保子

平成の古い手探りで生きてゆく

台風にめげず日本の米作り

パソコンがソツポを向いた台風後

皇太子のお声にわいた甲子園

食欲がないので今も呑んでいる

高槻市 原 洋志

ほとぼりが冷めたら外すサングラス

再会に少しアレンジする履歴

世話人はノンアルコールでも達者

駄菓子屋の夢をぐくりとラムネ水

ちゃらちゃらと生きる破れた傘さして

高槻市 松岡 篤

主夫業も慣れて上手に特価買う

季節感歩きスマホに奪われて

田舎道テープが喋る空のバス

よちよちの孫は感度量産機

今流を出好きなきな妻に学んでる

高槻市 安田 忠子

予定表いっぱい埋めて日々豊か

予定通り鹿兒島旅行無事終る

さくら散る成長の果て知覧の丘

逆を行く何時もと違う新しさ

成長した孫見ていると元氣出る

豊中市 上出 修

トランプの指一本で世が動く

危険な夏バテでしまった蚊も蟬も

AKB顔声しゃべり皆同じ

もう10年若けりゃ君に恋してた

山鉾に文化漂う祇園さん

豊中市 藤井 則彦

菌並びまで朗らかになる年金日

黄泉の旅へ備えて励むウォーキング

僕だけは大丈夫です熱中症

次の一歩へ向けてひとまず深呼吸

べったりより寄り添うほどがいい夫婦

豊中市 松尾 美智代

台風一過隣停電我家無事

今は幸せ先は見えない霧の中

的少し外して古希を生きている

愚痴を言う度こころ段段枯れてゆく

相棒が居ても寂しさ埋まらない

豊中市 水野黒兎
明日へと今日をリセット仕舞風呂
珍しく本読む人のいる車内

金魚田は金魚の故郷水豊か
青空は希望の色に満ちて秋
濁声が屋台へ誘う秋まつり

富田林市 片岡 智恵子

適当な嘘はとつてもむつかしい
秋の団欒いつでも死ぬる友ばかり

よく見よう名無き草花輝いて

史上初ブラックアウト北海道

墮落かも気儘に生きて日が暮れる

富田林市 関 よしみ

白に白重ね糊代増す夫婦

平和の灯迪れば宇宙ステーション

広い視野もつて綿毛の旅続く

強敵に尾つぽを巻いて知る忤怩

萩こぼす秋の真ん中四分音符

富田林市 中村 恵

手を繋ぐちよつとおしゃれな老夫婦

自分の子自分で育て悔いは無い

息継ぎが上手にできてまた泳ぐ

自惚れの素顔鼻から朽ちていく

躰り寄る不埒な老いを切り捨てる

富田林市 山野寿之
雑音の中で暮らしている安堵
絵日記に夏夏夏がてんこ盛り

家計簿の埋蔵金でフルムーン
成長は娘が勘定を持つ感謝
私がわたしに帰りつく徳利

寝屋川市 籠島 恵子

退屈を知らない人が持つ穴場

御奉仕のように聞いているよまい事

おしゃべりも居眠りも来ているサロン

今どきの太郎花子を見つけたわ

いぶし銀目差す齢でありたくて

寝屋川市 富山 ルイ子

暑さに負け体弱つていたらしい

二人に一人痛になるとはおそろしい

次次と友亡くなつていく哀しくて

ながいきの家系だろうか そうなのか

逝く先は極楽と決め過ごす日

寝屋川市 平松 かすみ

夫偲ぶ親を泣かせた足跡を(三回忌)

新聞の小さい広告から奮起

十六歳軍医になると満州へ(S十八年)

大連から旅順でかい汽車に乗り

近眼がネックで軍医にはなれず

寝屋川市 森 茜

かたつむりのろのろかたつむりの命
残照がにぶくすだれのすきまから
食べごろにひとつぶ残った辣韭漬
最短コース降りたち珍珠買っただけ
彼岸まで小さな舟にたゆたうて

羽曳野市 安芸田 泰 子

庭掃除蟬の骸は埋めておく
ある予感今日の外出止めさせる
孫の手を引けば頑固の影もない
ときめきを忘れた夫婦のフルムーン
立つ位置を変えれば温い陽が届く

羽曳野市 宇都宮 ちづる

信号機傾いたまま赤灯す
ハザードマップ広げ夫婦で確認し
きのう見舞われ今日見舞う北の友
孫達に手順教える墓参り
ろうそくに父母の名浮かぶ孟蘭盆会

羽曳野市 徳 山 みつこ

朝焼けをひとり占めして幕があく
冷水ゴクンありがたいありがたい
涼風にもらったプラン徒歩の旅
物忘れひとりで笑いこけている
人間の輪で花が咲く花咲かせ

羽曳野市 中 川 ひろ介

句会大会ラッシュに作句つらくなる
病み上り世の中全てフレッシェに
生き様はカッコ悪いが心晴れ
生きてるかぶつきらぼうな見舞くれ
心柱ゆれて五重の塔守る

羽曳野市 仲 谷 真

夏の旅千歳に行つて帰れない
北海道地震台風たいへんだ
刑務所を逃げた犯人捕まらず
御堂筋いちよう並木がきれいです
銀杏を茶碗蒸に入りたいな

羽曳野市 藤 原 大 子

無器用が尋ねられたらついでな音
つぶやきをなぐり書きして日を終える
何度頭打つてもしてお節介
惜しまれる丁度のとこで終れたら
調子良い話八割引いて聞く

羽曳野市 三 好 専 平

夏遍路ひとり峠へ消えにけり
生姜湯に汗を流して岩屋寺
石鎚の女人結界万緑なり
口噤む社会は痩せて死んでゆく
存命に弄ばれん夏木立

羽曳野市 吉村 久仁雄

便利さに生きて不便を遊んでる
カスミ草添えれば花が華になる
星の数にこだわっている味音痴
見え透いたお世辞が心地よい齡
最後列にいて行く末を見すえてる

東大阪市 北村 賢子

里の友声は変らん笑い合う
願わくはそつと普通に生きる明日
このご時世日日を明るく生きぬこう
不様でもいいまっとうに生きている
いただいた命悔いなく消化する

東大阪市 佐々木 満作

聡太と結弦とてもクールなナイスガイ
人命を過誤では済まぬ医療ミス
虎フアンの心に沁みる虫の声
トップの座我が物顔に采を振る
立ち位置を変えると人の苦が解る

枚方市 丹後屋 肇

予定表計報通知が割ってくる
福祉施設預けて悔いる募参り
支えたら甘え出すから突き放す
強がりな夫の肩を揉みほぐす
災難の年に生れた記念の子

枚方市 二宮 山久

毒舌をはいて世間を狭く生き
リフォームへ屋根の瓦が光ってる
孫からの便りカナダの風の色
この夏も元気で越せた露天風呂
里帰り裸で話せる同級会

枚方市 二宮 紫鳳

満月を愛でてふんわか夫婦酒
ヤレ嬉し落した携帯戻り来る
大仕事終えて平成締めくくる
校庭に戻りし子らははしやぎ声
シーサイド忘れ去られた夏帽子

枚方市 藤村 亜成

窓枠の範囲で台風の凄さ観る
守らねば身をほろぼすことは皆まもる
失態を税で払う逃亡者の懸賞
成功の裏で繰り返してきた挫折
無言で迫る亡父の遺影にある威厳

枚方市 山口 弘委智

駄句並べ恥じることなし塔まつり
したたかに言葉磨いて句を競う
強がりの妻の弱気を垣間見る
川柳が好きだけで弾んでいる会話
終章にまだ逆転打打つ気概

藤井寺市 太田 扶美代

朝の光はいつもわたしに味方する
会えばまだ今もドキドキする筈
頑張れば喜ぶ人が居てくれる
夢だった、うたかただった 嘘だった
生涯学習卒業のない旅路

藤井寺市 鴨谷 瑠美子

リズムから離れてしまふ退院後
仕舞うのが得意で昨日さえ忘れ
思い出が時どきそつと側にくる
シニアライフ領きながら恥じながら
秋をつめ込む雑学の小引出し

藤井寺市 鈴木 いさお

種蒔こう今日は一粒万倍日
親切な人に出会った日の愉快
ブライドという厄介な付属品
誤作動はしないでおくれ心の臓
旅立ちの息子へ餞の一句

藤井寺市 高田 美代子

準急が止まってくれる町に住み
もう誰も海にはいなくなつて 秋
大会があつて見ている時刻表
震度7何処に住んでも地震国
ざんなんが転がる頃だ風が吹く

藤井寺市 吉田 喜代子

折れそうな体力氣力杖がいる
目覚めてはいるがベッドが放さない
宇宙からゴミ一斉に落ちる夢
台風は日本に路線ある如く
思い出のねぶたに親友はもういない

藤井寺市 若松 雅枝

子ら巢立ち雷親父丸くなり
孫の守り塗り絵で遊ぶ風さやか
墓碑囲み亡母慰める彼岸花
台風一過裏の太木折れたまま
地震国北の端まで追つてくる

松原市 市川 雄太

今だからこそ平和を護る行動を
二十四年ぶりなつかしい場所訪れる
辺野古に住むジユゴン守れと声を出す
熱い汗は今この時を行く証
九条を守る人が次期総理

松原市 森松 まつお

ここだけの話と言うがくだらない
飛行機が嫌いな妻のパスポート
パスポート何かの役に立つのだから
ひらがなでくとうてんないめくるくる
パソコンは偉い何でも知っている

前髪の仕上りようでさまる朝

古い二人余った椅子がじまになる

お互いにつかずはなれず夫婦道

犬猫がゴロンと伸びる昼下が

腕組めば介護かとみる散歩道

箕面市 大浦 初音

電気水当り前では無いと知る

停電でニュースばかりを聞いている

道隔て反対側はついている

建物の被害怪我無いだけでよし

ネバーギブアップ試練に湧くフアイト

箕面市 出口 セツ子

停電で陸の孤島になった箱

高潮が舐める孤島のエアポート

逆さまの絵本すらすらおにいちちゃん

彼岸花残り時間は言わないで

千の風南の島の父が来る

箕面市 中山 春代

肩寄せてキャンドルナイトたまにはね

チンチロリン互いの無事にアンコール

ぼーとした頭も少し戻り秋

初物の秋刀魚味わい酒すすむ

亡母好きな桔梗今年も咲き偲ぶ

箕面市 広島 巴子

政治屋はムンクの口を閉じたから

感性が鈍くなっても生きられる

冗談を言うて医者や瞳じつと見る

隙をみて横目でカルテ見る心算

歩けない足とテレビの百名山

八尾市 内海 幸生

酷暑のつぎ冷し過ぎだよ大雨よ

姉見舞う孫とドライブ生駒越え

食欲の秋にはほしい里の味

左官職の子は毎日を泥だらけ

小さい秋見つけたけれどまだ暑い

八尾市 宮崎 シマ子

近畿直撃最強の台風が

ガラス戸が捲るふるえがとまらない

私のこころ台風一過とはならぬ

心に灯ともしがんばる闇の中

被災地へなごみの快挙あたたかい

八尾市 村上 ミツ子

日本語も自信のシヨットなおみちゃん

緞帳が舞台の格もぐつと上げ

うちの椅子座り心地は中くらい

波立せずウフフ可愛いく歳をとる

秋立つとや々と書けます清かです

八尾市 山根 妙子

岡山県 高岡茂子
思いきり布団で背のび今日もやる
病院に一人でかよう元気あり

ランチの誘い待ってましたとすぐに乗る
生命線年々長くなっている
ケイタイも財布も鍵も首にさげ

岡山県 田中 恵

国訛まだふるさとの根が抜けぬ
同じ事茶を飲むたびに聞かされる
控え目に生きております糸とんぼ
スキップが出来た調子に乗り過ぎた
鼻歌が流れる今朝の目玉焼き

岡山県 山縣 のぶ子

同期会次回を約す手が温い
天変地異お手柔らかなをただ祈る
ふるさとのピョンピョン跳ねた蛙老い
石頭ボンと叩いて踊らせる
句づくりを怠たれば皆そっぽ向く

岡山市 工藤 千代子

薄い味好む夫の妥協癖
おもちゃ箱少し湿ってきたみたい
死にたくはないが生きたくもない古稀
七月の雨に骨まで叩かれる
日傘くるくる遠い景色を舞っている

岡山市 丹下凱夫
晴れているので鶉の声よくひびく
九条を潰してならぬ赤トンボ

いっぽんの樹のさびしさを知ってるか
風貌に似ぬ優しさをもて余す
ひとりの荒縄でなんでもできる

岡山市 永見 心咲

有酸素運動糸をほぐすまで
子の迷い父は苦塩をひとしずく
消しゴムと突っ支え棒が離せない
誕生日ごとに遺影のでき不出来
猫の名もみんな覚えた鳥ぐらし

岡山市 前田 恵美子

箱の中お呼びくるまで我が天下
小鯛なら手軽なおかず今日も暮れ
何事も持続しすぎて辞められぬ
あの孫もこの孫も越すばあばの背
台風よ日本跨いで飛んでゆけ

笠岡市 藤井 智史

迷わずに川柳界へダイブする
川柳界はワンダフルワールドだ
川柳の底無し沼も心地良い
歌えないときも年中作句する
川柳も介護もボクの仕事です

広島市 岸 本 清

身を守る術を確認防災の日
備えればいつか役立つ時がくる
助け合う姿に未来が見えてきた
晩学で脳細胞に活入れる
きれいだといひね瞳も心根も

竹原市 石 原 淑 子

想い出と恋しい人と秋彼岸
北海道支援コイ募金握手した
母の日も敬老の日も祝われて
少女にも七十二にもある苦悩
被災にもめげず新米出来上る

竹原市 岩 本 笑 子

一期一会雲の流れに逆らわず
脳トレも薬も私の必需品
百均で買った脳トレやめられず
パーキンソンよろける足よ夫の手よ
何度目の病 脱皮を恐れない

三原市 鴨 田 昭 紀

農一筋に暮らすカッコいい生き方
この辺に残るわたしの少年期
独り飯食べて無口の日が暮れる
もったいないがニッポンの辞書から消える
気がつけば遙か昔になる昭和

岩国市 上 村 夢 香

深夜便午前三時の声を聴く
午前様二階に梯子かけたまま
日替わりのヒーローがいる大逆転
記憶力友に委ねて楽になる
空地にはソーラーパネル過疎の町

宇部市 平 田 実 男

泣き砂は浜の汚れの悲鳴かも
気楽でもどこか淋しい妻の留守
酒の力借りる男が小さく見え
終の日が分からないから生きられる
総裁戦世論無視した票になる

下松市 有 海 静 枝

喉元の異物消すひとりカラオケ
御浄土で待つてる人と語る母
ごった煮で良い味になる人と人
ガンバレにムカついた日の膝小僧
いち病が時の流れを濃くする

防府市 坂 本 加 代

飼ひ猫も爪砥ぐ野性持っている
子を成さぬ熱血漢の国想い
マドンナと持ち上げられて三次会
井の蛙空の形は丸い円
トイレまでつるんで行かぬ自立心

鳥取県 石谷 美恵子

あの人のプラス思考にいつも惚れ
瘦せたいま太った頃がやはり好き
嘘もいろいろ可愛い嘘は目をつむる
けんかにもならず無視されている
転ぶなとよろける足に言い聞かす

鳥取県 斉尾 くにこ

閉じこめたことが光をおびてくる
裏側の惹かれてしまう佇まい
雨が降る自分の撒いた種に降る
怠けたい自分を励まして歩く
ていねいにていねいにクセ文字を書く

鳥取県 竹 信 照 彦

雨貫い枯れ木がホッと息づいた
熱中症の恐怖から解放だ
畑作業やつとやる気も湧いて来た
総理選ぶのに国民そっちのけ
涼風に畑作りと句作りと

鳥取県 西 谷 悦 子

日に何度トイレの花に癒される
一番の仲良し夫酒であり
声かけた旧友がどなたの貌をする
負けん気が齢とる度に逃げてゆく
仮面と仮面いつの間か取れました

鳥取県 細 田 裕 花

友の愚痴明るく聞いて笑い合う
原点に戻ろうとして戻れない
涼風が欲しい活字がかすんでる
若木にはしつかり清い水をやる
追い風が問題点を見落して

鳥取県 松 川 行 男

二の足を踏まず浚えた小銭です
盆が過ぎ墓のお供え始末する
人影が消えた墓地にも秋感じ
書店には日参してる顔なじみ
積ん読も秋風吹いてくずれそう

鳥取県 山 下 節 子

一枚の画布にあなたを閉じ込める
赤青黄鬼は絵本の中に居る
宣伝の団扇を振って盆踊り
すし飯をつくる時だけいる団扇
タイムスリップして脳が活気づく

鳥取市 池 澤 大 鯨

やりくりは生きてる証つづけます
やりくりしさらにへそくりさすが妻
七十代に八度入院生きてる
三世代同居して羨望のまゝ
免許返納ひきこもりかと疑われ

鳥取市 奥田由美
国民年金に子の家族もすがりつく

味付けや化粧も嫁は濃い目好き

羞恥心を少し残したオペの医師

テレビよりうるさい夏の孫帰省

病室で死亡保険を話す妻

鳥取市 加藤茶人

病から腹は八分でウォーキング

失敗と紙一重かも武勇伝

差し引きはゼロかも知れぬ罰当たる

日本人薬漬けより薬好き

念仏の意味も分からぬまま唱え

鳥取市 岸本宏章

梅花藻が戻ってきたと故郷だより

人生百年八十路がピークかもしれぬ

一人でも異議を唱える手を上げる

国民は忘れていない「モリ」と「カケ」

九条に軸足置いている平和

鳥取市 岸本孝子

八人が二人になった姉妹

カタカナ語しみじみ老いが身にしみる

手間かけず見映えいいのが茹で卵子

どの家も芋の子ほどがいた昭和

灰汁抜きもほどほど灰汁も薬です

鳥取市 倉益一瑤
うわさ話団扇が耳に寄ってくる

わたくしの絵にはことさら赤を選ぶ

ドジ踏んだ話が弾む紙コップ

帰る家あつて伸ばしている羽根よ

三流で無口で音痴そこがいい

鳥取市 田中天翔

地上の七日楽しかったか蟬殻よ

喜寿間近画布いっぱい夢描く

何回も削られ画布は虫の息

紙コップ子等と遊んだ糸電話

散歩中帰ると言つて座るポチ

鳥取市 棚田大

大自然たるむ社会へ喝入れる

晴れた空憎まれることあるんだな

名文句俺唱えても無視される

紙コップポイ捨てられて怒り出す

もの忘れ得意と言つて生きて行く

鳥取市 谷口回春子

台風も熱中症で迷走し

孤独にも怯まぬ二歳生還す

本心が読めぬスマホのラブレター

酷暑にも怯まぬ球児勝利の女神

幼児語の飛び交う我が家保育園

災害に平均寿命下がりに出す

鳥取市 永原昌鼓

苦悩した跡まざまざと画布の下

どんな色絡め染めるか孫の画布

乾杯の音も冴えない紙コップ

百年の感動くれた甲子園

鳥取市 中村金祥

寝坊した朝が眩しい初老の身

世の中を斜めに見れば気が楽だ

ブラックアウト百年前は当たり前

東風吹いて砂丘の画布も煽やかだ

被災地で命つないだ紙コップ

鳥取市 夏目一粹

一生に一度大法螺吹きました

可も不可もないが心配ごとが湧く

美しい人と相席して無言

影法師ボクの癖知り真似をする

波風が立たないほどにバカになる

鳥取市 平尾菜美

成り行きを畳んで今日も日が沈む

久し振りがつすり眠るよいとまけ

趣味仕事おたがい様と歩み寄り

介護妻丸くなってね やり切れぬ

やっと出た笑顔に胸をなで下ろし

お日さまの恋か三十九度二分

鳥取市 福西茶子

蚊も蟬もボクも熱中症らしい

恋をして愛し空気の同居人

転ぶのも理解するのもスローモーション

泣きません笑ってアナタ送ります

鳥取市 前田楓花

本当は穴の開くほど見ていたい

負けないと思った足もよろよろと

幸せですか日本の高齢者

太陽が心の弱さ見透かした

幸せのバラは驚くほど綺麗

倉吉市 猪川由美子

恋のときめき燃やし続けて老いぬコップ

負けた振り死んだ振りして身を保つ

腹立てるとエネルギー要るので止める

両陛下激務に耐えておいたわし

パラリンピック理解広がり愛生まれ

倉吉市 山中康子

大震災水水水が物をいう

人間のおごりへ台風のイケズ

こけぬよう力む背筋と足の底

いやな夢逃げ出したくて待つ明日

大台に乗って息弾ませている

米子市 後藤 宏之

仏さんだけにこっそり打ちあける
昼寝中果報いきなり舞い込んだ
やさしさを遠回りしてつかまえた
こうなればハンディそれを武器とする
マイホーム買うため歩兵蟻のよう

米子市 後藤 美恵子

天高く胃痛妄想吹き飛んだ
お早ように親子の無言劇は幕
特売場かつての足の鈍り知る
政策を誤嚥せぬよう噛み砕く
少子化に産後のウツが痛ましい

米子市 竹村 紀の治

懐かしい人連れてくる海ホタル
海鳴りが続く帰して呉れるまで
笑ってはいるが手元に金が無い
メカニズムよりは知りたい地震予知
欠席に丸したあとに熱下がる

米子市 中原 章子

猛暑日がいつもと違い怖くなる
生きている今を豊かに噛みしめる
ニュース見て笑ってばかりいられない
列車旅先ず体調を整える
平成の最後の夏を泳ぎきる

米子市 成田 雨奇

賞味期限ちよつと風味が変わるだけ
十和田湖に智恵子はお尻出したまま
叔母一人来るために組む盆提灯
居酒屋のママがお帰りなさいと言う
ちよつと出てくると晩酌お預けだ

島根県 伊藤 寿美

楷書しか書けぬ男にかなで添い
仏飯に越し方を盛る十七忌
仕来りもわたし限りの蔵の紋
八寸の通し柱に亡祖父の声(築百五年)
昭和平成生きた米寿にある矜恃

松江市 松本 知恵子

冷房を出れば自由な秋の風
麦わら帽秋はストンとひとりぼち
童謡をきいてひと時ほぐれてる
夜間工事終え男らの笑い声
猫じゃらしじゃらじゃら人を寄せている

松江市 松本文子

大きな人の影で背のびをする私
悠々と生きてみたいなトンビ舞う
断捨離も済みあの世の句会楽しみに
ワルツ踊ったつもりよるけただけだった
熱中症怖く失礼致します

出雲市 伊藤玲峰

メモの謎解けて漫ろに湧く追慕
線一本足してあなたに辿り着く
君の言葉夢中にさせる味がある
水溜り月が遊びに来てくれた
髪染めて友の葬儀に泪涸れ

出雲市 岸桂子

不器用に生きて卒寿へ坂のほろ
一步退くもつれた紐がほどけ出す
抜き抜かれするライバルと磨き合う
不器用に生きて迷わず遠回り
ハンガーに明日の勇氣ぶらさげる

出雲市 小白金房子

三十五年尼師の軸にある深み
（たかまつ川柳三十五年目）
敵味方持たぬ円座の趣味仲間
ペンを置く時計深夜の音で打つ
落書も今は思い出なる宝
連発の花火湖岸の宿浴衣

雲南市 菅田かつ子

疲れ気味残暑見舞の五七五
擦れ違う烏に小首かしげられ
お年寄り役者揃った頼もしさ
お話会とどころが聞こえ兼ね
大波小波越えて唯今ダイヤ婚

雲南市 松本昌

三十分待つ乗替えのローカル線
駐車場無料にしても人は来ず
とっぷりと日暮れて淋し過疎の町
義理人情今どき叫んで効果なし
雄大な流れを止めたダム之音

高知県 小澤幸泉

喜怒哀楽全てを赦すデスマスク
丸い顔やがて四角に変えられる
五十年の空白埋める旅に出る
東京と高知さ迷う夢うつつ
老いの海に寄せては返す躁とうつ

土佐清水市 辻内次根

一日を来たのは盆の僧一人
怠けぐせ枕は丁度よい高さ
係累のいない八月の静けさ
風は九月に潮騒を聴いている
人の世や庭の月草一面に

東かがわ市 川崎ひかり

夫逝って時計の針の逆回り
淋しさに生きてる感謝忘れる
逆境に生きてく力試される
逆らった若い私に若い母
逆境を越えた昭和の座り餅瓶

松山市 栗田忠士

農の血が畑と鍬を恋しがる
自画像もお色直しをしたくなる
回顧録やり直したいことばかり
すんなりと決めてあつさり諦める
腹筋に腕立て百歳のパワー

松山市 古手川 光

暑いとばやき寒くなったら又愚痴る
非情無情豪雨台風大地震
想定外想定外は逃げ口上
ボケてへん言うてはるけどあんた誰
コチコチとばくの余命を刻む音

松山市 宮尾 みのり

方向転換一步前進するために
少年の胃袋満たす回る寿司
ばばと孫支え合いつつ夏終る
眼鏡かけ替えて読書の秋にする
筋だけはマンガで知っている古典
松山市 柳田 かおる
やる事がいっぱい時が愛おしい
生きている証たしかにゴミが出る
ラブミーテンドーをずっと流してお葬式
ブラックに少し加えたのはジョーク
暑かったなあ虫の合唱聴きながら

大洲市 中居善信

手抜き工事を暴いてしもた水だった
議事堂の小劇場はもう飽きた
23行書いたハガキにある温み
暑いから今夜も作る焼きナスビ
無花果へふと朱夏さんを思ってる

西予市 黒田茂代

木犀の香雨の隙間を抜けてくる
実り多いこの一年を思う秋
可愛い絵手紙へ絵手紙で返事
愛憎を捨てたら軽くなれるのに
結界の前で逡巡してばかり

西予市 西田美恵子

百歳を目指しスクワットを追加
バカだなあと一緒に泣いてくれた人
息吐いて吐いて体重計に乗る
ふつくらの女が好きと言われても
徘徊が始まる僕の懐古趣味

(前月分) 岡山県 山縣 のぶ子

川柳に追っかけられているのろま
ひとりぼっち退屈すぎて怖くなる
片付けて序列が変わるから迷う
留守番の草は悠悠のびまくる
山歩きソフトクリームほおばって

川柳塔の

川柳讚歌

187

上方芸能評論家 木津川 計

私に似たのだ孫の大言壮語癖

古今堂 蕉子

大言壮語を国語辞典はこう言う。「できもしない大きなことをいばって言うこと」と。そりやあそうだろう、このひとは古今東西なにもかも一堂にした大言壮語な名前の持ち主である。その癖がお孫さんにある、となると蕉子さんは誰の癖を受け継いだのか。ご尊父の西尾葉さんはかつて川柳塔の主幹で大きな身体にして柳号を葉と称したいじらしい方だった。その血でないとしたら、お孫さんが似たというのも、あつ、これも大言壮語なのか。

包装に英字新聞とつておく

高杉 力

相撲取りの「四股名」はあて字で本当は「醜名」なのに「醜い」を嫌ったのだ。が、醜は「みにくい」ではなく悪七兵衛景清の悪と同じで勇猛を意味した。だから戦中よく言われた「醜の御盾」は天皇を守る勇猛な兵隊のことだった。

た。相撲協会は本来の醜名でいいのに誤解を恐れて四股名と書き繕ったのである。つまりはいい格好をしたのだ。一般に東京は「格好いい」と褒めるが大阪は「ええ格好すな」と貶す。力さん、英字新聞など糞食らえです。

じいちゃんの童話は途中から訓話

柿花 和夫

ジョン・ウエインは右派で鳴らした。西部劇に出まくり、なぜインディアン土地を奪ったかをこう言う。「新しい土地を必要とする人間が多勢いたのに、インディアンたちは利己的にも自分たちのためにその土地を守ろうとしたのだ」。じいちゃんの訓話も大方この論法に似て、「桃太郎」を読んでも利己的な鬼どもをこらしめに行ったのだ、になる。訓話を垂れたがる人物には右派が多い。和夫さん、童話でお孫さん達には楽しい夢を一杯に。

切り札があるのでモナリザは微笑

栃尾 奏子

由来モナリザは何者か、諸説が飛び交った。曰く、聴覚障害者である。いや喪に服す女性だ、の他、高級娼婦、人類の恋人、神経症を患うタ・ヴィンチの産物、梅毒患者、伝染病患者、麻痺患者、歯痛患者、脂肪酸の蓄積で右目に脂肪腫がある…。モデルは誰かでも十人以上の名流夫人が挙げられた。なぜ微笑を

浮かべているのか、切り札を持つているからだ。その切り札とは？奏子さんは知っているが、貴方の夢を壊すからと教えてくれない。

おだやかな人に戻った年金日

竹村 紀の治

年金日、ジャンジャン横丁の串カツ屋は満杯になる。昔はタバコを何本かずつバラ売りにしていた横丁で、通天閣を見上げワイも阪田三吉みたいになつたるわい、と串カツで安酒を飲んだ。戦後大阪の歌が通天閣と法善寺横丁をだんトツにうたつたのは根性を燃やし、故郷の村の鎮守の神様を思い出してすさむ気持を慰めたのだ。以来幾星霜、年金を受取る年になり、おだやかな人にもなつた紀の治さんである。長い間、ご苦労様、どうぞお幸せに。

小さい方少ない方を選ぶ歳

緒方 美津子

乞食がレストランでピフテキを食べているのを見て、金持ちの夫人が驚き、「まあ、あなた、ピフテキなんか食べて」、乞食はその時少しも騒がず、「しかし、奥さん、金のない時には食べられないし、金があつても年とつて食べられんようになるとしたら、いったい私はいつピフテキを食べるのですか」。美津子さんは幼女や娘の頃、大きい方多い方ばかり選んできた。思い残すことはない年です。

自選集

小島蘭幸

夕闇の仏間に母がひとりいた
母はもう欲のかけらもないようだ
写真一枚おふくろさんを真ん中に
母の病氣のことなど父の墓に立つ
昨日今日明日母が笑っているように

川上大輪

本当になつてしまった嘘ひとつ
油断していたら尻尾が伸びてきた
教科書の通り生きたら嫌われる
わたくししの記憶放浪癖がある
年金も夏の疲れを引き摺って

木本朱夏

ハンカチに包めるほどの秋ですよ
セザンヌの林檎のような朝ですね
翔んでます 机の上の薄埃
銀のペン誰かに手紙書きたくて
秋灯を消す司馬遼を読み終えて

小西雄々

サボテンの花へ思い出ないことも
冬空へ思案をしてもはじまらぬ
私が気になるオルゴールが鳴った
冬の虹わたし許すと伝えたい
シャボン玉どこまで飛べば気がすむか

斉藤 焔

人柄が滲んでる師の自画像だ
横糸をたどると昔の桑畑
少年に無限の可能性がある
甲子園沸かせてくれた金農高
だからって戦争ごっこもうよそう

新家完司

大雨も風も私の手に負えぬ
猛暑日の熱波に耐えてウォーキング
山鳩の声に押されてウォーキング
風から風へバトン渡され鱗雲
よっぱらうたびに太平洋になる

高瀬霜石

電池交換しに行きましよう縄のれん
棘のある花にやっぱり惹かれます
高波はコドモ 高潮はオトナ
仕舞いには牙剥きだしてくる持病
木枯らしといっしょに届く納税書

竹 治 ちかし

主人公連れ出し沙汰の七回忌
合掌をすれば形になる僧侶

敗者復活ないから負けたまま沈む

何でもない事で一日終えた悔い

毎日の同じ仕種に覗く幸

津 守 柳 伸

目をおおうニュース血圧上下動

釘づけのテレビ台風地震なぜ

収穫の秋を不安の弥次郎兵衛

スケジュール変えぬ律義の塩むすび

いざの時フリーダイヤルつながらぬ

都 倉 求 芽

台風を聞いてる亡妻と午後三時

蚊のいないベランダ裸で水を遣る

新元号どうでもいいと預金帳

大坂の快拳感激ひとりお茶

秋彼岸涼風を呼ぶ妻遺影

土 橋 螢

風あれば風 雲あれば空みんな秋

咲き終えて命をつなぐ花の芯

零戦の白いマフラー思い出す

幻想と思いたくない巡り合い

今日の秋働けることうれしくて

西 出 楓 楽

川柳をやめたらただのおばあさん
結局は天に唾していたらしい

割り切つてしまえば飯もおいしい

生き方を教えてくれるジャンプ傘

化粧してウィッグつけて自嘲する

仁 部 四 郎

見てみたい鏡が怖い誕生日

賞状の虫干しでもと誕生日

忘れてはならぬぞ妻の誕生日

病院でチャント云えたか誕生日

まだ酒がおいしかったよ誕生日

前 たもつ

「心廣體胖」湯川秀樹直筆

初選者いい句落さぬアドバイス

蟻は凄く賢い蟻がリードする

掛声かけてやっていきますと風呂掃除

大自然火をつけたのはヒト科

政 岡 日 枝 子

傘寿すぎ不思議に友は皆元氣

八十路ゆく夏のつかれもなく秋へ

二年程同じ服着て秋遊ぶ

柳友と遊ぶ山陰のやま山

メ切りへ句は出来ぬまま土産屋へ

三宅保州

口下手なセールスだから聞くとする
滑らかな舌は脱線ばかりする
年上のお人だんだん減ってゆく
顔見たら老人割をしてくれる
諫言を聞き流したら雨になる

宮西弥生

足るを知る暮らしに正体明かさな
スーパの売れ筋正体明かさな
外面はほんわか正体離婚劇
恋は実らず正体だけときめいて
石ころの小さい丸さに熱いもの

福士慕情

猛暑日も熱中症もある津軽
五楽庵忌燃えに燃えてる百日紅
悠悠と行ったり来たり鬼やんま
カナカナが夏の終りを告げている
台風の置き土産なら遠慮する

村上玄也

へたつた身に追い打ちかけてくる残暑
優勝戦終わった後の寂寥感
民意など全く無視の総裁選
主張捨てポスト欲しがる議員たち
外交をデールと豪語する不遜

森山盛桜

どう破る戦力外という囲み
視野狭く五目並べでよく負ける
よまい言かな熱弁に寄って来ぬ
聴かれたらまずい肉声などは無い
ジャガジャガと心模様がややこしい

背骨

八木千代

たくさんの涙を溜めている背骨
くず折れた日にも起たせてくれた骨
自分には見えぬが骨の中の王
曲りながらも役に立とうとする骨よ
九十四年の米粒詰めてきた骨だ

山本希久子

こじんまりだがしっかりと立つ塔だ
鳴りものいりで台風がやってくる
突然の暗闇パソコンもクローズ
車内の会話名言を拾う耳
てのひらのスマホに届く孫の笑み

板尾岳人

元気だな子子俺の血を吸いに
秋雨や地球が弾む音がする
山頭火と旅がしたくて中8句
母からの手紙の誤字はよくわかる
一〇〇歳迄生きる秘けつを母に聞く

川柳さんだの魅力は友垣に恵まれてゐる事である。しかも下戸の僕をも、割り勘要員として居酒屋に誘ってくれる諸先輩には感謝している。呵々。

このような我輩が一月の中旬にB型インフルエンザに罹った。タミフルの所為か丸三週間、食欲も味覚も無く顔色も褪せ、体力、気力、思考力も失せ二キロも痩せた。仲間内では専ら「花門はもうあかんらしい」との憶測が流れたらしい。

元来口だけは達者だが所詮「あかんたれ」の小生、衰弱死の前に妻への感謝の絶句でもと思い、五句を即吟。ついでに遺句集として昨年末までの、柳歴二年半の作句から百句余りを自選して、パソコン入力しての暇つぶし。

さて句集となると何処かの製本会社に依頼せねばならない。巷の話では二〇〇部で二〇万円。我輩には頭が痛い。お金も掛けず発行部数も自在となると手作りが一番。B5の用紙に左右七句ずつ打ち込み、二つ折りにする。思いついたら即実行。病人の無聊の慰めには好都合。発行部数も限定二〇部のみ。プリンターで印刷してホチキスで止め、布入りテープで装丁、万歳！ 完成！

心当たりの方の方に、ご迷惑も顧みず貰って頂いた。このような楽しみ方も川柳の醍醐味かと思うのである。

人生の黄金古稀を過ぎてから

花門

温故知新

『高杉鬼遊川柳句集』から

肖二綾珠 好きなればこそふたり連れ
 大山の雄つれ去りぬ春あらし
 温厚な将校なりし文衛さん
 路郎忌だ史好よ酒を飲まないか
 六道の辻で史好と雀踊子
 れんげ田に史好が蝶になつて来る
 葉忌や唐招提寺うちわまさ
 俊平も冬二も消えた世紀末
 さくら散る四月は鬼の誕生日
 休日の鬼なりポルノ映画見る
 よく眠る鬼で妻からうとまれる
 冷蔵庫すぐ間にあわぬ鬼の餌
 鬼の股引カラカラ電気洗濯機
 インスタントコーヒーに鬼は騙される
 欠かさずに天声人語 鬼の朝
 自転車で米買いにゆく鬼で
 妻の肩揉むこともあり宵の鬼
 榊原郁恵を忘れない鬼で

水煙抄

西出楓楽選

門真市 坂本星雨

帰省した畳素足に心地好い

手花火のポトリと終わる夏の恋

雨を聴く独りもいとふと思う

酷暑にも耐えた肋に染みる秋

独りには贅沢な月仰ぎ見る

余生を照らすふるさとの大落暉

神戸市 田本古鈴

運命はベートーヴェンに聞いてみる

母恋し十萬億土の距離を経て

なぜ空が青いかなんて考えぬ

死者は良いこの世あの世を行き来する

お盆すぎ蟬の抜け殻ふたつみつ

風立ちぬシャネルの赤に色めいて

三原市 笹重耕三

お金などなくても生きて来た七十

定年後のわたしに指図する介護

八月の日焼けを知らぬ受験生

結論へ本音は引き出しに仕舞う

空振りの三振言い訳は吐かぬ

年輪の所どころにある破線

豊中市 木藤こみつ

ラーメンは少しのびてる方が好き

日本人少しは照れが残るハグ

石破茂のおっとり感がちよつと好き

お財布ケータイまだ使い方わからない

きゅうりのパツク 私のシミを薄くする

口紅の芯少しだけ出し使う

鳥取市 副井裕

胃カメラで本音とやる気探られる

根性をお好み焼に入れて焼く

小窓から米中北を覗き見る

腰痛で弱気心が首もたげ

猛暑続き電気代には目をつぶる

何事も妻に何う縦社会

神戸市 斎藤 隆浩

朝ですよ始めやさしい母の声
耳そうじびざ枕して寝てしまふ
宝くじ今に見ていろほくだつて
株投資色気出し過ぎ地獄見る
昔テニス今は句会をはしごする
マドンナは傘寿の今もマドンナよ

神戸市 玄 番 美恵子

指きりの指がときどき疼き出す
印を押す紙一枚の幸不幸
フレッシュな朝は薬を飲み忘れ
官僚の虎の巻から出る疑惑
色褪せた暖簾匠の光る味
新元号親娘で探る電子辞書

和歌山市 福 呂 秀 子

度忘れは一人になってふと浮かぶ
豪雨後悔しさ残る日本晴
青年期セピア色して走馬灯
ゆつくりと味わいながら八十路坂
就寝前無事な一日寛がせ
朝一番感謝の水が渡る

西予市 井 関 はるえ

重いほど人の情けを受けました
被災など他人事だと思つてた

頭振り振り張り子の子の虎は何思ふ
青菜に塩そんな男が多くなる
澄んだ目とつい指切りをしてしまふ
老いてゆく母をみるのがつらくつて

篠山市 久保木

剛

ハイハイとふたつ返事で軽視され
受付けが愛想いいので行く歯医者
敬老会いずれ上座をはるつもり
ハイ脱いで簡単に言う泌尿器科
笑わずな傷口痛む見舞客
今朝のパン昨夜のカレーはさんでる

島根県 原 徳 利

おとめ座のO型シャイな力持ち
頑固だと怒るあなたも頑固です
くたくたになるまで遊び湿布薬
愚痴ひとつ吐くと寿命が三つ減る
組板のリズムを消したスライサー
触れないでアップデートの途中です

岡山県 大 杉 敏 夫

泣き所心得ている妻と居る
車座の中心になる赤い鼻
新聞は昼飯時の斜め読み
健康にどうであろうとコップ酒
恋ごころ目覚めたらしいミケの声
新天地求めてみても立ち飲み屋

和歌山市 西川千鶴

助手席のカーナビやっとな寝てくれた

故郷の木霊はいつも柔らかい

風に添い妻にも添って送る日

少年が男になれた向い風

私を悪女にさせる星月夜

和歌山市 福島一雄

天災は想定外でいつも来る

蚊も住めぬ酷暑の夏を生きました

本持たず今は左手スマホだけ

コオロギの初音眠りのオルゴール

蟻さんに布施する蟬はほとけ様

倉吉市 大羽雄大

ムカデ走一番手倒れてドミノ

子の帰省テール狭く皿並ぶ

宅急便テレビ夢中の時に来る

ゴキブリが夫婦喧嘩を中止さす

間違える所はいつも同じ角

倉吉市 宮田風露

延命は要らぬと書いて医者通い

被災地にも容赦なく降る雨悲し

原石のままで終れば悲しすぎ

酷暑から解き放たれてよく眠る

福の神我が家へ来たかよう来たな

倉吉市 若松由紀子

こっそりの内緒話がよく太り

残り火をチロチロ燃やす老いの恋

特別の事もないまま今日も暮れ

自己主張人の意見を聞かぬ耳

夕焼けはあしたの晴を約束し

米子市 生田和之

連日の猛暑比べを見るテレビ

独り言増えて夫婦のばやき合い

山陰に雨の降らない一大事

日替わりの始球が目指すノーバウンド

ソーメンで過ごす猛暑がまだ続く

米子市 池田美穂

この夏の猛暑に脳も干からびる

供養塔御先祖様のシェアハウス

天災に想定内は無いと知る

長年のペアーを解いて義母ホーム

異常気象じわり地球の首締める

米子市 川本美津子

仏壇に暑いですねと氷水

鏡見て笑う練習ボケ防止

鏡見て元気ですかと問いかける

母出かけ今日は値引きの夕御飯

雑草の強さが欲しい古希すぎて

米子市 黒田 紀美江

留守番にテレビチャンネル預け出る
ズカズカと昼寝を止めてベルが鳴る
使い捨てストロー海を漂流し
紙コップ転がる前にさっとつぎ
七十路はどんな道かと夫に問い

鳥取県 門村 幸子

弱っている顔など見たくない鏡
健康も頭も本も要るこの世
少数派めげず真っ直ぐ手を上げる
石鹸のようにスルリともの忘れ
お隣と交わす会話の「久しぶり」

鳥取県 橋本 整

さりげない息子の気配身に沁みる
さあ立とう言っても動かぬ膝小僧
ボラステアの汗が背を押す豪雨跡
ストレスを抱かないように寝酒呑む
二カ月に一度論吉の顔を見る

松江市 相見 柳歩

リクエスト曲がかかった風車
熱くなるやっぱり野球ファンなあ
順番にやるなやさしい所から
仏像がバツとひらめき連れて来る
もの静か仕事はとうに完了し

松江市 中筋 弘充

義母入院晩酌しばし止めにする
百歳がベッドの上でよく喋る
まだやれる顔だ更新免許証
酒もだが話がしたい縄のれん
当分は役に立ちます空元氣

岡山市 大石 洋子

あの猛暑やりすごしたぞ同士たり
鬼灯の実を赤くして魂鎮め
楠の木が緑こくして喚起する
二重否定多用する人ややこしい
上目遣いのカマキリの目にあう 秋

瀬戸内市 宮宅 比佐恵

花一輪活けて心を置いてくる
住みにくい地球と花も狂い咲き
特攻のかえらぬ海へ盆の花
今日はノー明日はイエスに変わる若い
どの色に染まって逝こう永久の旅

尾道市 小畑 宣之

空腹を泣いて知らせる腹の虫
頭から否定するので怪しまれ
喜びも悲しみも知るわが名刺
良い夫婦夫婦随の逆多し
蝉しぐれ逝きたる父母の声混じる

府中市 岸田 武

盆おどり金釘流もいるのなり

しつかりした嫁と他人が言ってくれ

友が来て古い土塀を褒めてくれ

几帳面過ぎて会計任される

浅漬のなすびの色を褒めとこう

三次市 伊藤 寿子

チョット避暑にガンを手術してた友

災害が多過ぎないか日本丸

話し上手ヘボロリと本音吐いた悔い

から元氣出しても五分ギブアップ

境界線踏まえて友と長続き

山口市 青木 隆子

炎天下伸びる雑草土性骨

忘れ物歳相応と慣れました

ラブラドルついた名前はみんな「ラブ」

少しずつ手を差し延べて大きな輪

瓦礫の山励ますように虹架かり

山口市 中前 幸子

望みが叶うとタリの時計が進みだす

言い足りぬ言葉を探す黄昏よ

振り向けば原風景に亡父と亡母

手づくりの和紙ごわごわと温かい

胸の扉を叩くもう一人のわたし

黒石市 北山 まみどり

大人しい振りをしていた訳じゃない

そのままを残す巧みな肺活量

心得ておりますツボのしまい方

時おりの風と寄り道してただけ

帰るべき場所を知ってる紙風船

富士見市 中島 通則

録画してCMとばし観るドラマ

寿命より長いLEDを買う

「お盆玉」怖い新語に怯えてる

お互いがサブリのようないい夫婦

少子化が背負うお荷物高齢化

東京都 高岡 弥生

今月もまた締切に追われてる

責任が全くないのもつまらない

天災が日本全国網羅する

断捨離と勿体ないの境界線

暑すぎてこの夏主食棒アイス

横浜市 川島 良子

死ぬるまでカワイイお婆ちゃんではない

ストレートに物言う友が憎めない

新米の賞味期限が書いてない

ゴメンナサイ儲け話はお断り

あの時に迷った答糸を引く

横浜市 長 島 亜希子

超美人と聞いてた方もおばあさん

高校野球終わり宿題急かされる

泣きなさい喜びなさい甲子園

聞き上手いつの間にやらしゃべらされ

二人が良しと思っていればいい話

名古屋市 山 本 三樹夫

故里の紅葉偲ぶピルのの上

政権も長期化すれば続びる

少子化と赤字国債止めなく

災害に相互扶助のボランティア

ブーメラン夫婦喧嘩も元の鞘

豊橋市 西 郷 紀美代

可能性次々開く好奇心

母のよう甘えられても困る妻

諦めて腹も立てずに笑うだけ

バイトしてお洒落に励む孫高二

父に似て餓鬼大将は子煩悩

豊橋市 藤 田 千 休

リニアカー江戸と尾張を近くする

合コンヘギヤルの査定が手厳しい

稲たわわ余剰米とも知らぬげに

豊満と言われてメタボ脂下がる

立ち位置を背負い投げする下克上

阿南市 小 畑 定 弘

生き方をそこまで問うか夏遍路

エンディングノート自問の日がつづく

黙禱の肩にじんじん蟬が鳴く

愛犬の死を引き摺りて妻の夏

写経する妻に一瞬神が降り

今治市 渡 邊 伊津志

生き上手スイスイ逃げる水澄まし

真っ直ぐな言葉はきつと風になる

目が合って猫に観察されている

太い絆地縁の中で鍛えられ

ひとことが後でじっくり花となる

大洲市 花 岡 順 子

味方だと信じる方が生きやすい

小母ちゃんのゆるいルールで生きている

百円の老眼鏡で足りている

リセットの時を知ってるのは椿

立ち位置をわきまえているかすみ草

福岡県 本 田 さくら

雨風に今日も耐えたか雲の網

かまってよほつといてよと猫気まま

一年生何と重そなランドセル

終戦日戦のむごさ伝えねば

ウミガメが生まれチョコチョコがんばれよ

佐賀県 真島 久美子

意味なんて求めていない計算機
戻ろうと何度思っただろう風
汚れたら洗う精一杯洗う
哀しみに名前をつけてみる独り
偽善者の顔で隙間を埋めている

京都市 櫻崎 篤子

生ぬるい水で金魚は何おもう
恩返しなどこの世に親はなし
ジージーと暑さ呼んでる蟬の木だ
雷神も出る気起らぬこの暑さ
うそばかりあばくテレビを切つてやる

大阪市 樋口 眞

尾畠さん表彰式の良い笑顔
ウィークデー女性が占める美術館
ポスト前句を読み返し回れ右
寛いでテレビの映画雨の午後
だるいけど効く葉ないから我慢

大阪市 森 廣子

四万十の川も台風には濁る
優しい言葉ふわっと心盗まれる
忘れられずに一人佇む防波堤
冷酒なら青いグラスで飲むがいい
ぱーっと見ているキラキラの水たまり

泉大津市 磯野 不二夫

口喧嘩おんなに勝ったことがない
旨いなあ飯にカツシ猫まんま
悪ぶったそんな季節もありました
言い勝って心地良かった試しなし
かしこくて正しい人のつまらなさ

貝塚市 吉道 あかね

カレンダー九月になってほつとする
熱いお茶そろそろほしくなる夜長
追いかけて台風が来る旅行先
心機一転秋の口紅買いに行く
趣味ひとつ病もひとつ増えました

河内長野市 原熊 知津子

私はわたし調子はずれの笛を吹く
空はまだ青い思うがまま歩く
伴奏はドラム自分を焚きつける
好き嫌い迷っています臙月
フィクションに本当のこと語らせる

堺市 羽田野 洋介

口添えを頼む相手を間違えた
きつかけはなくていいんだ我武者羅に
もうそろそろリッチにやろうクラス会
お小言は頭の上を通り過ぎ
無関心装うたって顔に出る

豊中市 源 田 啓 生

羽曳野市 磯 本 洋 一

人間は電気無ければ弱い虫

弱い人間ライフラインが飼い馴らす

天変地異列島眠るひまも無い

エアコンがか細い命繋ぎ止め

困難なときこそ笑おうワッハッハッハッハ

豊中市 齋 藤 奈津子

炎天下電線の影歩いてる

自転車で出たのを忘れ徒歩帰宅

スーパーのカート使えば買い過ぎる

友の愚痴自慢とのろけ入り混じる

寡黙な人ひと言放ち的を射る

寝屋川市 岡 本 勲

冷蔵庫開けては締める妻の留守

留守は留守でも帰らぬ留守は困ります

そつと鍵かけてやりたい妻の口

老い深しまた同じ文字めくる辞書

八十路坂恋の滴がまだあった

寝屋川市 川 本 信 子

この地にもあった想定外という言葉

連続の災害陛下ご心痛

補助椅子が好き納得をして坐る

脳を断捨離風通し良くなる

雨上がり土から秋の臭いくる

帰省する訛は里の合言葉

夕日見て釘煮ほおばりコップ酒

列島を苛め尽した雨と風

スポーツ界競技をせずに膿を出す

ライフライン事故つて解るありがたさ

大阪府 小 栢 こそえ

平成の最後の猛暑活入れる

する用があつて悩みが薄くなる

生きて来た証に今日も痛い腰

ありふれた日常の有るありがたさ

言うべきか黙るべきかと同居中

神戸市 敏 森 廣 光

孫四歳女子力すでにフル稼働

猛暑日はカミナリさんも熱中症

古希迎えさあこれからと一歩出る

足腰にエールを送り生きている

台風が秋の足音連れてくる

神戸市 山 根 弘 華

卒寿でもまだまだ枯れぬ好奇心

努力して実るか否か紙一重

手作りのケーキにそつと愛を盛り

句が出来て心わくわく呼名待つ

長生きで昭和も遠くなりまし

神戸市 米田 利恵子

履歴書の癖字そのまんまの男
見習おうラジオオラスの立ち姿
どちらにも味方をせずに友が減る
最後には母の笑顔が答です
旅に出るさて何色にもどろうか

尼崎市 清水 久美子

朗報は忘れた頃にやって来る
琴線に触れる有りのままの至情
黒門で試食している旬の味
懲りもせず見切り発車をしてしまふ
相性が悪い割にはつるんでる

伊丹市 延寿庵 野 鶴

耐え抜いて大きくなって行く器
忍耐をしかと養う座禅堂
モノリザの視線斜めに追って来る
父の背にまだまだ庇う海がある
間欠泉地球の鼓動しかと聞く

篠山市 澤 良 子

納豆の粘りでつなぐ夫婦愛
泣いちゃダメ人生航路笑ってGO
真面目さも三日坊主の私です
よそ見して聞かない振りしてとぼけてる
草刈りの疲れのつけは腰にくる

篠山市 藤井 美智子

何怒る自然の仕業きつ過ぎる
猛暑豪雨台風地震病む地球
冷房に頼りきりの稀な夏
何げない言葉が受けて自信つき
あと少し七十代を慈しむ

三田市 大西 重男

虫の音に欠伸もとまる夕涼み
血の巡り悪くなつたか物忘れ
さつきまで思っていたこともう忘れ
浅からぬ縁で結ばれ五十年
やばい事隠し通せず顔に出て

三田市 九村 義徳

波風が立つと野次馬寄つてくる
波瀾万丈越えた額の深い皺
大海で波乗り目指す井の蛙
何気なく聞いた話にあるヒント
何気なく言った一言後を引く

宝塚市 岸田 万彩

残高が見えなくなった図書カード
スタミナがないとドン・ファンにはなれぬ
失恋を加えりヤボクもドン・ファンだ
山賊の宴を飾る彼岸花
日本に偏執狂のナマズ住む

奈良市 尾畑 なを江

いつの間に蟬とコロギ入れ替わり
年の功つけものだけは上手です
人類へアインシュタイン脳残す
花火ならテレビでと決めイスの上

奈良県 中堀 優

やつと描けた妻の背中へ二重丸
ジョークにこそ本音の顔が覗いてる
山の神じわりじわりと攻めてくる
台風さんそんなに日本好きですか

和歌山市 北原 昭枝

秋風に稲穂がゆれて実る汗
ガンバッタ運動会のにぎりめし
人情を拾う昔の路地あかり
郷愁へだんだん秋が深くなる

和歌山市 倉橋 悦子

リラックス世界共通大あくび
欲望の為に哀しい嘘をつく
喜びの涙ブイイングにも勝つ
またも出たスポーツ界の汚れもの

和歌山市 定松 宏枝

足踏みのミシン今でもリズムミカル
避難場所自分の足で確かめる
ドロップの溶ける時間は兎に還る
振り上げた拳をおろすタイミン

和歌山市 佐藤 まき

衣更え毎年悩むサイズ替え
諦めがついて皺など気にしない
幸運期に宝クジでも買いました
埒も無い事はさらりと受け流す

和歌山市 鍋嶋 澄子

木道をワタスゲ眺めウォーキング
コメディーを友と楽しみつまむ寿司
翼欲しベッドで過ごす君に逢う
家電たち機械の声でふり回す

和歌山市 松本 雅子

器から奏でる和音フルコース
げんこつでヤル気スイッチ押しました
アルバムで押し花になる秋の恋
成功の鍵を一本くださいな

岩出市 村中 悦男

くもの糸切つてさい銭落とす古寺
祈願を抱いて苔むす段を昇る幸
猛暑にも母の遺影は柔らかい
茂る草じつと見つめている猛暑

和歌山県 森下 よりこ

竿いっぱい干して傘寿の夏の日々
あせつてもどうにもならぬ世に生きる
年金日やはり財布の紐ゆるむ
開き直れば怖いものなどない老後

鳥取市 上山一平

喧嘩の根年をとるほど深くなる
取っ組み合い竹馬の友も早や米寿
猪の囲いの中で暮らす過疎
震度7無防備痛む教訓に

鳥取市 大前安子

子守り唄誰のためにか口ずさむ
ばらばらな記憶の芯に母が居る
ペン先は言えない事をスルスルと
夕焼けへ握り拳が開いてくる

鳥取市 田賀八千代

青春は迷い道した画布ばかり
気がつかぬふりしておこうそれも愛
タンポポの綿毛本音が掴めない
フワフワと八方美人火種まき

倉吉市 岡崎美知江

晩学の夢に残りの彩をそえ
婆ちゃんの雑学ひらり役にたつ
大胆に一本締めで和を保つ
四捨五入捨てた四の字がおしくなる

倉吉市 田中紀美恵

ちよつぴりと夫のおのろけ聞く平和
厳かな大山眺め深呼吸
のんびりとほんわりと舞う蛭好き
一円は生きた金だぞ無駄にすな

倉吉市 堀かずこ

まだ若い思っていたがよくころぶ
猛暑日も夜には月がなごませる
被災地の人の心は強かった
悩んでも答は出ない夜が明ける

境港市 中井虎尾

一点差この善戦も敗けは敗け
スポーツ界はフェアでないらしい
一人降り風が乗り込む無人駅
行政はごまかす事にあると知る

米子市 伊塚美枝子

雷鳴を聞いて心で雨祈る
待っていた雨に感謝の手を合わせ
ごめんねと詫びて惣菜買い供え
トーストとコーヒー供え盆の朝

米子市 見山温子

畦刈の汗とばす風ありがとう
トルコ豆レシピも添えてお隣へ
検診日うれしい結果ほつとする
梨所いただき物は梨ばかり

米子市 戸田真理子

こんなにも細くなつたか父の腕
甲子園の魔物突然目を覚ます
九回の裏に魔物が大あばれ
便利な世包丁の音遠くなる

米子市 野川 宣子

言い合いを水に流して米を研ぐ
墓の下でも嫁姑の小競り合い
石投げて私の出方見るいけず
遺産分け庭の石には目もくれぬ

鳥取県 下田 茂登子

ケータイは買ってくれたが使えない
様子見に帰って来るがまるで客
九十歳怪我したことは隠してる
お隣もそのお隣も皆施設

鳥取県 橋谷 静江

老いた夫わたしが守る今がある
探し物今日も何度かありました
遠慮なく暮せるわが家一番だ
たまに会う若い人からエネルギー

松江市 山根 邦代

団扇にはクーラーよりもやさしさが
笑顔には人を和ます葉あり
アンテナを伸ばして友の話しぶり
被災地に戻る日常はやかれと

出雲市 黒目 ひでお

年重ね賑わいさけて遠花火
ふるさとに生きた証の足跡を
思い出が自信となって今を生き
ふるさとを笑顔あふれる楽園に

雲南市 永見 安子

一人居てそつとお手玉やってみる
穏やかな顔になりたく稽古する
雑草に頭が下がるこの猛暑
いつの間にできたか傷跡手や足に

玉野市 片岡 富子

ペランダに猛暑の跡がそこかしこ
エレベーター閉まるの待てず閉を押す
控え目な先輩真似て所作をする
絵の鑑賞おひとりさまでゆるり行く

岡山市 小野 美那子

揺れる橋わたり切ったか太い足
守る人あるから疲れ心地よい
いい風だ堪忍袋冷ましてる
山をかけふたりで挑む正念場

広島市 田桑 恵子

日本沈没こんな小説あったなあ
苦境でも労りあいのマナーあり
改元に望みをかける子の未来
広島人朝の挨拶カーブから

広島市 松尾 信彦

言えぬこと持って集まるクラス会
平成に昭和のエゴが捨てきれぬ
盲点を見つけ凶星にする勝機
対案も出せずズルズル飲む族

竹原市 若年幸子

自然の威閑空までもマヒをさせ
スマホから警報音の鳴る不安
嵐去り一番星が美しい
日本の心豊かなボランテア

竹原市 土井輝恵

自転車はまだまだこげる注意力
キツチンをしなくなったら老後です
あの日から電車止まったままの絵図
軽傷で済んだ感謝の寄付をする

竹原市 六田半徳

夫婦共朝食モーニング昼肉うどん
リハビリの姿勢正して杖ついて
台風のおさまり待つて赤とんぼ
里山に登って叫ぶありがとう

松山市 郷田みや

クーボン券切り取ったまま期限切れ
打ち明けた悩み薄まつたりしない
ひと夏の埃からめる扇風機
空蟬を残して過ぎ去った豪雨

高知市 三谷松太郎

ひらがなの気持になったご老体
補聴器にメガネとつたら生のわれ
ドローンに載せてもらってではさらば
聞いてるの聞いてないけど聞いてるよ

唐津市 岩崎 實

見守られ四郎先生ありがとう
目を覆う台風地震この軍備
咲きついで芙蓉木槿朝顔と
見つめられ人形だけに口をさき

那覇市 前川 真

靴を履く僕はやっぱり僕だから
爺ちゃんのゼンマイ孫が巻きに来る
路線バスひとり肩身を狭く乗る
亡き母へ丸いポストにふみを出す

沖縄県 禰 モモト

眠ってる才能誰が引き起す
カーナビが検問先をアナウンス
かくれんぼ机の下でまる見えだ
納豆は賞味切れでも食べている

沖縄県 宮 すみれ

カラフルに刺繍糸でバラを刺す
片すみに見る青空も青だった
お気に入り靴の修理に二度生きる
ばあちゃんとなり絵と孫とヒソヒソと

弘前市 高森 一呑

白河をやっぱり越えぬ泣いた夏
農高校に夢と希望をくれた夏
爺婆も夏休み帳に奮戦中
手植えた田んぼアートの稔りまつ

白河市 鈴木 たけし

歳時記のギアを狂わす温暖化
ガス止めて見入る熱闘甲子園
お盆玉広辞苑にはありません
猛暑日のちよつと一息地下歩道

千葉県 廣瀬 良磨

ミサナガがブツリと切れて秋になる
自宅でも仮面を付けたままの僕
脱皮などせず生意気なままでいる
ツアーより自由気ままな旅が好き

静岡市 渡辺 芳子

老人は対応出来ぬこの天気
生涯で初の体験この暑さ
カラオケとお風呂で若さとりもどし
地球の事守って欲しい地球人

江南市 脇田 雅美

一番手後ろを向いて余裕見せ
立ち回り素早く動き先を読む
角立てず丸く治める太っ腹
酒注いで注がれて友がまた増える

豊橋市 小松 くみ子

老人会談話もエンドレステープ
お互いに聞く耳もせず自己主張
早生まれ年が明けたらエツ古希か
いい夢の続き見たいが暑い朝

豊橋市 高柳 閑雲

権力へ強い方へとなびく風
誰にでも尾を振る犬を笑えない
引退の花道なんぞ無いバイト
丸腰の男でいつもバカを見る

舞鶴市 伊藤 恒

笑い茸食べて笑って死ぬるなら
茸でも化粧凝らして人誘う
誓約書書いた筆先狸の毛
女共安全牌と僕を言う

京都府 北野 クニオ

萩の花静かに秋を告げに来る
五十年二人で建てた金字塔
天上の友に捧げん哀悼を
法師蟬先祖供養の為に鳴く

大阪市 中島 栄子

墓買って予防注射にサプリ飲む
褒め言葉解っちゃいるけどいい気分
シベリア還り辛苦をなめた燻し銀
末期癌潔い友に感激

大阪市 前川 善之

北からは秋が足早迫り来る
風鈴が音で涼しさ感じさす
陸自が使う練習費用十億円
秋風が吹くを楽しみ鶏の鍋

大阪府 横山里子

飛行機が飛べずカレーを三日食べ
コンサートなどでこの日に震度5が
今が旬おひとりさまの旅仕度
忘れてる振りしているが許してない

池田市 上山堅坊

砕きたい分厚い壁に立ち向かう
ワンピースにおいて物言う沈んだ日
失敗のしっぽ切り捨て立ち直る
気丈夫に構えてやっとなつ独り

池田市 太田省三

うとうととして見る夢に色がない
ポスターの褪せた笑顔の落選者
釜炊風こげ目をつけるかやく飯
墓参とは名ばかり後は南座へ

泉大津市 助川和美

勝ち進み校歌親しみ湧いてくる
秋夜長物干台で星数え
母に聞く父の話や終戦日
借り物の言葉列ねてする祝辞

河内長野市 中島一彌

拘りを持って自分を生きている
起き出せば寝てた痛みも目を覚ます
砂を詰め泣いて球児の夏終わる
この国の会話が弾む焼サンマ

河内長野市 穂口正子

飲み込んだ言葉怒りに腹ふくれ
天高く邪魔な怒りを手放した
敵味方越えてエールが雲の峰
特売でアイスどっさり孫を待つ

堺市 古川光雄

体調をさておき癖で晩酌す
戦後すぐ団扇打水夏過す
のたうって捌かれ焼かれかば焼か
過疎の様地蔵盆に子等居ない

四條畷市 西川ひろし

断捨離のテキスト買って本が増え
満月の横で火星が負けず燃え
台風も偶には道を反逆す
久々の通勤ラッシュ両手上

吹田市 岩口のぞみ

パワハラと呼ばぬ体罰ひと昔
扇風機今年は温風送るだけ
酷暑より熱い球児に心燃え
お袋と呼んでる友の前だけは

高槻市 三谷白黒

景品につられて買って余り物
一番の節約法は健康だ
このごろは家が一番いいとこだ
老いて来て娘やさしくなりました

豊中市 荒木郁子

顔緩み恋愛中とすぐ分かる
踊り好き祭探して夜出かけ
待ち時間長い先生人気者
内職の母ミシン音軽やかに

豊中市 貝塚正子

役員のかじがはずれてホッとす
義理メールそれでも返事じつと待つ

出るクシヤミ花粉症かな悪口か
紙風船身の丈ほどの空に舞う

箕面市 寺井柳童

猛暑去り秋風を待つすき穂
顔見知りすぐに名前が出て来ない
停電の修復工事じつと待ち
虫の音が今年の暑さふつとばし

枚方市 坂本ミヨノ

猫二匹どんつき家で恋の声
秋惜しみ落葉踏む音寂しすぎ
秋祭屋台めぐりに孫笑顔
秋晴れ日五十年忌の我が夫

枚方市 谷英也

閻魔さん蜘蛛の糸をば切らないで
愛してるたまに言ったら疑われ
民主主義風見鶏とはちと違う
TPPこれが日本の生きる道

八尾市 田邊浩三

退職日意味いろいろの大拍手
朝日浴び腰痛今日も頼んだぞ
曾孫の鉢巻一番よく似合う
それぞれが弱味持つてる高齢者

八尾市 前田紀雄

翁長さん逆転信じ黄泉の国
金足農雑草魂が無量大

今日までは可もなく不可もなく生きる
二の足を踏むアルバムの断捨離

八尾市 山川寧

遺品整理汗と埃で涙涸れ
古道具鑑定団を思いつつ
孫娘ポストなおみへ夢を追う
避難警告迷っているうちに解除

大阪府 高木道子

支え合う翁と媪の膝栗毛
同窓会お一人様が揃い踏み
不満足な五体の老軀叱咤する
むずかしき話さておき秋刀魚買おう

大阪府 中内孚彦

権力者鏡の中で信を問え
おはようと鏡の自分励まして
護送中警官の方怖く見え
朗らかに笑うキリスト見てみたい

大阪府 畑中節子

篠山市 長澤喜弘

年重ね野菜作りの先生に
向き合つて元氣誉め合う若い二人
老いの知恵頼らるるも良し湧くパワー
退屈を紛らす良葉無駄話

神戸市 輿水弘

篠山市 長谷川善輔

胸の奥忘れぬ女性ひとは年取らず
消えてゆく雲の軽さに気を休め
八十路越え小さな福を温めてる
福計る尺度は朝の飯の味

神戸市 近藤勝正

この街はゴーストタウンか夏の午後
熊蟬もさすが真昼はひと休み
40度何日と呼べばいんだろ
災害は多いがやはり日本好き

伊丹市 平井富夫

三田市 住吉美和子

生活は全て電気に頼り過ぎ
かくれんぼ何時の間にかに寝てしまひ
台風後復旧待たず地震来る
気象庁何故か最近忙しい

加西市 山端なつみ

三田市 東内美智子

男性も猛暑たまらず日傘さす
酷暑にはいなかつた蚊が私刺す
台風地震平成最後と大暴れ
M T S H 除き元号何になる

夏暑いのは当たり前だとへそ曲がり
帰省の孫と一番星を見つけた
丹精込めたきゅうりなすびの実付き良し
息子帰省で少しスマホの腕上がる

新製品もてはやされて今はゴミ
麦わらがストローとして復権か
若い日を台風の名で思い出し
人生を大団円にて終るには

暑気払い飲む焼く喋るパーベキユ一
顔ハーフ英語皆目持てもせず
猛暑でも愚痴る暇ない災害地
大将の講釈のせたにぎり鮓

天災が日本列島壊してる
被災地に届けとばかり虫の声
友偲び秋の七草活けてみる
大汗を掻いているのもうお節

働き方改革働き蟻は黙々と
厚化粧心に塗れず黒い腹
蜜よりも甘い噂に蓋出来ぬ
友垣を結び交えた人は逝き

兵庫県 川柳祭 in 神戸

日時 12月2日(日) 10時開場

場所 兵庫県民会館

TEL 078-321-2131

神戸市中央区下山手通4-16-3

当日投句の部 (各題2句)

「日」 橋岡 進一 選

「磨く」 濱邊稲佐嶽 選

「スイーツ」 長浜 美籠 選

「菊」 宮崎ただし 選

「栄える」 矢沢 和女 選

「頭」 村上 水筆 選

出句締切 12時

なお出句は大会参加者に限る

出句料 1,000円

問合せ先 事務局 樋口 祐子

TEL 078-251-1453

老い忘れ櫓囲んで総おどり
曾孫去る障子の破れ置みやげ
無理するな現状維持が最適だ
亡き夫が手招きするがちと待った

三田市 馬場 貴美江

涼風にちよつと肥ったお月様
快適なエアコン昼寝二度出来る
図書館で瞑想実は涼をとる
ギャグでさえおやじと付けば疎ましい

宝塚市 太田 としお

政権を責めるだけなら誰にでも
男らしい俺が責任取るといふ
もうお歳寝顔は嘘をつきません
足音が近づいて来るオリンピック

句集の森



『銀海』

檜谷 寿馬

雅号などおこがましいが辞書を繰る
幸せが見えずともよい坂登る
怒鳴っては男涙しては父
生れくる者へ優しい名を用意
楢山に坐ると横に妻が居た
靖国の破魔矢の白よ軍神よ
究極は一升瓶にある宇宙
枝豆が酒徒列伝を論じ合う
大正のうたを大正琴で聞く
春秋や星は氷であるという
熟年の過信が築く砂の城
酔こんぶと笑う松竹新喜劇
七十や鏡を覗く日の多し
あきらめて悟った事のようにいう
指よ眼よせめて達者で明日まで

(平成八年九月十日 発行)

橘高薰風句抄

〔橘高薰風川柳句集〕平成十三年発刊

旅館廃業

人生に起承転結ありにけり

父の忌に障子の部屋もなくなりぬ

昭和乱世 今太閤は痩せていず

寡婦の買う数珠のようなる首飾り

娘のボーイフレンドやよし 元旦

元旦ぞ ルバング島も元旦ぞ

ルバングの一兵の生 宮中歌会

父の乗る船の模型が応接間

裏梅は聞えぬふりをする女

金剛山

霧這えば杉の樹間の正しさよ

深眠り 母娘相似のカメオ置き

哀歎の底に穴ある植木鉢

裏切られあたたかきもの放尿す

姦計を鯛の目玉にさげすまる

童貞さんふうわりと跳ぶ 春の泥

地下鉄に勤め持つなりメーデー歌

暮れるばかり暮れるばかりの木屋町や

この句碑の はじめて会うてなつかしき
尼緑之介助氏句碑

赤鼻の軒佳境に入りたり

呼び戻す 背なの赤子の名を呼んで

核のごと艱難の歯がこぼれたり

安からめ 御身の胎児たり得れば

足摺の雨は遍路へ地から降る

寂滅と遍路の果ての月見草

路郎忌の天守の鯨に見据えられ

陶枕に睡蓮恋し 女人より

睡蓮は万丈光の光源よ

英語 de Senryu ⑧

麻生路郎句集 『猿人』

英訳 吉村 侑久代 Kim Horne

歯が痛い そうかと亭主でてしまい

*my tooth aches
my husband goes out
saying "Is that so?"*

急所とは 知らずに云つて 左遷され

*a degradation and a transfer
I find his sore spot
without knowing*

tooth 歯 *ache* 痛む *husband* 夫 *go out* 外出する *say* 言う *degradation* 左遷
transfer 移動 *find* 見つける *sore spot* 急所 *without knowing* 知らずに

リバーウィローのため息～世界の川柳・俳句 ②③ インドの俳句リーダー

カラ・ラメシュ (Kala Ramesh)

南インド、カミールの文化に造詣の深い家庭で育ったカラは、父が常に言っていた「植物が花を咲かせるには肥沃な土壌が必要である」を信条にしています。基礎力の大切さでしょう。カラは俳句の源である短歌、そして歌仙も捲きます。インドの俳句詩人 35 名による俳句、川柳、俳文、短歌、俳画を含む e-book の編集と出版、*The World Haiku Review* の編集など、インドの国内外で活躍しています。彼女から送られた俳句を紹介しましょう。

a barn owl hoots/ the stillness of the lake/ before dawn

(湖閑か小屋の梟鳴く夜明け前)

howling wind--/ an autumn note within/ the bamboo flute

(風の声 竹笛の中に秋の調べ)

fireflies/ decorate the veranda--/ paper lanterns

(蛍がベランダを飾る まるで提灯のように)

receding wave.../ crab holes breathe/ the milky way

(引く波 カニの穴から噴き出る天の川)

誹風柳多留——二篇研究 65

細井龍夫・伊吹和男
山田昭夫・石川道子
小栗清吾
清 博美

548 油うり是になさいとかいで出し

小栗 油売りが、容器の中から油を出して嗅ぎながら「いい匂いがしますよ。この油になさいな」などとセールストークを展開している図。匂いがセールスポイントとすると、灯火用ではなく頭髪用の油かとも思うが、役者などが経営することの多いブランド店「油見世」ではなく、行商の「油売り」とすれば、同じ灯火用でも「魚油より種油の方が匂い、いいよ」などと言っているのだろうか。尤も、後述のように行商でも頭髪用の油も売ったやうなので、「頭髪用」としてもおかしくないかもしれない。

油やのかいで出スのハ直か高し 明四仁5

(参考)「絵本江戸風俗往来」(東洋文庫)

黒ぬり桶に銅の内張したるは、恰も火桶の如く、その桶に売物の油をたくわえしは、まず、第一に種油というは、毎夜灯火に用ゆる油なり。魚灯というは、灯火用の粗物にして、胡麻の油は食物につかい、荏の油は油障子などに用い、椿の油は婦人の髪に用ゆ。

伊吹 頭髪用に賛。
清 賛。

549 じさいかぎいじつて野かけもてあまし

小栗 自在鉤は、いろりやかまどの上につるし、鍋、釜、鉄びんなどを自由に上げ下げできるとした鉤(「日」)。

野掛けに出かけ、途中の農家に立ち寄っていろりから煙草の火を貰うような場合を想像すればいいのだろう。いろりの上から下がっている自在鉤が珍しいので、構造も知らずにいじっている中に、うまく止まらなくなったり、上の方で止まったまま動かなくなったりして、持て余しているのである。

清 賛。

550 人といふものわとこもへゆびをさし

細井 行く先で「おこも(乞食)」を見かけ、「人というものはな、精出して一生懸命に働いておればいいが、遊び呆けているとあのざまになつてしまふぞ。いいか」と供の丁稚に言い聞かせている商家の主人。

橋のこもでつちに見せてあれだぞよ

三一

こもかぶりと、でまんまもくつたやつ

二二

菰かふり元樽酒も呑んだやつ

五七二五

伊吹 賛。親が子にでも成り立つ。

小栗 賛。特定する措辞がない以上、登場人物は特定できないと思うが如何。

清 同右。

551 ぬかふるよつぼと顔をながくする

花嬢の花のちる頃実か出来る

四二五

細井 江戸では銭湯のことを「湯屋」と言い、
たいてい、一町内に一か所はあり、大きな所
は男湯、女湯の区別があったが、度々の禁令
にかかわらず、入れ込み（混浴）が多かつた
らしい。江戸の女性は勇敢で、何時もの顔ぶ
れだからと平気だったとか。糠袋は自家製や
ら番台で買ったらしいが、流し場で石鹼代わ
りにして身体を洗うのに使った。顔を洗った
りする時には、いろいろな面相になっただろ
う。その写生句。

容顔種々に変化する糠袋 八九二二
ぬか袋目口いぎやうに動かせる 二五二二
ぬかふるろゑりへ廻ると口をまげ 一〇五
伊吹 賛。顔のすみずみまで洗おうとして長
くなる。

清 賛。礎稿最後二行の説明と類句で足りる
句。湯屋のことかどうか決めかねる。

552 四五年も花嬢で居るぶせいもの

細井 嫁入りをして四五年も子供が出来ない
と不精者呼ばりをされた。実は努力のし過ぎ
だったりして。過ぎたるは及ばざるが如し。

花嫁に実が入姑うれしかり

六八二

花嬢の花のちる頃実か出来る

四二五

伊吹 賛。本人に罪はないのに。
小栗 賛。なるほど、「花」ばかりで「実」
がないのですか。
清 賛。「不精者」と表現したのがこの句の
ヤマ。

553 すほまつておびを出しなおがむ也

細井 行水をしている若嫁がしゃがみこんで
小さくなって、「帯を取つてくだされ」と下
女に頼んでいる。
ゆかたくりやよと言捨て嬢しやがみ 一四三一

小栗 賛。ではあるが、なぜそんなことになっ
たのかよくわからぬ。「下女」に「拝む」と
いうのもよくわからぬ。
行水ならちゃんと準備して入るはずで、とい
うのは理屈すぎるか。行水以外の帯をかくさ
れたような場面はないだろうか。

清 同右。どうも行水というのは唐突すぎる
ような気がする。「すほまつて」は部屋の中
での行動のようで、単に着物を着る時の情景
とも考えられる。

554 めしを喰イ過て傘喜本なり

細井 増上寺の破戒坊主が品川の飯盛女に溺
れて、お咎めを受けることになり、傘一本だ
け持つのを許されて寺から追放されたという
のを、飯盛だから「食い過ぎ」と洒落たもの。
本尊か物を言たら傘喜本 宝13宮2
傘一本釣り花活のやふに背負 一五三5

山田 賛。成語「傘一本」をそのまま使った句。
清 賛。

555 月ツしよくに向ツて下女はぬり立る

細井 古くなって姿がはつきりとは映らなく
なった月食のような鏡に向かつて、下女は一
生懸命に塗りたくっている。さすがは下女の
持ち物らしい。
月ツしよくのやうなかゞミて下女ハ結び 明六智4

か、ミへむかいはななと下女つつまミ 天五花3

伊吹 賛。「はつきりとは映らなくなった」
というより、欠けて丸くなくなった鏡。

山田 礎賛。当時の鏡は丸が多い。

清 小生は欠けている方に賛したい。皆既月
食よりは部分月食。

第24回川柳塔まつり

同人総会

平成三十年度第五十三期川柳塔社同人総会は十月六日午前十時よりホテルアウイナ大阪で開催された。総務部島田誠一の司会で開会し、冒頭小島蘭幸主幹から、ご出席の皆様へ台風情報の最中出席いただいたお礼と日頃の協力支援に感謝が述べられた。又、塔運営についても同人、誌友の拡大が増減はあるものの概ね順調である旨、報告された。今後も引き続き努力するとの決意も含めた開会の挨拶をいただいた。その後小島主幹を議長に選任して議案審議に入った。

第一号議案の平成二十九年事業活動を片山かずお企画部長が報告した。

・平成二十九年十月七日、第五十二期同人総会を開催した。

・第二十九回「高野山川柳塔碑合祀祭」は台風惨禍による交通網遮断により止む無

く中止とした。合祀予定者の八名については次回に合同の合祀祭として実施するとした。

・第二十三回「川柳塔まつり」を開催し参加者は323名であった。

・第五回「春の川柳塔まつり誌上大会」を実施し、662名の応募を頂いた。

・本社句会の参加者は130名を超える事も多く、活気ある句会が続いている。

・塔社の運営状況は経費節減の徹底強化に加え、多額のご芳志もあり今期も収支の黒字化を達成した。

・創立九五周年記念「川柳塔誌電子化事業」を立ち上げ、塔社ホームページ上に公開すべく事業スタートを切った。これを推進するために「基金」の募集を行った。

次いで内藤憲彦会計部長から平成二十九年の収支決算書及び財産目録の提示と報告があり、藤村亜成会計監査が監査承認の報告をした。特に質疑は無く、一号議案は承認された。

第二号議案の平成三十年度の事業計画について片山かずお企画事業部長から各別に活動計画を提案、また内藤憲彦会計部長が新年度予算案を提案、本件も質疑は無く二号議案は承認された。

第三号議案として、新家完司理事長より役員の新任、再任人事が提示され拍手をもって承認された。新任役員名は後掲。

又、議案に関する最終質疑の中で、塔社役員への指名基準についての質問があり、新理事専長より塔社役員規約を踏まえ、運



同人総会の模様

営現況の実に沿い適切に運用している旨報告された。新役員を代表し宇都満知子新常任理事の挨拶があり、最後に川上大輪副主幹の閉会の辞で総会を終了した。

主な受賞・表彰

* 本社句会 月間賞永久保持者 山田 葉子

* 叙 勲 正六位旭及光章(畷)両川 洋々

* 愛媛県教育委員会表彰 栗田 忠士

出版・句集の刊行

* 平井美智子 「時実新子の川柳と慟哭」

* 川柳さんだ 川柳さんだ二百号記念合同句集「メダカの詩Ⅳ」

* 新家 完司 句集「あきらめたとき美しくなるこの世」

* 太田扶美代 句集「ほほえみを使い果たした母が病む」

* 徳山みつこ 句集「ときめきの胤にも水を忘れない」

* 堀 正和 句集「もう少し長生きします悪しからず」

* 鳥 ひかる 句集「生きてゆく力となつた山がある」

* 栗田 忠士 句集「追いかけていたのはただの風だった」

* 村上 直樹 句集「雲ふわりいいなお前は風まかせ」

* 矢倉 五月 句集「病む父の代筆父のペンで書く」

* 久保田千代 句集「幸せな頃を思えば父がいる」

* 栗原 道夫 句集「うつくしく強く地球を蹴る遊び」

物故者 (6名)

両川 洋々 平成29年 12月9日没 75歳

藤井 正雄 平成29年 12月15日没 95歳

坊農 柳弘 平成30年 2月3日没 77歳

塩満 敏 平成30年 3月3日没 86歳

上垣キヨミ 平成30年 3月22日没 79歳

須郷 井蛙 平成30年 7月23日没 84歳

新任役員(再任・留任は含まず)

常任理事 宇都満知子 上田ひとみ

参 与 鶴田 遠野 鈴木いさお

理事 平井美智子 牧野 芳光

竹信 照彦 鴨田 昭紀

村田 博

新同人 (29年10月〜30年9月)

長谷川崇明(奈良県) 森田 旅人(河内長野市)

中山 春代(箕面市) 市川 雄太(松原市)

森 菊江(尼崎市) 磯島福貴子(大阪市)

小野 雅美(大阪市) 田中 廣子(大阪市)

福田 正彦(箕面市)

同人総会出席者 (順不同・九十名)

澤井敏治 山崎武彦 福士慕情 山本希久子

初代正彦 大内朝子 山根妙子 大久保真澄

中山春代 長浜美籠 安福和夫 宇都満知子

鴨田昭紀 伊達郁夫 栗田忠士 平松かすみ

田中章子 川上大輪 福田正彦 久保田千代

水野黒兎 島田誠一 村上玄也 松尾美智代

池田純子 村田 博 藤井智史 内田志津子

山田耕治 前たもつ 柿花和夫 森松まつお

小島蘭幸 新家完司 牧野芳光 江島谷勝弘

藤井宏造 内藤憲彦 松岡 篤 片山かずお

三宅保州 木本朱夏 西出楓楽 長谷川崇明

榎本舞夢 山野寿之 吉岡 修 上田ひとみ

藤村亜成 川端一步 小野雅美 山岡富美子

山口光久 藤田武人 山本昌代 岩佐ダン吉

松原寿子 岩切康子 大浦初音 佐々木満作

坂本加代 市川雄太 中村 恵 古今堂蕉子

永見心咲 栃尾奏子 前田楓花 居谷真理子

丹下凱夫 宇賀史郎 田中廣子 鴨谷瑠美子

米澤優子 関よしみ 加川靖鬼 中川ひろ介

武本 碧 榎本宏子 榎本日の出

原田すみ子 鈴木いさお 藤原千恵子

大田扶美代 富山ルイ子 磯島福貴子

飛水ふりこ 石田ひろ子 山口弘委智

吉村久仁雄

■おはなし 要旨

川柳に表れた

自嘲と自慢

新家 完司

川柳の対象は、宇宙の果てから海の底まで無限にあります。現代川柳では「自分を詠う」ことが大きなテーマの一つになっています。平井美智子さんが編集された「時実新子の川柳と慟哭」の新しい語録の一つに「川柳は『もう一人の自分が自分を見る』という自己客観の文芸である」という言葉があります。この「自分を客観的に見る」という姿勢から、自らを嗤う自嘲的な句が生まれてきます。

また、日本には古来より謙遜は美德であるという「謙遜の文化」がありますので、それもまた自嘲的な句が多く生まれてくる土壌になっているものと思われまます。



新家 完司氏

の衣と食を詠った自嘲句ですが、衣服はさすがに女性の作品がた

くさんあります。

大それた願いのMサイズが着たい

Lだとわかってているが試すM

試着室どれを着たってドラム缶

女性のスリム願望は根強いものがあります。男から見るとふつ

くから気味のほうが健康的で良いと思うのですが、背丈はMで

ピッタリですが横幅がLとかLL。「ドラム缶」とは謙遜ですが、

他人が言えばエライことになりまます。

千円のドレス着こなし褒められる

通販のせいにしている派手な服

大阪のおばちゃんは「これなんぼに見える？」と訊いてきます

が、高い目に言っておけるのがゴツ。派手なのは「通販のせい……」

と弁解しているのは可愛げがあります。

古い服中身はもつと古いけど

ハンガーの服にはちゃんとあるくびれ

服よりも中身のほうが古いとは愉快な見つけで、自嘲句の面目

躍如です。ハンガーにかけているときは「くびれ」があるのに着

ると無くなるのは魔法の服でしょうか。

百足に履かすほど古い靴がある

ハイヒール履いたら次の日は寝込む

パンツやシャツは捨てられますが、履き慣れた靴はなかなか捨

て難いものです。また、ハイヒールを履くと背筋が伸びてシヤン

としますが、身体は寝込むほど疲労困憊！

冷蔵庫は満杯詩人にはなれぬ

何不自由ない暮らしから「詩」は生まれえないという鋭く内省的

な考察。敢えて分類しますと哲学川柳でしょうか。

ハンパーガーに鼻の低さを笑われる

柏原 夕 胡

平井 美智子

森田 夢 路

矢倉 五 月

笠嶋 惠 美

穂口 正 子

大久保 眞 澄

米澤 徹 子

北村 賢 子

木本 朱 夏

古久保 和 子

特売のビフテキ顎がだるくなる
もつ箸を割ってラーメン待っている

岩田 明子
佐々木 裕

アメリカの国民食とも言えるハンバーガーは、日本人には似合
わない。また、特売の肉は硬くて顎がだるくなりますが、高齢者
には肉よりも魚のほうが身体にいいでしょう。

便利ですコックピットのような部屋

竹村 紀の治

私なんかどうせ生まれは橋の下

中岡 千代美

ベッドに寝ころんだまま本も眼鏡も電気スタンドも手が届く便
利な部屋。私も一緒です。幼い頃にからかい合ったことば「橋の
下のコジキ」懐かしく思い出しました。

西日入る部屋でヤモリと干乾びる

石橋 芳山

刑務所が歩いて行ける距離にある

森山 文切

一読して貧乏臭い印象の句から、「神田川」を連想。少しだけ
歌わせていただきます。♪三畳一間の小さな下宿…。

刑務所の句は自嘲にするか自慢にするか迷いました。

次は、忍び寄ってくる【老・病・死】を詠った自嘲

細川 花門

口までの距離にご飯をよく零す

三浦 強一

度忘れがどど忘れとなつて老い
食卓と口までは40cmほどですが、それを「距離」と大袈裟に言っ
たのがお手柄。「どどど忘れ」の句は木津川計先生が塔誌5月号
の「川柳讃歌」に取り上げて、痴呆症予測テストを提案されてお
られますので試してください。

ポツケには鮎とニトロ口の常備薬

村上 直樹

御守りは成田山より舌下錠

山田 耕治

神仏をおろそかにするわけではありませんが、御守り札より大
事なのは、狭心症に即効性のあるニトロ口です。

言い訳に使った仮病いま持病

坂 裕之

マライヤキャリーも私も鬱病である
婚活に破れ孤独死考える

木藤こみつ
藤井 智史

言い訳に「頭痛」を使っていたら頭痛持ちになってしまった。
天罰観面！ 有名人と同じ病…、これも自慢に分類するか迷いま
した。婚活に失敗したただけですぐ「孤独死」に結びつけるとは！
大袈裟且つ短絡の面白さです。

続きまして「体・顔」を自嘲的に述べた句です。

正月に増えたニキロが臍あたり

宇都宮ちづる

メタボ気味いいえはつきりメタボです

上田ひとみ

風邪ひいて三日寝たのに痩せてない

前田 楓花

増えたニキロがバストあたりだったらいいのでしようが臍回り
とは残念でした。「はつきりメタボです」という聞き直りの心地
良さ。日頃から溜め込んだ皮下脂肪のおかげで、三日ほど寝たく
らいではビクともしない健康体です。

食い込んだ指輪ベンチでぶつちぎる

安土 理恵

いつの間にか丸いお尻も楕円形

小出 順子

白魚のような指も今では指輪が食い込むほどになってしまいま
した。「ぶつちぎる」が豪快で愉快。まことに失礼ながらお尻を
見るだけで年齢が推定できます。流行のスリムパンツが似合うの
はやはり丸いお尻でしょう。

親切と思われにくい顔である

伊藤 紅白

私の器量は木の葉井あたり

板尾 奏子

親切と思われにくい顔は私も同じです。器量を食べ物に置き換
えて比較したのは初めてではないでしょうか。それも安く作れる
「木の葉井」とは適切且つ愉快なご謙遜！

（以下、誌面の都合で割愛させていただきます）

各賞表彰・記念句会

第二四回川柳塔まつりは一〇月六日、ホテル・アウイーナ大阪で開催された。生憎



受賞者（敬称略）右から、清水久美子・森廣子・平井美智子・栗田忠士
永見美咲・主幹・小野雅美・石橋芳山・渡辺富子・原熊知津子

の25号台風の影響で雨の中にも拘わらず、全国各地から274名の方がご参加くださった。会場正面の金屏風の前に麻生路郎師の胸像が、暖かくは迎えてくださった。

司会進行は鈴木いさお・居谷真理子。開会の辞は新家完司理事長。引き続き小島蘭幸主幹の挨拶。祝電披露のあと六賞の表彰式が行われ、各受賞者に主幹から表彰状と記念の楯が贈られた。続いて本年度の新人人が紹介され、代表して奈良県の長谷川崇明さんが「甚仇ならぬライバルをもちたい」と力強く抱負を述べられた。

おはなしは完司理事長の「自嘲と自慢」。蘭幸主幹と共に川柳界を牽引して全国を駆け回る完司ファンは多い。川柳作品をたくさん引用されながらの完司節を大いに楽しんで一時間であった。（詳細は70頁参照）おはなしの後、蘭幸主幹を囲んで表彰者及び新同人の記念撮影が行われ、暫時の休憩のあと川柳大会に入る。各題天位には記念品が贈呈され、川上大輪副主幹の閉会の挨拶を以って滞りなく記念大会は終了した。

月間賞は島田明美さん（大阪市）
司会（いさお・真理子）
脇取（扶美代・奏子）
清記（勝弘・憲彦・正彦・まつお）
撮影（敏治・松岡恭子）



兼題「カラフル」

平井美智子 選

生き様はそれぞれ白い曼珠沙華
華やかに笑顔咲かせるいい女
残り火が揺れてカラフルイヤリング
カラフルに笑うコスモスの純情
オーロラをつめてあなたにエメール
カラフルな野良着おしゃれな嫁が来た
多色刷りの夢追いかける少年期
カラフルな衣装を恥じている案山子
カラフルな君のトサカに惚れ直す
完全のハバネロ舐めて火傷する
カラフルな屋根に自分の色がない
カラフルな器ばかりが売れ残る
QRコードは色を拒絶する
カラフルに生きて三回離婚歴
カラフルな人保護色の嘘を吐く
多色刷の街で孤独を嘔みしめる
過去形の仔細玉虫色にする
オオムサキに生まれたかったしじみ蝶
カラフルな薬で今日も生かされる
カラフルなもんで老母は鉄をふる
カラフルに変身雄のプロポーズ

嶋澤喜八郎
大内 朝子
寺井 弘子
内藤 憲彦
野口真桜子
藤島たかこ
栗田 忠士
谷口 修平
木嶋 盛隆
前田 楓花
久保田千代
鴨田 昭紀
赤松ますみ
西出 楓栞
澤井 敏治
鈴木 栄子
小谷 小雪
小林すみえ
西川 更紗
浜 知子
松原 寿子

友達が百人カラフルな老後
 カラフルに踊る阿呆の土踏まず
 不燃ゴミに出したまっ赤な嘘の数
 カラフルなまんま今でも初恋は
 誘惑の目に鮮やかな毒キノコ
 カラフルな噂を小出しして生きる
 厚化粧だんだん自分見失う
 目くるめく愛に私の色がない
 カラフルにおばちゃん声もなにわ色
 カラフルなマニキュア家事はしない主義
 ネオンキラキラ人みなきつと淋しがり
 万華鏡僕の花火を閉じこめる
 カラフルな噂出どこはまたあそこ
 カラフルな街人情は干からびる
 カラフルな饅じゃ食べる気がしない
 カラフルに咲いたらあつげなく散ろう
 カラフルな女を秋へたためこむ
 カラフルな人生でした雪女
 ヘイマンボ草間彌生もわたくしも
 背伸びした私を虹がたしなめる
 世は多彩人は心を病んで行く
 螺子を巻く萎まぬ様にカラフルに
 カラフルな声だね恋をしているね
 カラフルな敵へ無色で立ち向かう
 カラフルな恋をしました五色豆
 ゼリーピーンズ母も妹ももういない

大久保真澄 前 たもつ 木本 朱夏 柿花 和夫 平尾 正人 森口 美羽 前田 紀雄 松本 榎子 萩原 狸月 永田 紀恵 長島 敏子 前川 真 吉岡 修 大堀 正明 阿部 俊八 荻野 浩子 森中恵美子 五味 尚子 喜多 妙花 富永 恭子 森 廣子 永見 心咲 吉村久仁雄 鈴木いさお 吉道あかね 安土 理恵

みどりミドリ緑ムラムラと妬心 上嶋 幸雀
 カラフルな化粧ビエロは笑わない 森田 旅人
 祈る背にステンドグラスから薄日 宇都満知子
 人間を惑わすカラフルな囃 中村 恵
 佳
 カラフルにしようお祭りなんだから 清水久美子
 酔ったときだけ七色になるこの世 新家 完司
 カラフルを咲かせてわたくしの孤独 たむらあきこ
 カラフルな笑顔が福を引き寄せる 上田 和宏
 カラフルな病歴私生きてます 島田 明美
 人
 弱いから二十四色の嘘を吐く 牧野 芳光
 地
 正解はマーブルチョコの掴み取り 郷田 みや
 天
 カラフルな女の好きな冷奴 古今堂蕉子
 軸
 ひたすらに生きてまっ赤な葬を編む



兼題「配る」
 鴨田 昭紀 選

目配りをし過ぎてみんな貝になる 藤井 則彦
 富の配分なぜかお隣とは大差 山本希久子
 団扇の紅葉配る嵐山 杉本 義昭
 薄味の妻の配慮が暖かい 岩田 明子
 気配りに付度という免罪符 西沢 司郎
 宿命を配る一枚の辞令 栗田 忠士
 母が配るとだれも文句など言わぬ 矢倉 五月
 配られたマイナナーに敵が生え 細川 花門
 気配りでお互い杖になつて 吉道あかね
 巢立つ子に心配りは母の愛 森口 美羽
 目配りで見つける今日の飲み仲間 清水久美子
 とれたての幸せ近所へと配る 藤井 智史
 目を配るとやんちゃな顔がひとり 立藏 信子
 気配りの小さな嘘で場が和む 山口弘委智
 気配りができてトップに遠くいる 小林すみえ
 平等に配ったはずの不幸 島田 明美
 蘊蓄も一緒に配る旅みやげ 谷口 修平
 思いやり無償で配るボランティア 原 洋志
 ランドセルへ見守り隊の眼の配り 石田 隆彦
 配られた寿命精いっぱい生きる 小山 紀乃
 気配りは諦めている白いドア 奥澤洋次郎
 赤トンボ被災の地にも秋配る 山田とまと
 おはようを配って今日を立ち上げる 松本 榎子
 最高の笑顔で配る内祝 大内 朝子
 宅配の荷から転がる里の秋 米澤 俣子
 配られた温いスープに救われる 三宅 満子

喪が明けてやつと時間を配る日々
吉凶を配る神社の使命感
童話なき国で子供に配る鏡
厄介な用を配りに来る笑顔
気配りに閉まれた自分見失う
正誤表配るう秋がくる前に
気配りのうまい女が振るタクト
気配りの出来る布石を打っておく
そこここに亡妻の気配り彼岸花
お土産を配って母の旅終る
手の内のジョーカー使えずに終る
「ばぶべば配ると踊りだす」は「行
神さまの運配でしようか当たりくじ
パンをいただいた新幹線泊でした
気配りが過ぎてわたしを見失う
神さまがみんなに配る命の灯
毒も幸運も平等に配る
汗流す心配りがゆき届く
神様の気配り時には不公平
秩序ある列へおにぎり配られる
さんなんを配りおわると秋じまい
太平洋を配ると日本海になる
曼珠沙華秋の配達人である
目配せが読めず孤独な石になる

榎本日の出
山田 順啓
月波 与生
前川 真
柴本ばつは
両川 無限
五味 尚子
加川 靖鬼
加島 由一
宮崎シマ子
村田 博
喜夢 妙花
美馬りゆうこ
小島 蘭幸
田中 章子
松尾美智代
青木 公輔
長浜 美龍
西出 楓楽
前 たもつ
森中恵美子
平尾 正人
山岡富美子
伊達 郁夫

彼岸花回覧板となる命
天国行きキップ選配かまだ来ない
気配りが少し足りない早生みかん
人
幸せを配るとピエロの淋しい眸
地
一期一会神が配ってきたご縁
天
幸せをどうぞシャンソンなどいかが
軸
配置よく並んだイケメンの目鼻



兼題「不思議」

川名 洋子 選

真島久美子
坂本 星雨
武本 碧
平井美智子
太田扶美代
嶋澤喜八郎
江島谷勝弘
両川 無限
木本 朱夏
宇賀 史郎
柿花 和夫
水野 黒兎
藤田 武人
上出 修
原田すみ子
中村 恵
伊達 郁夫

嘘つきが国のトップにいる不思議
不思議な程静か台風の目の中
応援に行ったら負けるタイガース
何でやろいつつも席を譲られる
どちらさん母は不思議な国に住む
笑っているうちに風穴開きました
お水ならジョッキ三杯など飲めぬ
どの星もあんなにきれいだ目には
マジシャンの種も仕掛もある不思議
答弁に官僚コトバなる不思議
古日記妻は天使と書いていた
会社から出ると欠伸はもう出ない
天女にも魔女にもなれる妻である
若作りしてても席を譲られる
昨夜まであった記憶があら不思議
母の直感一発の中よく当たる
ペロペロに酔うて家までよう帰る
閉店セールの度に儲けているらしい
アダムとイブの遺伝子あるか私にも
お米から不思議な水が生まれ出す
プーイング無しで3選した総理
有る方へ金が流れて行く不思議
核の保有に反対しない被爆国
開票を待たず当選赤いバラ
赤字でもドンマイ通す母でした
幾何学的不思議を描く女郎蜘蛛
キロで買い合で計って炊くご飯

大久保真澄
松尾美智代
太田としお
山中 春代
中島 一彌
小林すみえ
矢倉 五月
永見 心咲
大内 朝子
長高 俊雄
沢田 和子
原 洋志
渡辺 富子
山田 耕治
坂 裕之
今井万紗子
森 菊江
三宅 保州
磯島福貴子
矢沢 和女
清水久美子
坂上 淳司
木藤こみつ
竹村紀の治
鈴木 栄子
笹 百合子
澤山よう子

働いて働いて年金チャリン

母さんのボツケ何でも取り出せる

リユウグウで探査機跳ねる摩訶不思議

単身赴任ネクタイいやにふえていた

万物の不思議秋には秋の花

不思議やな妻が酌する三本目

玄関の鍵まさかまさかの冷凍庫

祖母はまだ天動説を信じてる

ゴッホを見かけた夜のカフェテラス

神様がひと月いなくなる不思議

婆ちゃんの宝不思議な物はばかり

五十年飲んでお酒はなぜ飽きぬ

壁のシミ鬼にも仏にも見える

朝五分帰る二時間駅の距離

行き詰まり見えているのに再稼働

切った苦のしっぽが僕の前に行く

国宝と呼ばれ殺意の無い刀

オバハンが電話口では奥様に

婆ちゃんは女だったと不思議そう

ピラミッド君の不思議にやかなわない

天

パソコンに棲んでいるのは大泥棒

軸

じいちゃんが優しくなつてはしゃいでる

坂本 星雨

鴨田 昭紀

延寿庵野鶴

柴本はつは

平井美智子

奥村 五月

足立千恵子

中里はこべ

藤井 宏造

次井 義泰

川上 大輪

福田 好文

細川 花門

北野 哲男

宇都満知子

小川賀世子

美馬りゅうこ

松岡 篤

東内美智子

古今堂蕉子

浜 知子



兼題「一芯」

水野 黒兔 選

たくさんの死が九条の芯にある

耐えるたび心の芯が強くなる

琴線に触れて心の芯疼く

貧しさも父の芯まで変えられず

辛酸を嘗めて男の芯ができ

どん底を耐えてひるまぬ父の芯

恋かしら体の芯が焦げている

独り居の芯まで冷える夜の底

一徹の芯に昭和の血が滾る

削られて細くなつても芯がある

相槌を打ちつつ芯は譲らない

笑顔こそ苦しい時の芯となる

地球の芯崩れ始めた温暖化

カメムシが頭の芯に棲んでいる

やすやすと花芯は見せぬ冬薔薇

受け難いだ平和の芯を守り抜く

ストレスが私の芯を太くする

少年の体の隅に芯育つ

介護者の芯に持つてる温かさ

両川 無限

永田 紀恵

武本 碧

吉岡 修

原田すみ子

延寿庵野鶴

栗田 忠士

前田 楓花

楢元 世津

宇野 幹子

藤原ほのか

山下 純子

山口弘委智

藤井 宏造

新家 完司

坂本 星雨

石田ひろ子

原熊知津子

榎本日の出

辛酸を耐えて鍛えた母の芯

女手一つ芯ある母の持つ温み

逆境で芯の強さが問われてる

この国の芯は揺るがぬ反戦歌

生き方は下手だが芯はぶれてない

温情に脆い男の温い芯

灯明の芯失る心をまるくする

わたくしの芯を貫く八月忌

鉛筆の芯に詰まっている宇宙

柔らかい母の持つてる堅い芯

蠟燭の芯が燃え尽き言う別れ

芯がまたあるからしかと立ちあがる

芯になる人がいるから座が和む

老いの覚悟書く鉛筆の固い芯

どんぐりの仲間やさしい芯がある

修羅くぐり男の芯が太くなる

ボランティアの芯の中には神がいる

屋久杉の芯を支えている地球

背筋立てて自負持つて舞うコマの芯

内田志津子

澤井 敏治

鈴木いさお

山岡富美子

山田 昭紀

山野 寿之

山本 昌代

西出 楓楽

福士 慕情

松尾美智代

小野 雅美

浜 知子

田中 章子

山本希久子

寺井 弘子

米田 恭昌

鈴木 栄子

小谷 小雪

升成 好

アナログの芯が揺るがぬ戦中派

戦中派の芯にあるのは飢えた日々

失敗をした経験が芯となる

母さんの芯は餡こが入ってる

生きにくい世だが芯を足し芯を接ぎ

九条の芯に不戦の旗印

胸の芯一本抜けてから修羅場

岩田 耕治

山田 明子

井澤 壽峰

森口 美羽

芯の有る大樹になれと願う親
言い訳がつづいて腐る梨の芯

杉本 義昭
木本 朱夏

拉致解決に向けて手立てはまだ遙か
大らかになれる遙かに会いに行く
熱愛もあんな遙かに遠花火

増田 隆昭
富田 末男
美馬りゅうこ

アルプスの少女ハイジもおばあさん
悠久の時を旅して生きる水
鮮明な記憶遙か昔の戦闘機

井上恵津子
安田美紗江
安土 理恵

青春の芯本棚の隅にある

小山 紀乃

妹に遙か昔の母を見る

福田 好文

遙かあの世急に近くなりました

榎本 舞夢

反転のチャンスを狙う独楽の芯

山辺 和子

天国へ逢いに行きたい人がいる
読破まで遙か源氏に逢いに行く

鈴木 かの

新婚の組んだローンは三十年
三丁目の夕日遙かに下駄の音

平松かすみ
山本希久子

やさしさを辿るとでかい芯に会う

小林すみえ

抱き枕遙かな日目をたぐりよせ
さよならの声が遙かな汽車の窓

岩田 明子

願っても世界平和は夢の夢
いい名前つけて望んだ子の未来

西 美和子
太田としお

愛はあるか芯はあるかと神が問う

五味 尚子
小島 蘭幸

少年の心に戻りたい遙か
癌告知頭遙かへ飛びました

山田 耕治
細川 花門

遥かだがやっぱりこの道を歩く
いつかいつか火星人ともお友だち

大浦 初音
岩佐ダン吉

塔の芯千年先の風と立つ

笹 百合子

遙かなる「はやぶさ2」の無事祈る
鈍行で行く自分史はまだ遙か

田中 新一

母よりも遙かに旨い父の飯
時のひらに宇宙なにわの町工場

片岡 加代
澤山よう子

替え芯は不要私である限り

鈴木 かの

四億年の時間を食べた深海魚
足跡を辿れば亡父と同じ道

次井 義泰

七号サイズ着ていた頃もありました
陽だまりの溶けて遙かとなる記憶

斎藤 隆浩
中島 華

ヒト科の罪地球の芯が狂いだす

油谷 克己

月遙か兎もちつくまが良
吟醸の蔵は遙かな時を抱く

山田 順啓

今聞いたことが遙かになる頭脳
平成を閉じれば昭和もう遙か

緒方美津子
川畑まゆみ

芯のある維新の漢よみがえれ

兼題「遙か」



大内 朝子 選

色褪せた菜みすゞの三ページ
ラムネ瓶遠いあの日が雫する

藤原 大子

観覧車遙か未来を語り合う

谷口 東風
村上 直樹

遙かだと思つた傘寿超えました

竹村紀の治

想定を遙かに越えた地の怒り
目を閉じて折れば遙か母の声

松岡 篤

夕映えや遙か浄土の明かりかも
灯台がともる遙かな人思う

長高 俊雄
小島 蘭幸

好き嫌い遙かむかしの万華鏡

上山 堅坊

羊水で遙か夢見る児のキック
青春は遙かセピアの風になる

榎本日の出

一粒の米に遙かな歴史あり
目標は遙かこつこつ石を積み

居谷真理子
山口 光久

呼び鈴を鳴らし続けた日の遙か

高木世紀子
嶋澤喜八郎

拉致の国へ遙かに届け母の愛

酒井 紀華
中川ひろ介

人間を脱いで真っ白まで遙か

山野 寿之

人

真髄に迫る晩鐘のはるか

永見 心咲

地

100%のシルクの愛であった頃

斉尾くにこ

天

雲の峰遙か路郎師薫風師

鈴木いさお

軸

かすみ草真紅のバラに憧れる

兼題「男と女」

小島 蘭幸 選



寄り添うて金婚という宝物

佐々木満作

楽しいこともまたあるさ二人なら

内藤 憲彦

越えてきた山を夫婦で振り返る

菱木 誠

楽しそうとんちんかんな父と母

山本 昌代

いつからか力仕事は妻になり

敏森 廣光

肩寄せて夕陽見ているシルエツト

山口ヨシエ

平行線男と女ただ歩く

岩佐ダン吉

赤い糸手繰ればそこに君がいた

長高 俊雄

男運悪いが女続けます

高田まさじ

恋人の聖地巡りがまだ続く

赤松ますみ

四畳半アナログでした赤い糸

広瀬 勝博

お互いに鞭を緩めてゆく夫婦

小谷 小雪

マリオネット軽く男を操って

山下怜依子

初恋の人胸に棲み妻愛す

猫が逃げ男がにげた影を追う

地獄まで一緒と誓う仲やつた

男と女恋は一生適輪期

男は空女は海と語り合う

天国ではみーんな善男善女

誤解のまま男とおんな見る火花

今の世にメシ風呂寝るは通じない

愛と憎おとことおんな居るかぎり

主人とは雨のち曇りこんなもん

墓場まで相合傘で参ります

亡父曰くお前が男やつたらなあ

絵の具では出ない夫婦のセピア色

タイや婚自然発火をしたまんま

共学のおかげ同窓会続く

ひとことで母をおんなに変えた父

混浴を皆たのしんでいる足湯

健さんに心底惚れたのは男

極楽も地獄もぐり睦み合う

茶のみ友達もう性別は気にしない

美女と野獣あんがいうまくいつている

女に武器あり男には武器がない

もつれたらたつたふたりもままならぬ

立ち合ひ出産してから頭上がない

デュエットの相手自由に選びたい

男は肉ジャガ女はイチゴパフェ

谷口 東風

酒井 紀華

吉村久仁雄

松岡 篤

原 洋志

大西 将文

立蔵 信子

山東日出男

橋田 綾子

内田志津子

山本 進

田中 章子

前田 楓花

北野 哲男

島田 誠一

永見 心咲

山田 耕治

毛利 元子

飛永ふりこ

安土 理恵

柳田かおる

大堀 正明

本田 智彦

西出 楓葉

上田ひとみ

新家 完司

男と女いるからこの世あたたかい

空気にはなれそうもない夫婦です

カマキリの雄に男は負けている

二十年飲み友達距離が好き

膝枕で男の骨をすつと抜く

長男に生まれ源氏名あけみです

惚れたのは女振られたのは男

そんな日もあったわねえと猪口ふたつ

遠まわりしてまた巡り合う二人

美しくみにくく情念がからむ

夕まぐれ貴方の好きな茄子を焼く

男と女余白を埋めていくこの世

佳

男は点を女は線を描いている

男にも女にもある古戦場

妻ならば困るおんなと飲んでいる

真珠婚過ぎててもオセロ終わらない

同じ夢見上げた男いなくなる

人

わたくしの少女と君の少年と

心配は要らない半分は男

地

やさしい人と暮らしていると風だより

天

おどけたあとの男と女深くなる

軸

能勢 利子

小山 紀乃

加島 由一

上村 夢香

杉本 義昭

宇都宮ちづる

三宅 保州

片岡 加代

富永 恭子

森 茜

徳山みつこ

今井万紗子

郷田 みや

山岡富美子

美馬りゅうこ

月波 与生

関 よしみ

居谷真理子

中岡千代美

島田 明美

参加者の感想

第24回川柳塔まつりに参加して

宇都宮ちづる（同人・羽曳野）

台風25号が日本海にぬけて大阪は直撃を免れたが、出席者は昨年より30名ほど少なかったようだ。私は今年で6回目の参加となる。1回目に入選してからは4回全没の悲哀を味わってきた。

新家理事長の「自嘲と自慢」のお話はそれぞれ句に対しての解説がとても楽しく愉快に聴かせて頂いた。また重箱の隅をほじくるように句を作るように、というお話は心に残った。遠慮がちに歌われた。神田川はもう少し聴きたかったかな。今年は1句抜けた!!

同人になりました

市川 雄太（同人・松原）

十月六日の川柳塔まつりに同人会員となって初めての参加でしたが、あたたかい雰囲気と川柳に対する熱い思いを感じました。あいさつは少し緊張しましたが

これで「やっと同人会員になったんだ」と実感しました。

実は二〇一一、一二年もまつりに参加していましたが、当時は誌友になった直後とあってお客様感覚でしたが、今回からは川柳界を盛り上げていくんだという気持ちになりました。これからも句作を楽しんで日々精進します。

緊張と感動

島田 明美（大阪市）

「川柳塔まつり」に初めて参加させていただきました。広い会場に大勢の方々があつまって来られるのを緊張しながら見ておりました。そして、身に余る賞を頂戴することになり壇上に呼ばれました。

小島蘭幸様がその場で、トロフィーと共にお言葉をくださいました。

「よい句をありがとうございます」と。

緊張と感動で足が震えました。

本当にありがとうございます。

ご指導いただいております先生、そして仲間達に感謝致します。

みんな青春

柳田かおる（同人・松山）

台風の中飛行機が出てラッキーでした。新家完司さんのお話を聞きたくて……。

「川柳に表れた自嘲と自慢」について、具体的にみなさんの句を取りあげてのお話は解りやすく、引き込まれていきました。

美智子さんのカラフルの披露から、蘭辛主幹のふんわりとしたステキな披露の余韻に浸りました。懇親会では大勢のみなさんとお話もでき、隠し芸などで大興奮、みんな青春してるところでした。

木本朱夏さんの最後までのお配り心遣いを感じながら感動の一日が終わりました。

三回目の塔まつり

郷田 みや（誌友・松山）

台風の進路を気にしながら「まつり」に参加したいと、四国から飛んで行きました。今年で三回目、一年に一回の楽しみです。会場でお近づきになれた方が増えた事、しあわせです。

「自嘲と自慢」のおはなしは、レジメに

いっぱい載っている句を紹介して頂きながら、楽しくあつという間でした。

懇親会も乾杯から木津川先生の万歳三唱まで、皆様のお陰で満喫することができました。

来年の「まつり」の事を想像しながら帰ってきました。

出 会 い

月波 与生（仙台）

実は人との付き合いがあまり好きではない。人間関係は面倒くさいし、休日は独りでオカリナでも吹いている方が好きだ。

そんな人間が深夜バスに乗って川柳塔まつりに参加するなんて信じられない。

そのきっかけを与えてくれた森山文切さん真島久美子さんに感謝。井上剣花坊は「川柳は民衆文芸であり民衆悉く詩人である」といった。人生の多くない時間のなかで川柳を愛する人と出会い川柳を創れたら幸せだろう。初めての川柳塔まつりに参加してそのようなことを考えた。

塔まつり雑感

丹後屋 肇（同人・枚方）

塔まつりの当日は台風の影響で30度を超す蒸し暑さに辟易していました。新家完司理事長の「自嘲と自慢」のお話に、気分もすっきりしました。優れた川柳作品を引用して、漫談家も顔負けの滑舌で腹の底から笑わせて頂きました。川柳とは本当におもしろくて楽しい文芸ですね。翻って本題の課題句で私は全没でした。大変悔しい思いをしましたが、他の高名な方も全没組におられましたので正直言って落ち込まずに済みました。完司理事長の川柳「全没の傷は全治一カ月」くらいでしょうか。

来年も元気であればまた参加して枯れ木も山の賑わいにしたいと思います。

懇 親 宴

場所は三階葛城の間、句会の熱気そのままに懇親宴が開催された。司会進行は片山かずお、藤井宏造。川上大輪副主幹の開会の挨拶に続き、日川協の本田智彦

副理事長の発声による乾杯で宴はスタートした。

木津川計氏、番傘川柳本社田中新一主幹の温かいご祝辞を受け、酒も料理も会話もいっそう弾むひととき。恒例のカラオケ大会が始まり、次々と自慢の喉が披露された。みちのくでの喜びを慕情さんの応援を得て歌った久仁雄さんの「津軽じょんがら節」、千代さんの朗朗たるひばりとこみつさんの楽しいひばり演歌の競演、智史さんの「高原列車は行く」など全てを紹介できないのが残念な時間が流れ、「六甲おろし」が迫る頃、「全没の夜は寝言で呼名する」と披露された松浦英夫さんの「鯔川沢甚句」、みぎわはなさんの「ラストダンスは私に」で会場は大いに盛り上がった。

結びは蘭幸主幹の歌で全員が大きな輪となる「星影のワルツ」で再会を約した。木津川計氏の謎かけ「川柳塔とかけて満塁ホームラン2本と解く。心はハッテン間違いなし」を添えた万歳三唱で、名残り惜しさいっぱいの散会となった。

（大久保真澄）

第24回 川柳塔まつり

川柳塔



会場風景



小島蘭幸主幹
の挨拶



司会の鈴木いさお・居谷真理子



投句風景



川上大輪副主幹
の挨拶



新同人の方々（小島蘭幸主幹を囲んで）



麻生路郎師銅像



作句の様子



受付の様子

懇親宴



乾杯の音頭をとる
田中新一氏



全日本川柳協会事務局長
本田智彦氏の挨拶



木津川 計氏の挨拶



みんなで輪になって



楽しく合唱される皆さん



万歳三唱

川柳大会参加者

出席者274名
(順不同・敬称略)

〔青森〕 福士慕情

〔宮城〕 月波与生

〔茨城〕 山田とまと

〔東京〕 川名洋子

〔愛知〕 富田末男 金子美千代

山本三樹夫

〔京都〕 榎本宏子 三宅満子 今井万紗子

山田葉子

〔大阪〕 穂山常男 油谷克己 赤松ますみ

阿部俊八 池田純子 井澤壽峰 石田ひろ子

市川雄太 岩田明子 上嶋幸雀 磯島福貴子

上出 修 上山堅坊 榎本舞夢 井上恵津子

大浦初音 大堀正明 荻野浩子 指宿千枝子

奥村五月 小野雅美 貝塚正子 岩佐ダン吉

柿花和夫 籠島恵子 加島由一 内田志津子

片岡加代 金川宣子 賀部 博 宇都満知子

川端一步 喜夢妙花 久世高鷲 江島谷勝弘

乗原道夫 酒井紀華 坂 裕之 榎本日の出

坂上淳司 坂本星雨 阪本秀子 大島美智代

櫻田秀夫 澤井敏治 沢田和子 太田扶美代

島尾政男 島田明美 島田誠一 小川賀世子

初代正彦 新海信二 杉本義昭 片山かずお

鈴木栄子 鈴木かこ 関よしみ 鴨谷瑠美子

伊達郁夫 立蔵信子 田中新一 川畑まゆみ

田中廣子 谷口東風 丹後屋肇 岸井ふさゑ

次井義泰 辻 肇 土田欣之 木藤こみつ

寺井弘子 寺川弘一 桝尾奏子 古今堂蕉子

富田啓二 内藤憲彦 中岡 妙 齋藤さくら

中川一男 中島一彌 中島 華 阪井美世子

長高俊雄 中園 清 中山春代 佐々木満作

中村 恵 西川更紗 西沢司郎 柴本ばっは

西出楓楽 西美和子 能勢良子 嶋澤喜八郎

原 洋志 平賀国和 藤井則彦 島田千鶴子

藤田武人 藤塚克三 藤村亜成 鈴木いさお

藤原大子 穂口正子 本田智彦 高木世紀子

前たもつ 前田紀雄 増田隆昭 徳山みつこ

升成 好 松岡 篤 松浦英夫 富山ルイ子

水野黒兎 村上玄也 村上直樹 中川ひろ介

森田旅人 森 廣子 矢倉五月 中里はこべ

山根妙子 山野寿之 山本 進 原熊知津子

雪本珠子 横山里子 吉岡 修 原田すみ子

米澤俣子 平井美智子 平松かずみ

弘津秋の子 藤島たかこ 藤原千恵子

松尾美智代 宮崎シマ子 森中恵美子

森松まつお 両澤行兵衛 安田美紗江

山岡富美子 山口弘委智 山本希久子

吉道あかね 吉道航太郎 吉村久仁雄

宇都宮ちづる 美馬りゅうこ

〔兵庫〕 青木公輔 赤井花城 足立千恵子

上田和宏 梅澤盛夫 長川哲夫 上野多恵子

加川靖鬼 北野哲男 糀谷和郎 上田ひとみ

小山紀乃 斎藤隆浩 梶元世津 延寿庵野鶴

田中章子 多田雅尚 谷口修平 太田としお

敏森廣光 富永恭子 長島敏子 緒方美津子

永田紀恵 長浜美籠 能勢利子 奥澤洋次郎

萩原狸月 浜 知子 福田好文 久保田千代

福田正彦 藤井宏造 藤田雪菜 米田利恵子

細川花門 堀 正和 村田 博 清水久美子

森 菊江 山内 迪 山口光久 城水めぐみ

山崎武彦 矢沢和女 山田耕治 竹山千賀子

山辺和子 中岡千代美 野口真桜子

東内美智子 前川千津子 みぎわはな

山口ヨシエ

【奈良】 安土理恵 安福和夫 居谷真理子

宇賀史郎 大内朝子 大西將文 大久保眞澄

五味尚子 木嶋盛隆 笹百合子 小林すみえ

中堀 優 菱木 誠 松本柁子 澤山よう子

山田順啓 山本昌代 山田恭正 水津加央里

山下純子 米田恭昌 渡辺富子 飛永ふりこ

長谷川崇明

【和歌山】 石田隆彦 上田紀子 山東日出男

宇野幹子 川上大輪 木本朱夏 楠原富香

小谷小雪 武本 碧 三宅保州 藤原ほのか

森口美和 松原寿子 たむらあきこ

【鳥取】 新家完司 平尾正人 斉尾くにこ

両川無限 前田楓花 牧野芳光 竹村紀の治

【島根】 石橋芳山

【岡山】 丹下凱夫 藤井智史 永見心咲

【広島】 鴨田昭紀 小島蘭幸

【山口】 坂本加代

【愛媛】 栗田忠士 郷田みや 柳田かおる

【佐賀】 真島久美子

【熊本】 岩切康子

【沖縄】 前川 真

.....

御芳志お礼(敬称略・順不同)

田中新一・小島蘭幸・新家完司・山本希久子
赤井花城・天根夢草・川上大輪・鴨谷瑠美子

西出楓楽・前たもつ・村上玄也・平井美智子
水野黒兎・福士慕情・稲見則彦・久保田千代
大内朝子・柿花和夫・寺井弘子・古今堂蕉子
鴨田昭紀・岩切康子・楢元世津・前川千津子
川端一歩・山口光久・三宅保州・富山ルイ子
長浜美籠・鶴田遠野・藤井宏造・居谷真理子
内藤憲彦・木本朱夏・藤田武人・片山かずお
栃尾奏子・松原寿子・島田誠一・大久保眞澄
松本文子・山岡富美子・江島谷勝弘

吉村久仁雄・森松まつお・鈴木いさお
時の川柳社・わかくさ川柳会・
川柳塔みちのく・きゃらばく川柳会
コーキ封筒(株)・美研アート

創立95周年記念川柳大会

第25回 川柳塔まつり

は

二〇一九年九月二十八日(土)に開催

愛染帖

新家 完司 選

(投句267名)

松江市 榎瀬みちを

「母さん」と祈る胃カメラ前にして

(評) 胃カメラぐらいで祈るなよ、と思うが、初体験なのだろう。追い詰められて「母」を想うのは、特攻で散った若き兵士達と同じ。

河内長野市 大島ともこ

ガイドには載らぬ穴場にYOUの列

(評) 人気テレビ番組「YOUは何しに日本へ？」から定着したYOU。ツイッター等で情報を得て、私達より穴場を知っている。

堺市 奥 時雄

母乳一年牛乳八十年

(評) お母さんのお乳には一年間お世話になったが、牛さんのお乳には八十年も！牛肉まで頂戴して、「牛さんありがとう！」。

沖縄県 宮 すみれ

通販の誘う魔術にブレーキを

(評) 心理学者のアドバイスなのか、巧みに購買欲を刺激してくる通販。買い物依存症で破産する人が増えないよう規制が要る。

大阪市 高杉 力

善人の顔で出入国審査

(評) 旅券を握って「悪いことしていません」という顔で審査ゲート前に行列。こんな面倒なこと、世界が一つになれば解消する。

岡山市 永見 心咲

子は菓立ち茶色主流になる夕餉

(評) 食材としては、茸類・豆類・牛蒡・菊・干瓢・海苔・揚げ等々。地味な食卓になってきたが、彩りより栄養と味だ。

奈良県 渡辺 富子

目玉焼きだんまり夫婦にらみつけ

(評) 談笑することもなく、むっつり向き合っている夫婦。お皿の目玉が、「二人とも何とか言ったらどうなの！」と睨んでいる。

橋本市 石田 隆彦

大地震の先に逝きたくなくてきた

(評) 死者33万人とも予想されている南海トラフ巨大地震。溺死や焼死など悲惨な目に遭うなら、お先にベッドの上で死にたい。

寝屋川市 籠島 恵子

十分が十三分になった駅

(評) 勿論、駅が離れて行ったのではない。歩くのが遅くなっただけ。その内に二十分になるだろうが、歩けるうちは歩こう。

鳥取市 奥田 由美

近くまでの才へは終えたと思っ今

(評) いろいろな試練を超えて手術を受けて、

ようやくここまで辿り着いた。今後は病気せぬように、手術などないように願いたい。

和歌山市 古久保和子

インターネットで修行をしたとラーメン屋

堺市 内藤 憲彦

またしても鍵を閉めたか見に帰る

大阪市 谷口 義

死にそうなくらいではなかなか死ぬ

鳥取県 竹信 照彦

税金が高いと妻が僕に言う

八尾市 村上ミツ子

午前二時あともう少し眠ります

大阪市 宇都満知子

お肌がつるん熟睡ができた朝

池田市 太田 省三

影絵劇キツネの耳にゆびのシワ

菅屋市 黒田 能子

私のために手すりいっぱい家の中

三原市 鴨田 昭紀

イケメンに弱い大阪のおばちゃん

箕面市 中山 春代

飴ちゃんは大阪弁の潤滑油

三田市 村田 博

元の値が高過ぎました五割引き

倉吉市 山中 康子

お経上げすつきり今日を締めくくる

熊本市 杉野 羅天

壺中華菜膳料理夏土用

左から見れば夫もよい男
紀の川市 北山 絹子

話し終えそれからねっと出る本音
豊中市 水野 黒鬼

お喋りも団扇も止まるホームラン
鳥取市 倉益 一瑠

昭和にはなかったタイプ ネット詐欺
藤井寺市 鈴木いさお

隣人の死その隣から知らされる
大阪市 小野 雅美

この夏はうちのビールも新記録
神戸市 近藤 勝正

家と外妻は上手にリバーシブル
大阪市 笠嶋 恵美

鉄板の上で焼かれる夏でした
大豆にはまり一品増える膳
神戸市 能勢 利子

お隣も防犯カメラつけはった
テフロンがすぐに剥がれるフライパン
倉吉市 牧野 芳光

上海ガニよりもおいしいモクスガニ
スーパが潰れてコンビニになった
橿原市 居谷真理子

月光を浴びて瞑想するカポチャ
ため息を欠伸に変えていくお風呂
佐賀県 真島久美子

大好きと言わず嫌いじゃないと言う
出逢いならあるよ面倒くさいだけ

漢検の自信をくじくキラキラ名
明石市 梶谷 和郎

ぞうきんになって一息つくタオル
大阪府 平井美智子

朝刊をしっかりと読んでウオーキング
岡山市 丹下 凱夫

ゴキブリも蜂も我が家の居候
鳥取市 福西 茶子

役立ったCMからの新知識
高槻市 富田 美義

血行に貧乏ゆすり役に立つ
カツ丼をレンジで食べる癖がつき
奈良市 尾畑なを江

塩壺を放して嫁の世話になる
神様のくれた臓器で終われそう
和歌山市 福井 菜摘

天誅じゃないのか転けてばかり
穴掘って埋めるか誕生日なんて
松江市 石橋 芳山

怒るたび数値が上がる骨密度
身を削るほどの努力はしていない
黒石市 北山まみどり

痛む足引きさずるわたしおばあさん
もうそろそろ止めようかしら白髪染め
橿原市 安土 理恵

犬小屋も鎖も知らぬ室内犬
言い訳の小道具となる腰や肩
鳥取県 斉尾くにこ

大袈裟でなく死ぬほどに暑かった
和歌山市 磯部 義雄

ジンジャエールのみすぎた夏シユワシユワに
三田市 北野 哲男

口ついて出るは猛暑の詩ばかり
墓まいり鳴かない蝉が落ちて来た
豊中市 松尾美智代

人間の驕りを責める雨地震
河内長野市 木見谷孝代

天に地に龍がのたうち回る秋
八尾市 前田 紀雄

最強台風列島難ぎ倒す
朝霞市 前田 洋子

台風に借家は気楽ドア閉める
香芝市 山下 純子

台風豪雨でも忘れずに虫が鳴く
京都市 都倉 求芽

台風の翌日も歩く京浴衣
西脇市 七反田順子

竹林も倒れて痛い観光地
堺市 矢倉 五月

メシ フロも言えず停電ネルとだけ
修理費も恐怖古くてでかい家
大阪市 津守 柳伸

行く夏や今二人して入院中
神戸市 奥澤洋次郎

高槻市 松岡 篤
褒められて川柳バカへまつしぐら
鳥取市 山下 凱柳

老いゆく左脳呆けないために指を折る
羽曳野市 吉村久仁雄

歩きながら句づくり結局一万歩
枚方市 山口弘委智

駄句鍛え秀句育てる広辞苑
宇部市 平田 実男

だんだんと読めて書けない字が増える
鳥取市 谷口回春子

楽しくもあり苦しくもある句会
塩竈市 木田比呂朗

川柳のプレバト版を待ち焦がれ
鳥取市 夏目 一粋

投函後誤字に気づいて諦める
高槻市 安田 忠子

人生の褒美のような自由な日々
沖繩県 森山 文切

下ネタが似合うオヤジで結構だ
岡山県 山縣のぶ子

借りてまで見栄を張るなど猫笑う
篠山市 長谷川善輔

猫を抱き大谷君見る外は雨
大阪市 田中ゆみ子

近過ぎて夫が見えぬ子が見えぬ
横浜市 菊地 政勝

エンディングノートに書こうありがとう

伊丹市 延寿庵野鶴
ピタゴラスの定理が生きる網代編み
大阪市 森 廣子

古伊万里のお皿に似合うマスカット
千葉県 廣瀬 良磨

都会には私の座る場所がない
岡山県 田中 恵

ぐい呑みの一つひとつに旅の顔
高槻市 片山かずお

うっとりとして見ていた美女に睨まれる
和歌山市 土屋起世子

自分のこと自分で出来る有り難さ
倉吉市 大羽 雄大

慌てると躓く所決まつてる
河内長野市 森田 旅人

インスタに邪魔され宙に浮くお箸
河内長野市 梶原 弘光

入院の効用三度寝て食べる
羽曳野市 徳山みつこ

スイッチオンえいと岩を飛び越える
京都市 清水 英旺

手の平の山なす葉一気飲み
大阪市 田中 廣子

友見舞い衰え悲しもどかしい
宝塚市 太田としお

健康と寿命はどうも別らしい
長岡京市 山田 葉子

子の成長100円ショップが知っている

鳥取県 細田 裕花
いただいた花の種から続く緑
松江市 中筋 弘充

へそくりの置き場も変える模様替え
河内長野市 穂口 正子

日めくりはまとめて千切る四五日分
鳥取市 岸本 宏章

暑さのピーク過ぎて疲れがどつと出る
宝塚市 岸田 万彩

泣き言を言うんじゃないと彼岸花
下松市 有海 静枝

介護する契約交わすシニア婚
河内長野市 黒岩 靖博

バワハラと叫ぶ乙女の下根性
山口市 青木 隆子

叔父叔母が揃えば祖母の偉大論
唐津市 仁部 四郎

駅ビルの本屋ひもかけ週刊誌
大阪府 高木 道子

支え合う翁と媪の膝栗毛
神戸市 山根 弘華

元号に平和を願う老い一人
大阪市 平賀 国和

哀切で色香漂う風の盆
玉野市 片岡 富子

曇天日澄んだ絵画で洗われる
奈良県 安福 和夫

比べたりするなよ妬み増えるだけ

東京都 川本真理子
うつつらと猫に光輪見えてくる

宝塚市 田中 章子
本気だなこちら猫に身構える

高槻市 鳥田千鶴子
露地の奥猫ににらまれ引き返す

唐津市 山口 高明
出没の猪の親子も命がけ

河内長野市 山岡富美子
責任もノルマもなく液状化

神戸市 山口 光久
平凡な夫を自慢してる妻

貝塚市 石田ひろ子
控え目に昼寝を誘う鳩の声

堺市 村上 玄也
十年一昔昭和太昔

鳥取市 前田 楓花
引き出しを全部開けても空っぽだ

大洲市 中居 善信
さすが土佐さえずりという物を食う

三田市 上田ひとみ
ほめられてうれしいのです本当は

堺市 澤井 敏治
二階は暑いと貧乏神が降りてきた

羽曳野市 宇都宮ちづる
無呼吸の検査電極まみれの夜

神戸市 細川 花門
うっかりもボケも日増しに板につき

大阪府 米澤 俣子
月々の黙祷つきはワタシかも

堺市 坂上 淳司
閃きを絞り出すのによい便器

海南市 小谷 小雪
苦言吐く鏡をいつも持ち歩く

土佐清水市 辻内 次根
八十歳難儀している自分の歯

尼崎市 清水久美子
身長が縮んで長足になった

岩出市 村中 悦男
ふろしきは包む形をきらわれない

藤井寺市 太田扶美代
ごく稀に善人もいる議事堂に

広島市 岸本 清
酒という飲む点滴は週五日

那覇市 前川 真
問診に薄めて書いた酒の量

奈良市 山本 昌代
じいちゃんの前動力は酒なんや

大阪市 藤田 武人
二級酒の味引き立てる丸谷焼

米子市 成田 雨奇
門灯は点けぬ晩酌終わるまで

横浜市 川島 良子
説教がそろり始まる四杯目

河内長野市 村上 直樹
酎ハイにオリブ浮かべ旅気分

香芝市 大内 朝子
回復の兆しお酒が欲しくなる

府中市 岸田 武
のんびり屋なんだが酒は急ピッチ

富田林市 山野 寿之
父の日に父が集まる縄のれん

青森県 松山 芳生
バカボンの兄ちゃん出てくる縄のれん

弘前市 福士 慕情
居酒屋の銚子おおむね上げ底で

和歌山市 北原 昭枝
足の冷えそろそろ酒が旨くなる

米子市 竹村紀の治
自分しか飲まない酒が減っている

大阪市 若本 安代
河豚ちりと地酒の美味い秋がきた

奈良県 中堀 優
百葉の長わが帰り待っている

東かがわ市 川崎ひかり
母さんの酒の肴を作る父

鳥取市 永原 昌鼓
紙コップ俄づくりの酒の宴

舞鶴市 伊藤 恒
花に舞う蝶よお前もほろ酔いか

弘前市 稲見 則彦
この夏でビール太りになっている

富士見市 中島 通則
下戸の下戸無垢な肝臓ピンク色

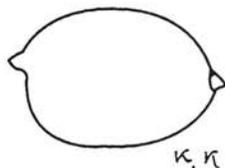
共選欄

檸檬

抄

(薰風書、カットとも)

(投句 343名)



「アンテナ」 川端 一步 選

アンテナを避けてゆうゆう逃亡者
美しく老いるアンテナ探す旅
イージスの中のアンテナ見てみたい
アンテナは内緒話が大好きで
アンテナは楽しい話題だけキャッチ
アンテナが話題をさらう猛台風
瞑想もアンテナ張って危機避ける
アンテナを張りめぐらせて淋しい日
アンテナをたたみ孤独な道歩む
アンテナを折って逢いたい人と逢う
アンテナで地図のないあの世を探る
天災へアンテナ無力作動せず
アンテナをアベノミクスが素通りし
風圧に耐えアンテナはたじろがぬ
アンテナショップ産地の米が飛び回る

大阪府 古今堂蕉子
尼崎市 藤田 雪菜
熊本市 杉野 羅天
和歌山市 坂部紀久子
鳥取市 福西 茶子
箕面市 寺井 柳童
大阪市 金川 宣子
寝屋川市 森 茜
堺市 村上 玄也
佐賀県 真島久美子
鳥取市 夏目 一粋
松山市 宮尾みのり
阿南市 小畑 定弘
大阪市 津守 柳伸
貝塚市 石田ひろ子

「アンテナ」 山岡 富美子 選

アンテナの高さは人を恋う高さ
アンテナを伸ばす傘寿のろばの耳
好奇心まだアンテナに伸びしろが
薔薇のトゲ称賛だけを受信する
都合良く時にアンテナ故障する
アンテナをいっぱい張って病んでいる
アンテナがキョロキョロしてる好奇心
アンテナを低くしました静かです
アンテナから洩れた話が面白い
アンテナが役に立たない恋心
アンテナが高いと良いことありますか
アンテナの錆び取りにゆく美術館
アンテナがそとと張られている不気味
アンテナの森で迷子になっている
アンテナを独り占めする風の私語

藤井寺市 太田扶美代
和歌山市 堀 富美子
吹田市 須磨 活恵
橿原市 居谷真理子
米子市 伊塚美枝子
京都市 都倉 求芽
香芝市 大内 朝子
藤井寺市 高田美代子
富田林市 片岡智恵子
唐津市 坂本 蜂朗
大阪市 高杉 力
堺市 内藤 憲彦
橋本市 石田 隆彦
八尾市 村上ミツ子
岡山市 田中 恵

特ダネの尻尾つかんだゴミの中
 室内アンテナくるり回して観た昭和
 五官みなアンテナにする人の性
 見えぬとこにきつとアンテナ張られてる
 アンテナを低目に生きてゆく余生
 確かな情報は自分の目と耳
 アンテナの感度どうなの外務省
 一本のアンテナが追う危機管理
 シニアボラ錆びたアンテナ磨きあう
 薔薇のトゲ称賛だけを受信する
 アンテナを張って漏洩逃がさない
 どん底で少しアンテナ尖らせる
 聞きたがる耳には勝てぬ重い口
 アンテナが救ってくれた虐待児
 娘とはアンテナ切らず二十四時
 アンテナをびかぴかにして立ち話
 美容院の椅子でアンテナ高くする
 監視カメラ性善説は信じない
 西ばかり向くアンテナが困らせる
 アンテナを北向きにした拉致家族
 晩学へ立てたアンテナ揺らして
 私も監視カメラに写ってる
 アンテナは澄んだ瞳と澄んだ耳
 信じたい人へアンテナ向けている

河内長野市 中島 一彌
 横浜市 川島 良子
 男鹿市 伊藤のぶよし
 四條畷市 吉岡 修
 高槻市 富田 保子
 大阪市 江島谷勝弘
 堺市 奥 時雄
 大阪市 森 廣子
 大阪市 岩崎 玲子
 樺原市 居谷真理子
 大阪市 坂 裕之
 大阪市 小野 雅美
 茨木市 島田 誠一
 三田市 谷口 修平
 寝屋川市 富山ルイ子
 堺市 柿花 和夫
 鳥取市 田中 天翔
 弘前市 高瀬 霜石
 桜井市 安土 理恵
 和歌山市 磯部 義雄
 大阪市 原田すみ子
 八尾市 山根 妙子
 大阪市 宇都満知子
 羽曳野市 徳山みつこ

アンテナを張ることも無し苔の寺
 アンテナが私の海で溺れてる
 アンテナは内緒話が大好きで
 アンテナは亮らぬアンテナシヨップです
 一挙一動アンテナ嘘も真実も
 アンテナも昇る朝日の方へ向く
 アンテナと共に縮んで来た背丈
 アンテナを張り過ぎ友に疎まれる
 アンテナを高く声なき声を聞く
 聞きたがる耳には勝てぬ重い口
 監視カメラ性善説は信じない
 西ばかり向くアンテナが困らせる
 生きるという拷問アンテナで見張る
 アンテナで増幅をする立ち話
 アンテナを張りめぐらしてまだ独り
 ばあちゃんを持つアンテナも老朽化
 室内アンテナくるり回して観た昭和
 アンテナを張りびつたり語彙探し
 W・I・F・Iを掴めず寂しいアンテナ
 アンテナの疲れ電波が届かない
 折らないでそれは私のパラボラー
 アンテナに口がついてるから困る
 アンテナをときに引つ込め目をつぶる

大阪市 津村志華子
 松江市 藤井 寿代
 和歌山市 坂部紀久子
 松江市 相見 柳歩
 神戸市 山口 光久
 米子市 政岡日枝子
 香南市 桑名 孝雄
 豊中市 藤井 則彦
 鳥取市 土橋 螢
 茨木市 島田 誠一
 弘前市 高瀬 霜石
 桜井市 安土 理恵
 鳥取市 夏目 一粋
 河内長野市 黒岩 靖博
 八尾市 宮西 弥生
 奈良市 米田 恭昌
 横浜市 川島 良子
 河内長野市 木見谷孝代
 松江市 石橋 芳山
 雲南市 菅田かつ子
 岡山市 永見 心咲
 倉吉市 牧野 芳光
 岡山市 大石 洋子

アンテナに黄色いリボン付けておく
はやぶさに高いアンテナ張っている
アンテナを頼って日々の暮し向き
BSのお陰広がる世界観

アンテナを巡らし母は司令塔

アンテナが錆びない様に友といふ

アンテナも昇る朝日の方へ向く

アンテナの情報過多に溺れそう

アンテナに口がついているから困る

良い知らせアンテナ張って待っている

アンテナが空気も風も読んでいる

アンテナの向きを変えれば見える明日

アンテナを高く声なき声を聞く

アンテナを伸ばしてヒロシマを語る

オフレコが控え室から洩れている

アンテナをしつかり張って明日を読む

アンテナの錆び取りにゆく美術館

アンテナがむくむく動く秋が来た

アンテナが星のささやきキャッチする

アンテナの高さは人を恋う高さ

アンテナの数だけ世界見えてくる

アンテナにまだ平成の周波数

寝屋川市 籠島 恵子

西脇市 七反田順子

和歌山市 北原 昭枝

藤井寺市 鈴木いさお

富田林市 中村 恵

三田市 北野 哲男

米子市 政岡日枝子

横浜市 菊地 政勝

倉吉市 牧野 芳光

奈良県 中堀 優

貝塚市 吉道あかね

門真市 坂本 星雨

鳥取市 土橋 螢

三原市 笹重 耕三

尼崎市 清水久美子

高槻市 初代 正彦

堺市 内藤 憲彦

松江市 榎瀬みちを

長岡京市 山田 葉子

藤井寺市 太田扶美代

名古屋市 山本三樹夫

海南市 小谷 小雪

オフレコが控え室から洩れている

鳥肌が立つと幽霊やって来る

目も耳も鼻も自衛のアンテナだ

信念があつてアンテナ頼らない

雨ぼつり蟻はとつくに帰宅ずみ

アンテナがフェイクばかりを拾つてる

アンテナが錆びて暮らしに合うてくる

アンテナの修理部品のない老後

アンテナが倒れたままで生きている

休日はアンテナたたみマンガ読む

アンテナを張ると蜘蛛の子散つて行く

アンテナが錆びてカタカナ語に疎い

どん底で少しアンテナ尖らせる

開花日をラインで決める彼岸花

届かない電波発したままのボク

アンテナに風の噂を引つ掛ける

アンテナが錆びて言葉は森の中

アンテナはカラスにちようどいい高さ

触角がびくりなんだか良い話

アンテナは澄んだ瞳と澄んだ耳

人情のアンテナ並ぶ低い屋根

アンテナとただいま秋を通過中

尼崎市 清水久美子

大阪市 藤田 武人

宝塚市 太田としお

海南市 堂上 泰女

神戸市 上田 和宏

羽曳野市 吉村久仁雄

長岡京市 山田 葉子

堺市 澤井 敏治

羽曳野市 三好 専平

高根県 原 徳利

笠岡市 小野美那子

弘前市 福士 慕情

大阪市 小野 雅美

松江市 中筋 弘充

沖繩県 森山 文切

豊橋市 藤田 千休

西宮市 緒方美津子

大洲市 中居 善信

海南市 小谷 小雪

大阪市 宇都満知子

門真市 坂本 星雨

藤井寺市 鴨谷瑠美子



漢字には味がある (2)

本欄No.35(平成25年11月号)に「漢字には味がある」を書いていましたので、本稿はその(2)とします。

表意文字である漢字は見ただけで意味が解ります。例えば、「薔薇」はチラッと見ただけで花と解りますが、「バラ」や「ばら」は、前後の繋がりによって認識しています。書くのが難しい文字でも意味は解るのは凄いいことです。

このような力を持つている漢字も、ご自家の中国では52年前の文化大革命以後、「簡体字」が勧められて、歴史ある貴い文字が崩されつつあります。また、韓国は同じ漢字文化圏でありながらハングル文字に移行しています。我が国では平仮名やカタカナを生み出して便利に使っていますが、先人が伝えてきた味わい深い漢字を大切に守ってゆきたいものです。

珈琲と書けばコーヒー匂い立つ
 仏より佛がホトケらしく見え
 字面だけ似ていて違う萩と萩
 山の字に似ている山はあまりない
 朝の字に月が揺れてる二日酔い
 凸凹の字形なかなか馴染めない
 「コーヒー」より「珈琲」の方が味わい深く、「仏」よりも「佛」の方が有り難いような気がします。また「萩・おぎ」と「萩・はぎ」は苗字にも多いので要注意です。
 右の作者全員が漢字一文字の名前で、しかも全員が異なるのは、私が意識して集めたのではなく不思議な偶然です。

船水 葉
 津田 暹
 勝藤 隆
 松本 秀
 前川 真
 島尻 卓

冬という文字に似ている雪の富士
 身をもってバランス示す正の文字
 上から読んでも下から読んでも幸
 儂いは人の夢って書くみたい
 雨という一字は泣いて微笑んで
 飛の筆順正しく書いてみま老いる
 雪を被った富士山が「冬」に似ているとは面白い見つけです。また「正」や「幸」に対する発見や想いも、言われてみれば「ナルホド!」と納得です。また「忙」という字は「心」を亡くすと書く」というのは見たことがあります。「儂」の分析を見るのは初めてで、これも大いに納得です。

改竄の字にもネズミがいて怖い
 痛痒 疲 老いを悩ますやまいだれ
 薔薇の字はトゲが邪魔して書きにくい
 読めぬけど魚とわかる魚偏
 似てますわなあ毒の字と妻の字は
 疑問符は考えすぎた曲がりよう
 「公文書改竄」が大事件なることを予知していたかのよう
 うな「…ネズミがいて怖い」の句は平成26年1月の発表です。
 また「病垂」の字も多々ありますが、高齢になると悩まされる「痛」「痒」「疲」など、お手柔らかに願いたいものです。
 疑問符(クエスチョン・マーク)の「？」は文字ではなく記号ですが、凝視して分析、そして独自性のある見解を述べていて愉快です。川柳の種に困ったときは常用漢字表や記号などを眺めて分析すると一句や二句は生まれそうです。
 (漢字表記については、本欄No.28とNo.29にも関連記事あり)

加藤 美子
 ささきのりこ
 堀 正和
 斉尾くにこ
 三上 博史
 村田 絹子
 関 よしみ
 村上 玄也
 佐藤 忠昭
 倉益 一瑤
 高瀬 霜石
 居谷真理子

「やりくり」

中居善信選

(投句 228名)



やりくりが一杯つめてある財布
 やりくりは妻に任せて靴を履く
 やりくりをして捻出のたばこ代
 やりくりを妻に委ねている気楽
 へそくりで弾んでいますバスポート
 やりくりは限界ですと汚染水
 国債でやりくりしてる赤字国
 財務省平気で赤字予算組む
 延長戦にわか投手の草野球
 売れっ子は時間刻みで顔を売る
 無駄遣い悔いて特売日のたまご
 なりふりに構わぬ特売の梯子
 鬘斗袋買いいワシ買いいモヤシ買いい
 やりくりを知らぬ暮らしにある不満
 やりくりの犠牲はいつも僕の酒
 少しずつ貯めたへソクリ使えない
 グルメ猫飼って小遣減らされる
 二軍との入れ替え多忙プロ野球
 やりくりよりも国債に頼りすぎ
 年金とパートでやっと食べている

鳥取市 夏目 一粋
 今治市 渡邊伊津志
 佐賀県 真島久美子
 藤井寺市 鈴木いさお
 横浜市 川島 良子
 三田市 村田 博
 大山市 関本かつ子
 鳥取市 岸本 宏章
 神戸市 上田 和宏
 横浜市 菊地 正勝
 神戸市 富永 恭子
 松山市 栗田 忠士
 榎原市 居谷真理子
 海南市 小谷 小雪
 香南市 桑名 孝雄
 八王子市 川名 洋子
 岡山市 永見 心咲
 堺市 奥 時雄
 西宮市 緒方美津子
 尼崎市 清水久美子

やりくりで一生涯を閉じた母
 掃除下手やりくり下手できた私
 酒好きな夫に予算を削られる
 かみさんのやりくりボクの無駄遣い
 月末はカレーカレーで切り抜ける
 家計簿の赤字やりくりして募金
 身の丈の井鉢を持ち歩く
 やりくりを楽しむように出来た妻
 年金の小さな枠で生きている
 水面下になったら借りてくるだけだ
 やりくりにカードローンが役立つた
 ローン完済やりくりはもう御免です

佳句

今シーズンも苦労しましたタイガース
 やりくりの財布は一つだけにする
 やりくりを知らずに冬のキリギリス
 大雑把だけどなんとかやって来た
 やりくりの最後の頼みおばあちゃん

人

やりくりも限界年金の目減り
 やりくりで建てた昭和の安普請
 地
 天
 帳尻がいつの間にか合っている
 軸
 大学にふたりやりくりした学資

富田林市 中村 恵
 大阪市 古今堂蕉子
 堺市 遠山 唯教
 岡山市 丹下 凱夫
 明石市 糀谷 和郎
 大洲市 花岡 順子
 大阪市 田中ゆみ子
 大阪市 若本 安代
 西予市 黒田 茂代
 倉吉市 牧野 芳光
 米子市 成田 雨奇
 鳥取市 細田 裕花

大阪市 江島谷勝弘
 高槻市 富田 保子
 神戸市 奥澤洋次郎
 三田市 上田ひとみ
 大阪市 奥村 五月
 堺市 坂上 淳司
 松山市 宮尾みのり
 和歌山市 武本 碧

「珍しい」

関本 かつ子 選
(投句 226名)



珍しい人が来たよと句会場
珍しく禁酒禁煙続いでる
珍しくなくなつた地震に豪雨
珍客がてんやわんやにした空気
珍しい品種学者の目が光る
長生きをしたくなつたか休肝日
珍しい顔も並んだ遺産分け
メジャーにもなかない二刀流
珍しいから一人占めしたくなる
うになまこ最初に食べた人偉い
異国の地珍味溢れている屋台
珍名が普通になつた子の名前
珍しいでは済まされぬ橋落下
雲海へ顔出す富士を見る機窓
珍しく明るいニュース届く朝
ヒーローが毎場所変わり盛りあがる
珍味だとひと言葉めて箸を置く
珍名のお陰誰にも覚えられ
珍しいからと熊の缶詰渡される
パンダなら白浜神戸にも居るで

高槻市 安田 忠子
和歌山市 磯部 義雄
大阪市 宇都満知子
和歌山市 武本 碧
鳥取県 山下 節子
見里市 板山まみ子
三田市 北野 哲男
三田市 多田 雅尚
米子市 成田 雨奇
豊中市 松尾美智代
横浜市 川島 良子
堺市 坂上 淳司
三原市 笹重 耕三
弘前市 福士 慕情
大山市 金子美千代
四條畷市 吉岡 修
那覇市 前川 真
堺市 村上 玄也
弘前市 稲見 則彦
三田市 堀 正和

ここだけの珍味はここだから美味しい
珍しいことをするから槍が降る
珍しく機嫌いいので今言おう
きつちりと正座ができる男の子
逆縁が珍しくない高齢化
珍獣と見なされ家で浮いている
珍しい名前でかなり得します
看病の姉笑つてる食べている
とまどいの息に珍味の皿の数
珍客が来るから飲める休肝日
戦争を放棄した国珍しい
どうしたのお土産買つてくるなんて

住 句

道産の珍味選るのもブチ支援
水の無い砂丘に蛙住んでいる
生きすぎて皆めずらしい事ばかり
七輪で今どき秋刀魚焼いている
珍しい僕のファンがいるらしい

人

この豆は「ジャックと豆の木」の豆だ
ローカル線乗り込んで来たあぶら蟬
海を見に行こうだなんて死ぬ気かも

軸

鳥取県 細田 裕花
島根県 原 徳利
米子市 後藤 宏之
橿原市 居谷真理子
池田市 上山 堅坊
熊本市 杉野 羅天
岡山市 永見 心咲
河内長野市 森田 旅人
青森県 松山 芳生
三田市 村田 博
大阪市 平賀 国和
西子市 黒田 茂代
高槻市 初代 正彦
鳥取市 田中 天翔
大阪市 津村志華子
香芝市 大内 朝子
鳥取市 岸本 宏章
弘前市 高瀬 霜石
東大阪市 北村 賢子
佐賀県 真島久美子

珍しい指名されたらホームラン

初歩教室

題一突然

居谷真理子

映画、絵画、文芸、何にでも共通すること

ですが観賞者あつての作品です。特に十七音

しかない川柳は書かない部分、書けない部分

を読み手に補ってもらわねばなりません。と

すると、人の句を読むということは作者と共に

句を作り上げる行為と言えます。詠み

手の感性と読み手の感性が相まって句は完

成するのです。人の作品をしっかり読みま

しょう、聞きましよう。同時に自身の作品も、

他人の目で見つめて推敲したいものです。

(原は原句 参は参考句)

原 嫁話突然降って湧いてきた 雄大

「降って湧く」があれば「突然」は不要。

喜びの気持ちを加えてみました。

参 秋晴れの日に良縁が降って湧く

原 突然の訪問客に眉を書く 風露

参 突然の客を待たせて眉を描く

原 あの人が突然に来る夢の中 昭枝

参 あの人がぼっと出て来る夢の中

原 揺すられて「終点ですよ」と起される 善輔

カギカッコ等の記号は原則として使いませ

ん。この句はなくても大丈夫。

参 揺すられて終点ですと起こされる

原 ノーメイク突然の客居留守する(宮)すみれ

参 ノーメイクです居留守ですすみマセン

原 突然の友の計報に嗚呼無常 通則

参 突然の友の計報に知る無常

原 突然に運命のフォーリンラブ 隆子

参 フォーリンラブこの突然は運命だ

原 蝦夷の土地鯨突然大暴れ 勝治

「蝦夷」はあまりにも古い呼称。

参 北の大地鯨突然大暴れ 廣光

原 突然に来た沈黙が胸ゆらす

参 突然の沈黙に胸ゆれている

原 デュエットに突然マイク向けられる 奈津子

参 デュエットは君ととマイク向けられる

原 尿検査蛋白下りる再検査 (東)美智子

参 何げなく受けた検査で再検査

原 突然に来る台風と四つ相撲 優

台風と相撲をとるという発想を生かして

参 台風の張り手かわして四つに組む

原 驚ろいているのは熊も同じはず 美枝子

着眼も表現もユニークなのに、送り仮名の

間違いがとても残念。

参 驚いているのは熊も同じはず

原 突然に来訪されて箒立て 三樹夫

参 突然の客に箒が立てられる

原 韓流が突然ハートわし掴み 美穂

参 一瞬で韓流ハートわし掴み

原 突然にうれいし事がある人生 由紀子

下六で重くなりました。

参 突然にうれいし事もある憂き世

原 かさこそと落葉ささやく栗鼠姿(畑)節子

参 かさこそと落葉リスさん走ったよ

原 突然に対処の出来ぬ身の哀れ こそえ

哀れとまで言うと言いすぎです。どこかに

ユーモアが欲しい。

参 突然に対処の出来ぬ脳と足

原 急逝の友をけなしてから涙 くみ子

胸に迫る句です。言葉を選びましょう。

参 急逝の友をしかってから涙

原 ドラマの様突然しみ皺できませぬ(高)道子

参しみと敏突然できたわけじゃない

原突然の驟雨慌てる蟻と妻

勝正

参突然の客に慌てる風呂上がり

原友が来た何はともあれ缶ビール

剛

原布告なく突然襲う桃太郎

参桃太郎宣戦布告などしない

みちを

参突然の雨に慌てる蟻と妻

原壁ドンを突然される夢続く

(大)安子

原斎場で劣化してたか黒ビール

参斎場でビールが取れた黒い靴
経験のない人には分かりにくい句です。

厚子

原突風の稲田をなめた渦の跡

「稲田をなめた」とは面白い表現ですね。
助詞を「が」にして「突風」を強調してみました。

参突然の壁ドン夢に見ています

原突然の奇声夫の頭にゴキブリ

(川)信子

原突然死想定内にある加齢

(門)幸子

参突風が稲田をなめた渦の跡

説明しすぎてゴチャゴチャしました。

参突然の奇声ゴキブリ一匹に

参ゴキブリが夫の髪にもぐり込む

原愛酒の日突然悪友現れる

整

原善人も突然時には本音みせ

参善人が突然見せた裏の顔

(澤)良子

出来ました結婚すると連れてくる
子が果立ち突如自由がやって来た

シンバルの一打で夢の覚めた僕

(前)真寧

参吟醸酒開ければ急に友が来る

原デイトの時突然手延び赤面

ミヨノ

原突然に来て長尻の御邪魔虫

参突然に来て長尻の夕餉時

恒

癖球は突然投げてこそ効果

突然にやさしくされてうろたえる

和二夫

参ふいに手が触れてしまった初デート

原突然のゲリラ豪雨で残業し

(高)弥生

原脅しきき突然優しくなる夫

「きき」。「聞き」か「効き」か?

のぞみ

突然の客にコンビニ迄走る

間違いですまぬ夜中の酔った声

徳利

参ゲリラ豪雨止むまで仕事することに

原ありがとう突然さようならしても

雅子

参脅したら急に優しくなる夫

原突然の雨に始まるラブroman

なつみ

根まわしで急な変化をやらわらせる

急停車吊皮もって立ち泳ぎ

まさる

参突然のサヨナラだけどありがとう

原突然にふる里崩壊震度七

洋一

参突然の雨から恋の物語

原不肖の子突然変異と扱われ

孚彦

自覚症状のないのに病告げられる

【今月の推せん句】

(貞)正子
ひでお

原風呂あがり突然来客うろたえる

貴美江

原不肖の子突然変異と扱われ

孚彦

突然の客に押し入れ閉まらない

木藤こみつ

両句とも中八。少しの注意で防げます。

参突然にふる里潰す震度7

参非凡な子突然変異と扱われ

自覚ないけれど今朝から高齢者

丹羽 美恵

川柳塔鑑賞

同人吟 竹村 紀の治

— 10月号から

鏡からたまには櫛も飛んでくる

山岡 富美子

鏡とは長い付き合いである。何もかもお見通しである。挫けそうになった時には、「しっかりしろ、頑張れ」と櫛が飛んでくるのである。

ブレーキを踏む日アクセル踏みたい日

西田 美恵子

何をやっても上手くいく日にブレーキを、駄目な日にはアクセルを、これがなかなか難しく、調子に乗って深みに嵌ることになる。絶対調の時ほど慎重に。

旨そうだきつと体に悪いんだ

伊達 郁夫

旨いものは体に悪い、特に死の四重奏（糖尿病、高血圧、高脂血症、肥満）加えて痛風とくれば、食べるものは無い。でも、止めるわけにはいかない、たとえ体に悪くとも、旨いものは旨いから。

古本は他家の匂いをまださせる

川本 真理子

古本屋で手に入れた全集のページをめくると、前の持ち主の家の匂いが残っている。この本を手放す時の息遣いまで、感じられるのである。そしてやがて、我が家の一員になる。

飲み仲間黙っていても寄ってくる

江島谷 勝弘

仲間内で持っている奴が奢ったり、割り勘だったり、寄ると触ると飲む話、これが呑み仲間である。金がなくても呑めるのである。左手の人差し指と親指の丸が呑むサインである。

買物も余命が浮かぶ歳となり

榎本 日の出

耐久消費財の購入は悩むところです。オリンピック目当てに4Kテレビでも、そこで余命がひと言、あと何年観るつもりですか、テレビは5年保証ですが。

居酒屋の愚痴ばかり聞く招き猫

寺井 弘子

この猫が喋ったら大変な事になる。お国の事情、会社の事情、家庭の事情、だから、黙って聞いているのだ、文春へチクリますか。

泣きごとは言わぬが泣くことは多い

加島 由一

還暦を過ぎると、泣きごとは言わなくなる。零し相手も減ってきて、聞き役に回るからだ。代りに、涙もろくなる。社会面のホツとする、ジーンとくる記事にホロリとなる。

いきなりの凶器となった尿酸値

水野 黒兔

突然にやってくる痛み痛風である。わたしは、左足の親指の付け根が腫れあがった。文字通り風が吹いても痛い。これからは有めすかして旅が続く。

終の日にあげるしまつてある言葉

鴨谷 瑠美子

強がっていても所詮、男は子供みたいなものです。色々あったので、感謝の

言葉は無理でしよう。「幸せでした」これも駄目ですか。

風の道へごろんと夫の文庫本

中山 春代

開け放たれた書齋に、風の道がある、読みかけの文庫本を風がめくる。ご主人の寝息が聞こえるような、静かな二人だけのとき素敵です。

戻らない時を探しにバスに乗る

奥澤 洋次郎

青春の思い出を探してバスに乗る、理不尽な世の中を怒り、若さを爆発させていた頃の自分や、初恋の思い出を探しに、青春行きのバス0番乗り場から発車。

生き上手後ろにも目がついている

永田 紀恵

生き上手な人は、気配りや、目配りも十分で、申し分のない人です。疲れるでしょうね、同じ上手でも。甘え上手に、乗せ上手、いろいろあります。

雲形と三角定規でも夫婦

北野 哲男

雲形定規は、複数の点を結び美しいカーブを描く。三角定規は直線で力強く二点

をつなぐ、雲形は、家族全員を自在に曲線で囲んでいる。雲形と三角定規は夫婦である。

赤ん坊みんな天使の笑みを見せ

谷川 憲

あの穢れの無い目で、瞬きもせず見つめられ、さらに笑顔となると、まさに天使である。しかし、いつまでも天使のままとはいかない。やがて小さな悪魔に。

しみじみと平和な暮らし手をお合す

飛永 ふりこ

豪雨、大型台風、北海道地震と次々と起こった災害に、日常の暮らしがいかに大切な身に沁みだ。灯りが点り、水がある暮らし、それがいかに大切かが。

飲んでいるわけではないが千鳥足

坂部 紀久子

近頃は、歩きスマホの人が多く、立ち止まったり歩き出したり、まるで千鳥の様です。私も、散歩中に浮かんだ句を書き留めるため立ち止まる、千鳥足です。

あの世への持参金まで取り崩す

小谷 小雪

余命に合わせて、使い切るのが理想ですが。なかなか難しいようです。この世

で楽しく使い切って、手ぶらで、あの世へ渡りましょう。

夕焼けを閉じてこめている金魚玉

丹下 凱夫

夕陽を浴びて、金魚たちがまわる。昔別れ別れになった、仲間を思い出しているのだろうか、今日をありがとう、金魚玉に夕日が沈む。

本物の歯だから耐えられる痛み

牧野 芳光

やっぱり親からの歯は違います。耐えられるように仕込まれているのでしょうか。後から来た歯は、所詮よそ者です、頑張りが利きません。

道連れが豊かな旅にしてくれる

久保田 千代

道連れに恵まれて、楽しい道中ですね。気心の知れた仲間との旅もいいですが。人生の旅も未だ半ばです。楽しい旅を続けましょう。

腕の蚊を許す母親の命日

三浦 強一

運のいい蚊である。たつぷりと血を頂いて産卵をする。この次はびしゃりと叩かれてご臨終となる。

水煙抄鑑賞

—10月号から

久保田 千代

つきぬける青空の下墓参り

齊 藤 宏 子

つきぬけるの上五に作者の想いが込められ様々の感情をすつきりと墓前に手を合わされている姿が見えてきます。

まだ子供だった許せていなかった

真 島 久美子

ああそうだった。あの時の許せなかった思いは、自分が若かったから。今更ながら気付く成長した私。

どうあろとわたしは私の色で吠く

宮 宅 比佐恵

いいですね。スパッと言い切れる所が何とも心地良い。最近の世の中、男も女も優しく優柔不断が目立つ。

スイーツがこころの角を丸くする

横 山 里 子

住みにくいこの世、スイーツに癒される。

深緑の樹樹に漲る力瘤

福 田 正 彦

こつこつと川柳の勉強をされている誌友の作者、緑濃く成長している樹々を見つめ大きくなられる今後を、漲る力瘤に応援しています。

そつとしておこう昼間っからの酒

高 柳 閑 雲

いい雰囲気の句柄。何があつたのか事情が解つてのそつとしておく——のか、解らなくてもそつとしてあげるいい関係。

電車内で髭剃る男今に出る

中 筋 弘 充

アハハと笑つてしまつた楽しい句。でもどうか？女性の化粧のように公衆の面前でこんな男も現れるのかなあ？

包み隠さず海に向かつて吠えて来た

柴 本 ばつは

この句もスカツとしている。海に向かつて吠えるなんてスケールが大きい。生きている危うさ生きてゆく強かさ

神 野 千 恵 子

手探りで生きその生き様を重ねて自信を得て、これから生きてゆく強かさ。上句と下句への対比と流れが力強い。

前向きな人には運も流れこむ

近 兼 敦 子

そうですね。積極的に生きていく人は運も味方につけ悔いなき人生を歩まれる。運もの「も」が効いている。

想像をひろげひろげてバラダイス

相 見 柳 歩

明るい大きな句です。昨今暗いニュースの多い日本、せめて想像なりとも自由に広げて夢の国に行きたいもの。

現実逃避が出来る荷物しよ

山 本 三 樹 夫

最近の日本、天変地異であちこちに避難勧告が出る。が、人間両肩にいつぱい荷物を背負つて生きている。そう簡単に避難など出来ぬ。一瞬の判断が物言うが身動きの出来ぬ状態を上手く詠まれた。

不要不急の家事はしません酷暑です

長 島 亜 希 子

猛暑日は仮死状態で生きてます

中 島 一 彌

すぐ欲しい私が入る冷蔵庫

池 田 美 穂

殊の外、厳夏の今年を詠まれた三句。山の句の中から印象に残つた三句。



追悼

松村里江さんを悼む

山田耕治

松村里江さんが、八月二十五日、豊中市
螢池のご自宅で亡くなられました。享年
九十四歳でした。雅号は「りこう」とお読
みします。

スキップが出来たらしい退院日
七キ口もやせて指輪もずり落ちる

昨年の「川柳塔」九月号最後のご投句です。
この頃はご体調がすぐれないとお聞きし
ていましたが、この句を見つけて、よかつ
たね、元気だね、涼しくなったらお会いし
ましょうとメールしたのを覚えています。

里江さんは、平成八年頃、故春城武庫坊
さん、故田辺鹿太さん等と尼崎川柳の草分
け「いくしま川柳会」にご参加その後「尾
浜川柳会」(現「川柳あまがさき」)が発
足、会員として現在まで活躍されていま

した。一方、平成十九年頃から私がお誘い
して「NHK梅田カルチャー講座(河内天
笑講師)」を受講しておられました。

里江さんは、人が集う賑やかなことがお
好きで、講座のあとの食事会や旅行には欠
かさず参加され、クラスメイトとの歓談を
たのしんでおられました。負けん気で姉御
肌で、大へん情熱的なお方で、「川柳では
一生女よ」と言っておられました。

封印のフタこぼれ出す嫉妬心
きりきりの傷心の身のひとえ帯
演歌だねセピア色した艶ばなし
もしかして不機嫌なのは嫉妬かな
毛糸玉の先は貴方にたどり着く

また、お家へ人を招いてもてなすことが
お好きで、ご近所にお住まいの番傘川柳会
田中螢柳さん、山藤聖子さんをお招きし、

故西内朋月さん、藤岡りこさん、わたしと
で、月に一度ご自宅で川柳サロンを開いて
くださいました。じっと坐っていてくださ
いと言っても、皆をはらはらせながらこ
まごまとお気遣いされ、お酒をいただき川
柳を語り楽しいひとときでした。

五年余り続いたサロンも、来年は何日に
しようかと皆が手帳を繰っていました。昨
年の十二月が最後となりました。
終りに、尾浜川柳会の句報より作品を拝
読してお喜びいたします。

凶星でしよ私の予感千里眼
天寿まで今をひらひら派手に生き
姉御肌と言われハートはまだ二十
こんな顔が役に立つなら貸したげる
ふりむくな相手に弱みにぎられる
手拍子に外したリズム立て直し
剥く手間が要らぬ苺が好物で
団地には団地ながらの鯉のぼり
まだら呆け古い手帳は捨てられぬ
人並の顔と思つて歩いてる

天国で昭和サロンを開こうか 耕治

合掌



(投句209名)

台風のとくに曼珠沙華は時を違えず真つ赤な花を咲かせてくれました。

そして、あちこちで柿が見事な実をつけているのを見ると、改めて自然のすごさを感じてしまうのです。

科学の力が発達しても、地震も台風も人間の意思とは反対に容赦ありません。

だからこそ人間は謙虚に、とは思いますが自然に対して文句の一つも言いたくなる時があるから困ります。では……

スポーツに「ドン」はいらぬと言ったのに

(評)さまざまなおスポーツにそれぞれドンが居るのをニュースを見て知りました。私欲が入り乱れて、さあ大変。

ちびまる子昭和の話しませんか

(評)平成もいよいよ終わりに近く、昭



和はますます遠くなります。そして、ちびまる子ちゃんを生みの親も、嗚呼。

枯れてから妙にピンクが似合いだす

(評)今まで似合わなかった色が加齢と共にシックリくることがあります。こんな発見があれば加齢も救いがありそう。

冬眠に先がけスマホオフにする

(評)スマホが無いと一日も暮らせない人が増えています。しかし、さすが冬眠ともなれば暫しのお別れらしいです。

百歳のほほえみ今日もマイペース

(評)人生百年と言われるようになり、百歳の方も珍しくありません。でも、自分がそこへ到達出来るかどうか……

ちちんぷいぷい美人になれる美人の湯

(評)呪文を唱えて湯に漬ければ、あらフシギ、あちらにも美人、こちらにも美人。

男には女と違う瘦我慢

(評)だいたい女はヤセガマンなんてしませんもの。男の人はお気の毒ですね、○○の美学とやらが多過ぎますもの。

君達もやられたのかいあの風に

(評)ここで詠まれている風は台風など

ではなく、人を巻き込んでしまう流行りのようなもの、かも知れませんがね。

清貧で朽ちます土に還ります

(評)思わず涙ぐみそうになりました。今時こんな御方が居るなんて、まだまだ捨てたもんじゃあない世の中です。

平成が置土産して逃げて行く

(評)平成最後の年は自然が荒れ狂いましたねえ。もっと良いことを置いて行ってくればと思います。

虎ファンに今年も憂い残る秋

困ったらこれを使えの言い伝え

擬態にも飽きておやつを食べだした

当然のミス裏口の免許です

たんまりと貯めたへそくり飛んでいく

結婚・離婚・結婚・離婚くろうさん

溶けるほど煮なくとも俺まだ噛める

無になれずドツと咲きだす曼珠沙華

弘前市 高森 一香

箕面市 出口セツ子

大分市 大治 重信

島取市 永原 昌鼓

豊中市 木藤こみつ

大分市 寺井 弘子

大分市 山田 武人

東大阪市 佐々木満作

大分市 大治 重信

島取市 永原 昌鼓

豊中市 木藤こみつ

大分市 寺井 弘子

大分市 山田 武人

東大阪市 佐々木満作

大阪府 藤田 武人

大阪府 岸田 万彩

弘前市 高瀬 霜石

高槻市 富田 保子

男鹿市 伊藤のぶよし

黒石市 北山まみどり

藤井寺市 若松 雅枝

下松市 有海 静枝

下松市 有海 静枝

黒石市 北山まみどり

大阪市 江島谷勝弘
トップたち早め早めに散りましよう

和歌山市 北原 昭枝
命懸け稼いだ金が飛んでゆく

松江市 石橋 芳山
黃落の中へとくノ一が潜む

奈良県 長谷川崇明
アメリカが味方と信じ孤立する

土佐清水市 辻内 次根
一生が夢に遊んで消えてゆく

鳥取県 斉尾くにこ
ライバルの新情報を手に入れる

唐津市 山口 高明
湯の宿に座敷童子が出るそう

泉大津市 磯野不二夫
百均が救いの神にみえる時

寝屋川市 森 茜
テニラハは兎も角自力たくわえる

大阪市 古今堂蕉子
蒸し器にはちよつと齧った肉マンが

四條畷市 吉岡 修
全省に蔓延らしい法の無視

大阪市 石橋 直子
化粧の皮剥きたい人うじゃうじゃと

三田市 村田 博
開封もされず戻ったラブレター

大阪市 若本 安代
地球揺れスポーツ界も揺れている

奈良市 山本 昌代
寂しさは否だウキウキする旅へ

櫻本市 居谷真理子
二千円札よ葉っぱになるまいぞ

吹田市 山本希久子
一病と生きる決意に秋深む

熊本市 杉野 羅天
雑魚同志共に食べましょおぜんざい

佐賀県 真島久美子
冗談にしては重たい秋である

橋本市 石田 隆彦
隠れてもマスコミの目は甘くない

大阪市 平井美智子
札束に物を言わせている誘い

鳥取市 前田 楓花
芸術か食欲か一人のわたし

芦屋市 竹山千賀子
おーい待て記憶の欠片追いかける

朝霞市 前田 洋子
家系図の虫に食われた先祖さま

鳥取市 田中 天翔
チコちゃんに叱られそうだ辞書を引く

和歌山市 松本 雅子
今宵こそ美人に化けて惑わせる

堺市 坂上 淳司
少少の傷持つ人が僕は好き

河内長野市 山岡富美子
祭り笛響いて秋が深くなる

大阪市 原田すみ子
負けそうで寿限無寿限無と唱えだす

笠岡市 藤井 智史
失恋のくり返しから得る秘術

豊中市 水野 黒兎
札束が枯葉に化ける株相場

大阪市 岩崎 玲子
若返るサプリひとつに呪文かけ

枚方市 山口弘委智
腐葉土が春には新芽育んで

和歌山市 土屋起世子
幸せな頃をしつかり書き留める

大阪市 北村 賢子
七色の柿の葉寿司になつてやる

河内長野市 黒岩 靖博
預貯金が毎年減っていく暮らし

貝塚市 石田ひろ子
秋は魔術師山に錦の衣着せ

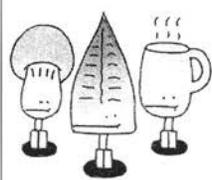
三田市 久保田千代
この家訓身を粉にしても守り切る

藤井寺市 太田扶美代
バレリーナに化けたつもりでいる狸

岡山市 大石 洋子
大丈夫まだ沢庵が嘔めている

堺市 澤井 敏治
忘れてはいないよ北方四島

1月号発表
(11月15日締切)



(平本 勝彦 画)
柳箋に2句

おどろおどろ

毎月24日締切・35句以内厳守
掲載は原稿到着順となります。
楷書で誤字のないようにお願
いたします。
編集部

川柳塔すみよし(大阪) 森松まつお報

「空いてますか」となりへマッコデラックス
この夏のトップを取った尾畠さん
北のドン支える椅子が悲鳴あげ
年重ね席ゆずられる面映さ
助手席は逆走せんか命がけ
粒揃い日本の米の旨いこと
亡母より米粒大事教えられ
米粒ほどの愛を絶やさず夫婦道
小粒でも山椒ビリリと自己主張
粒よりも軽さに散った追悼忌
ハルカスから見れば人間粒に見え
一粒の種に託して待つ実り
粒選りの中では目立たない個性
玉の汗頭が下がるボランティア
電話口切るタイミング言い出せず
ティッシュを入れたパンツ洗濯機に
ルーティン出来なくなってきた輪
住みなれた家の階段踏みはずす

いさお 一歩 雅美 廣子 里子 芳子 久仁雄 大子 妙子 美世子 俊雄 美龍 公平 福貴子 満作 ゆみ子

フランスパン食べて大事な歯がとれる
入院中マージャンのツケ取りに来る
アメリカ式財布はオレが握ってる
権力を握るとみんな離さない
年の差は釣り合わないが愛握る
薬一本握っただけで死んでいる
笑顔にキユン孫に心を握られる
インバウンド一位大阪銭握る
土壇場で急所握って開く強み
何年も握り潰して今いる
極上のご馳走母の握りめし
胸の内解って欲しいと手を握る

川柳塔みちのく(青森) 稲見 則彦報

敗戦を忘れぬ球児たちの夏
流された痛みが分かる丸い石
杉玉を揚げて新酒の地酒呑む
十八才おどけて吸っているタバコ
酒の割勘おどけ笑わせ居なくなる
生前葬おどける癖が顔を出す
喜怒哀楽の友ならやっぱり地酒だな
山紫水明 過疎の里から飛ぶホテル
おどけ役酔いが回ればくそまじめ
枘に注ぐ地酒の情け知るのれん
旅の宿先ずは地酒に舌鼓
藤棚に添うて女の顔になる
紫の晴れ着はききとお蔵入り
おどけたりしながら姫ゆりの前で
ほほえんで上がった気分丸くする
昼下がり漬け茄子だけで水茶漬

直子 まつお たかこ 勝弘 喜与子 克己 満知子 ぶり介 重信 志津子 舞夢 芳生 一呑 ひとし 小とみ 風来坊 のぶよし 慕情 隆樹 則彦 洋子 黙人 吹喜 孝子 英子

はびきの市民川柳会(大阪) 中川ひろ介報

紫外線避ける格好どなた様
紫頭中美男子料理したくなる
ラベンター安らぎの香で自己主張
紫と呼べば醤油も旨み増す
血圧計ビビと鳴らし今日の指示
ゆっくりと天に昇って龍になる
カタバミの花に草取る手がゆるむ
逆立ちをすれば許せる罪がある
一生一度とされたも頼まれる
しよらずの音庭眺めてはお茶立てる
散り際を心に秘めて咲く椿
キャニオンを作った神は芸術家
ポップコーンもこも病名は聞かず
あなたより信頼できる冷蔵庫
ファンなんて無力なもんだ祈るだけ

初枝 吞舟 真由美 重虎 柳子 龍馬 龍石 花峯 霜子 久美子 一花 和美 香子 規子 雄太 みつこ 壽峰 欣之 大子 久仁雄 清 紀雄 高美 かつ美 瑠美子

冷房がないと生きられない日本
クーラーの故障実家に大移動
ピーポーを聞いたたび水を飲む私
おじぎして出迎えますよ山百合が
群がって飲むからぐちが言えるのよ
冷房で冷えた身体に温い風呂
永田町覚悟ごっこで群れている
クーラーもかけず節約熱中症
冷房をかけて靴下冬布団
猛暑より熱い戦い甲子園
熱い手だ話に嘘はないだろう
冷房を消せでもめないこの夏は

和歌山三幸川柳会

楠原 富香報

汗しずく介護する身もされる身も
加減乗除水に流してそして今
母になる刹那の汗は黄金色
血の絆越えて律儀な介助犬
そしてからやっとなつてまだ未完
母と子の絆が眠る桐の箱
痴話喧嘩そして絆が深まった
時どきはメンテナンスもいる絆
生きている証五体へ血が通う
本当の笑顔表も裏もない
三行の葉書でこころ通わせる
人と人何処かに通うものがある
ノーサイン阿吽の息のバッテリー
汗流し苦労重ねて人の幅
流されてそしてだんだん丸くなる
悟りには遠くそしてを遊ばせる

専平 久仁子 シルク 千鶴子 真 さくら 洋一 フジ 喜久子 一文 一吉 丹吉 ひろ介

病院へ通う老母の薄化粧
熱い血の通う仲間ボランティア
言いわけや噂が太る接続詞
追伸のそしてが文を重くする
そこそこに生きて時折見栄を張る
蝉時雨淋しく聞こえそして秋
熱帯夜隣りも明かり点つてる
大丈夫と背中押されるいい絆
ちっぼけな善意が通じ仲間入り
そして春やっとなつて無為
毎日が駆け足で過ぎそして無為
桐箱のへその緒そつと開けて見る
カメラよりの仲間を付けて通り道
つうかあの仲でも時に蹴躓く

竹原川柳会(広島)

吉田 太虚報

夢の夢旅の夫婦は手をつなく
水害の悪夢が学びの種を播く
パラリンへ夢磨いている車椅子
ラストまで夢をすてないカメラがいい
夢だけはでつかく描いて壁に貼る
お昼寝の夢にうさぎが聞いてくれる
まつすぐな夢助手席で聞いている
絵本読む幸せ気分孫といふ
お供への紫陽花今も生きている
くりかえす毎日青い鳥といふ
結局は足元にいた青い鳥
幸あれと産まれる子の名を選ぶ
未来へと子孫を継いで逝く幸よ
情報の中の立ち泳ぎ

絹子 ひろ子 知香 明子 千鶴 明子 起世子 あき子 美枝子 よしこ 宏枝 一雄 富香

川上大輪選

何もかも妻に決定権がある
晴れ男雨おんなには負けている
門限をしはば破るシンデレラ
暑中見舞に同封します雪女
達成感湧いてこぬからまだ走る
風化するそしてなかつた事になる
腰抜かすお化け同士の鉢合わせ
この中に私がいまほろ袋
そんな顔しては鏡に叱られる
砂丘の駱駝は貝殻節唄う

佳句地十選

(10月号から)

鴨谷 瑠美子 選

百態の涙と汗が被災地に
沈黙が口火切るのを待っている
筆まめの母の手紙にある気概
正解はひとつ紆余曲折の跡
バランスよく仏と神を頼つてる
お返事に選択肢などありません
ああ夫婦越えた七坂有為の山
まず実行せねば進まぬ壁がある
ギャグの意味分らず二度も言わされる
思春期を終えて純情脱ぎ捨てる

みっこ 大子 満作 武人 堅坊 小雪 倅子 キーキー 耕治 高鷲

髪洗ひ桃の木桶で魔を祓う
コマージュナルの半分ほどは効くサブプリ
生き方を鏡の前で整える
この惨状せめて気持ちの義援金
被災地を想い我がまま引つ込める
お土産にさせていたたくのは笑顔
お裾分け整形をしてそつと出す
丸テーブル席次に悩むことを止め
遠近法使って描く未来地図
絶え間なく小さな庭に四季の花
再生の効かぬこの身のストレッツ
後期へと読むインソップが身に染みる
一人居て一人の時間作れない
振り向けば愛だと思ふ曲がり角

川柳塔わかやま吟社 小谷 小雪報

沈黙が続いて秋霖のながさ
背中から秋の女になつて翔ぶ
わずかでも心豊かなお裾分け
お裾分けなんて嬉しい花の種
お裾分けですと自慢気な松茸
お裾分け母の温もり走馬灯
鼻歌にとほけておこつ物忘れ
台所妻の鼻歌ホツとする
いいチャンス父の鼻歌狙つてる
鼻唄の一つ二つは小手調べ
被災地に鼻唄聞かぬ何時の日か
ハミングをしてるうちに謝らう
虐待と言われる子供へのお灸
きかん坊母のお灸も何のその
台風できついいお灸の停電に

七 和 省 千 華 紫 美 れい 武 菜 陽 游 公
給 之 吾 惠 惠 蓮 音 恵 子 志 美 子 美 子 弘

針灸の古い看板効きそうだと
もろ肌を脱げば見事な灸の跡
トランプにお灸を握える者がなくない
川柳ささやま(兵庫) 北澤 稠民報

世界中汚染水ですかき水
台風のお詫びの様な月の冴え
病棟でこはんですよへみな素直
電柱の影が枯野へのびてきている
退屈な奴だと言われ生きている
愛車嫁く母の故郷赤い糸
強風で倒れた風車笑いのもの
婚の荷に長靴入れる親ごころ
若き日のマドンナ今も磨かれて
爺の膝孫奪い合う夏休み
人の輪は心で繋ぐ細い糸
祭りごと心浮き立ち年忘れ
猛暑にもひるまぬ草のしたたかさ
川柳塔唐津(佐賀) 仁部 四郎報

あきこ 寿子 まさみ 徑子 保州 ほのか 小雪 ちづこ 富美子 紀子 よしこ 知香 准一 京子 秀子
出会わずにネット売買する世界
厚化粧うちの女房に顔がない
影踏んで遊んだ路地の十三夜
裏白のチラシが誇遊技場
京都塔の会 山田 葉子報
一極に集め根腐れする組織
デスマスクやつと極める無の境地
おたやんのままで幸せの極み
陶酔のオーロラ仰ぐ美の極致
生きている極み子が居て孫がいて

紀久子 日出男 大輪 かほる 哲男 稠民 真由 善輔 重男 喜弘 良代 照代 美智子 蜂実 高朗 四郎 福子 美津子 欣之 哲子

咲き遅れたアサガオ極端にきれい
極上の妻の手料理具沢山
京極が競う京都の繁華街
哀しみの極み般若の目に涙
一番に質問ばかりしています
三才でも目立ちがりやのこましゃくれ
目のやり場に困る露出の娘さん
極限までやった球児にもらい泣き
極端な減量すぐはごりつバウンド
ご不満の理由はにもつと至極
その道を極めた人にあるオーラ
思春期ですげない態度とるけれど
好きだからつい素っ気なくしてしまう
ウオーキングよりも寝たいこの暑さ
老いらくの恋がおまけのウオーキング
ウオーキング帰ってからの食欲が
ウオーキング秋と出会った赤とんぼ
真つ直ぐに歩いた過去にある矜持
極限の空の広さにポラントエア
準優勝の方が目立った甲子園
スロウライフ歩幅縮めてウオーキング

南大阪川柳会 松岡 篤報
梅雨晴れ間大空跨ぐ虹の橋
心配は里の吊り橋老朽化
二月を暮らせる年金がほしい
口にするとしんど募る登り坂
盆の客三日泊つてああしんど
墓参り階段あつて陽もきついで
しんどいこと夫婦で背負いどつらしょ
しんどさを分け合い夫婦五十年

咲き遅れたアサガオ極端にきれい
極上の妻の手料理具沢山
京極が競う京都の繁華街
哀しみの極み般若の目に涙
一番に質問ばかりしています
三才でも目立ちがりやのこましゃくれ
目のやり場に困る露出の娘さん
極限までやった球児にもらい泣き
極端な減量すぐはごりつバウンド
ご不満の理由はにもつと至極
その道を極めた人にあるオーラ
思春期ですげない態度とるけれど
好きだからつい素っ気なくしてしまう
ウオーキングよりも寝たいこの暑さ
老いらくの恋がおまけのウオーキング
ウオーキング帰ってからの食欲が
ウオーキング秋と出会った赤とんぼ
真つ直ぐに歩いた過去にある矜持
極限の空の広さにポラントエア
準優勝の方が目立った甲子園
スロウライフ歩幅縮めてウオーキング

昌乃 万紗子 弘之 保夫 泰夫 英旺 満子 宏子 葉子 求芽 千代 弥生 かずお 文代 北舟 朝子 多津子 義昭 弘彦 則彦 洋志 篤報 弘委智 東風 勝弘 益子 真佐子 忠昭 克己

長寿とやほんにしんごい大仕事
小銭入れ買い物兼ねた脳トレに
万札をぎっしり詰めた小銭入れ
ワンコインのランチいじめる消費税
一円が足りず亭主を呼びつける
神様に小銭を選つて願ひ事
あちこちに小銭ころがる独身寮
両替をしてから投げげるお賽銭
もひとりの僕がもつととそそのかす
エンジンに点火その気になつて
思わせぶりにカップにのこっているルージュ
旬ですとそそのかされて秋刀魚焼く
秋風にそそのかされて旅に出る
耳打ちをされた時から濡れだす
ネオン街素通りさせぬモノがある
爪切りができぬ八十路のもどかしさ
夏風邪と見くびり十日床に臥す
汗を拭くたびに紛失する眼鏡
理想では春春秋でちよつと冬
逃走犯3000人で捕まらず
終戦日深い反省重く聴く
辛い時思ひ出すこみな辛い
久びさに明るいスパーポランティア
許す気になればお酒が欲しくなり

志華子
タカ子
いさお
篤
郁夫
ひさ乃
なぎさ
恭昌
修
亜成
弘子
楓楽
裕子
栄子
柳右子
シマ子
柳伸
実
和雄
国和
峰子
直子
一步

ブラザ川柳(大阪) 梶原 弘光報

残暑時は冷か温爛迷います 克三
酒たばこやめてなるかと葉飲む
邪魔をした言うてかれこれ一時間
至福時一人没頭サスペンス
突き上げられて飛び起きました震度7

おかめ
弘光
和代
淳司

お上手ねダンスはめられ足弾む
いつてらっしやいママ弾んでる休み明け
消し壺の中で弾んでいる火の粉
呑むほどに話が弾む武勇伝
食卓の会話が弾む初サマ
叶うなら残る時間を歌でうめ

八尾市民川柳会(大阪) 中園

母と子のフォークダンスや赤とんぼ
血税を吸い上げ官僚甘い汁
痛告知母の私かと願つた日
人間の最初の仕事吐いて吸う
やっぱりとまさか女の勘所
ぬれ落葉吸つて吐いても動かない
補助金を吸つて袋叩きに合う
妻作るやっぱりうまい酒のあて
酔えばまた夢追い人になるわたし
虫の良い話やっぱり裏がある
ほろ酔いで浮世絵色の空気吸う
嫁ぐ朝父はポロポロ案の定
神様がやっぱりいてた甲子園
人間の栗が弾きたい笑顔
励ましてくれるもうひとりの私
みどり児の窓は天空無限大

川柳塔鹿野みか月(鳥取) 福西

欲が出たうまい話にひかかった
改憲論日本の悲鳴忘れたか
採りたてが欲しくて野菜作つてる
スリッパで叩けばきつと気が晴れる
目薬をさして辞書ひき五七五

五月
清乃
久美子
悦夫
一彌
正子
清報
千里
真妙
壽之
恵
常男
紀雄
信子
あかり
壽峰
涼子
高鷲
安男
欣之
かこ
華

茶子報

好幸
弘子
鈴
茶子
重忠

この重さ堪えているのかスリッパよ
母さんの悲鳴を残し特攻機
味噌汁のうまい秘訣を姑に聞く
子猫六匹連れて我が家に居座つた
悲鳴では黄色い声が僕は好き
うまい話で渋柿を食わされた
一滴の目薬効いて粗が見え
ガス室に悲鳴が消えた跡がある
忘年会トイレスリッパ会場に
スリッパ飛ばし運動会の余興です
ばあちゃんの雑学うまく利用する
一言を添えて注がれるうまい酒
請求書来る度悲鳴あげている
夫唱婦随時々うまい演技する
腹の虫一時宥めるワンカップ
月末は英世一人で悲鳴上げ
スリッパで踏ん張り利かぬ足の指

ほたる川柳同好会(大阪) 水野

胸キュンで指からませた中之島
思い出す島に父母なく遠くなり
独り者無人島では寂しくなり
日本列島北から南被災地に
散骨はこの島にするこの夕日
島の医者内科も外科もひとつくり
列島に抱えきれない雨が降る
成長を待ってた孫に勞られ
追いかけるもの待ってはくれぬ夢
目をそらし死ぬ瞬間を人は待つ
噴水がクスッと笑う待ちぼうけ
すらすらと暗証番号押せました

黒兎報

草彦
照彦
みさ子
孔美子
文道
盛桜
ゆり鹿
小鹿
裕
拓庵
京
すみれ
かおる
満
蟹郎
恒満
実満
則彦
正子
信男
柳童
一
一
一
順子
順子
桂子
久子
孚彦
美佐
守啓

すらすらと口から嘘が出る不安
すらすらと名前浮かばず老いを知る
台風の話が弾む立ち話
世界へとコートにボール弾む秋
合格と耳に飛び込む弾む声

川柳塔おつばこ吟社(香川)川崎ひかり報

癖のある扉上手に開ける妻
追い風に乗って翔びたい喜寿傘寿
相合の傘が結んで五十年
見守つてもらふ先祖に手を合わす
震度七生命つないだもらい水
逆らつた分だけ重い荷を背負う

きやらぼく川柳会(鳥取)後藤 宏之報

暑い日はクーラー効かせ軽井沢
迷う時亡母の口癖ナビになる
この猛暑逃げる場所無い兎小屋
城山に登り切つたらレストラン
太陽に負けじと化粧濃ゆくなり
いい一日さあやるぞと目覚めどき
昼下がりテレビの声がゆりかごに
こんな日は冷えた西瓜にだめられ
この夏は仏壇の花曇さ知る
毎日が連休なの忙しげに
留守番の犬が淋しげにおくる
かくれんぼ日陰探して水提げ
二階家が邪魔だ火花がよう見えん
画面から汗が噴き出す甲子園
終戦後街は賑やかになつたなあ
熱帯夜月のあかりにほだされて

郁子
奈津子
春代
黒兎
純子

初恵
いさむ
放任
よしみ
弘
ひかり

ゆたか
令位子
久直
宏之
多美子
美智子
瑞枝
美草
あやこ
紀の治
日枝子
千代
雨奇
美穂
章
菜々

この風は神か仏が呼んだ風
お地藏もおいこ溢れる盆の花

翠洋会(大阪) 大久保眞澄報

記念日は何もしらない元気なら
念入りに計画しすぎ進めない
念願かなつたはずむ離婚印
限定の販売二度三度並ぶ
店舗無しネットでの妻の小商い
販売価格がつぼりのせる宣伝費
魂はひとつ誰にも売りません
触れないで下さいと桃並べられ
押し売りは減つてもネット詐欺が増え
政治家の舌二枚だけでは足りぬ
立ち上がり百歳からはまだヤング
追うばかりたまに追われてみたい虎
安倍下し寒風やまず吹きまくる
今がどん底何とかなると笑いあう
さわやかな風はふたりのキュービット
夏の雲父はクールな人だつた
だらしなさ余計に目立つクールビズ
あくまでもクールな答えコンピュータ
しつかりと聞いてすつかり忘れてる
五輪の夏クールな演出できますか
クールに生きクールに白寿迎えたい
閻魔さんが店番をする無人店
朝顔の名残りを惜しむ濃むらさき

川柳塔なら 大久保眞澄報

胸の煙り消すまいぞ消すまいぞ
久々に秋刀魚が燻る賑やかさ

恵子
美佐子

日の出
敬子
良子
満子
すみ子
桃花
富子
弘子
げんえい
楓楽
ふりこ
善昌
理恵
千枝子
義

和夫
希久子
蕉子
舞夢
眞澄
志華子
文
理
聡

点火せず燻るだけの老いの恋
燻りを払う酒にも限りある
昭和の傷燻っている戦痕
嘘いくつ重ねただらういぶる過去
隣国に燻る怨念風化せず
消せぬまま燻りつづく夫婦仲
胸底に燻つたまま恋終わる
学歴の壁にやる気をくすぶらす
もみ消した嘘が燻る胸の底
煙銀と誰も言うてはくれません
胸の中くすぶつてるよあの言葉
家計ひつ迫涼より寒い綱渡り
生きるつて熱いたまには涼をとる
出し切つた愛で涼しく待っている
白々と涼しい顔の赤い嘘
滝浴びて願かけ祈る子の命
涼求め何処がよいかと猫に聞く
新涼に笑顔が戻る立ち話
冷酒から爛へ潮目は腹の虫
舐すいすい釣れぬ焦りをあざ笑う
清濁もすいすい呑める生き仏
顔見てもすいすいおかないその名前
すいすいと走れるわりによく転ぶ
すいすいと故郷へ帰る赤とんぼ
利巧にも馬鹿にもなつて世を泳ぐ
すいすいと辿りつきたや天の川
日常を根こそぎさらう土石流
プレートが突き合つてる上に住む
寄せ合つた知恵に災難福となり
街角で貧乏神と鉢合わせ

災いの元となる口よく動く

貫一
倫
美智子
恵美子
和夫
稔
將文
俊雄
のぶよし
勝弘
恭昌
優
弥生
甚之市
贊郎
光堂
薫
ひろ介
國治
ふりこ
崇明
万紗子
辰雄
成子
おたか
富子
史郎
敬子
盛隆
よう子

始球式気合漲る時の人
止り木で熟睡しても落ちぬ鳥
先端医療死なない人を作りだす
百歳が毎年増える敬老日
口紅のピンクで隠す軽い嘘
雑魚集め漁師の嫁は億稼ぐ
子には子の生き方秋の天高く
八人も産んで育てたすこい母
天井の海老は夏でも厚着する
すこいねと誰かが耳の端で言う
大好きなコスモス待たず逝った友
二次会へ連れて行かない泣き上戸
アスリートの戦績さすが群を抜く
歳を取り何故か涙腺弱くなる
役者です泣くも笑うもお手のもの
揺るがないどんな時でも母である
うそ泣きもお世辞笑いもできる妻
やかましいと言つてみたいなおばちゃんに
羽衣を忘れた美女の海水着
糟糠の妻へ別れの止めの釘
好きだよと軽い気持で言つたのに
ドアノブにぶら下げてあるおすそ分け

柳川塔まつえ吟社(島根)相見

ご近所はみんな海外旅行中
近所には万里の城を築きたい
カラスも猫も自宅待機のこの酷暑
近所中で育つたよな昭和の子
お隣の猫可愛いと言つておく
毎日のグルメ恋しい冷奴
どん兵衛を10分寝かす裏の味

(竹)千賀子
修平
紀華
たみえ
公子
菊江
雪菜
良種
英坊
耕治
章和
正和
美籠
花門
祐康
ひとみ
ひろ介
かずお
靖鬼
歌留多
新録
宏造

柳歩報

芳山
輝山
みちを
雪代
弘充
とも子
瑞人

一流のグルメに卵かけごはん
胸もあり丸味もあるが気配なし
嫌だヤダ背中が丸くなる気配
八十の今昔な押す神のある気配
さつきから私気にする人物画
君が代を歌う時だけ日本人
伴奏を無視して歌うマイペース
ふる里へ歌っています応援歌
落ち込んだ心が歌うエツサツサ
鼻歌で昭和のロマンス呼び起こす
ナツメロを大きな声で歌いきる
久々の校歌完璧同窓会
勇ましい軍歌にひそむ死の不安
モアイ像なり損なつた石灯籠

長柳会(大阪) 辻村 ヒ口報

輝いた八十路に滲む皺の数
来光をたつぷり浴びて命燃ゆ
ガンバレと今朝も自分に旗を振る
ガンバレと叫びこだまに耳澄ます
天空の車窓から見る夏木立
低気圧妻に居座りもう三日
あの世へと旅立つ母へ糸電話
菌車が軋む肩書き消えてから
清貧に耐えて苦楽の人生路
豪邸も土台傾く液状化
小さなヒビ大崩落へまっしぐら
にじみ出る人間味あり小津映画
賞味期限過ぎれば脳もろいもの
Eメールあなたを消して知るもろさ
長つ尻に箒逆さに立てる妻

柳歩
草庵
德利
米估
孝子
寿代
桂子
あきら
豊子
哲仙
邦代
静枝
耕治
美智子

ヒロ
洋二
福子
旅人
隆明
直樹
純風
靖博
たけし
ともこ
敬二
光弘
英美
淳司

楽しんで少しお邪魔するこの世
思い出が邪魔して物が捨てられず
もしかして俺も地球のおじゃま虫
波がきて消えてしまった夏の恋
シヨパン弾く弾む鍵盤細い指
山に酒まだまだ弾む林住期
久し振り話が弾みぬけられず
再就職弾む靴音白いシャツ
やや空気も速くても僕はまだ弾む
弾むサマ豪速球で世界一
ただいまの弾んだ声に今日の無事

サークル檸檬(大阪) 松尾美智代報

これから生きる石けん匂わせて
信じてるただそれだけでつながって
敵父慈母嫌われたって良いじゃない
半端ない新女王スピーチもステキ
手抜き料理のコツを覚えて古い一人
ちよっとした信号無視が呼ぶ危険
最大の危険の元は高温化
歳重ねいつも危険と同居する
バンジージャンプスリルと危険合わせ持つ
遅れがちの時計を持って独り住む

六甲川柳会(兵庫) 奥澤洋次郎報

産み立ての卵をボンと朝ごはん
古稀迎えやる気漲るスニーカー
卒寿です私と老のかけくらべ
ピチピチの大魚サンマ 河岸に活
監督のやる気漲る誉め言葉
活け造り注文出来ぬ時価の札

敏夫
廣光
弘華
正彦
芳江
桜子

斜交いに詠まねばおもしろない気性
植山をあきらめ旅に出る

浴衣姿二十若いと誉めておく
新鮮な息吹き感じる幼稚園

大会に行こうと誘う秋の風
赤い夕陽新たな恋を産む予感

吊り橋をゆつくり渡るのも余裕
威勢いい呼び込む声にはねる魚

ふる里から鮮度が届く下宿先
バランスを取るのにちようといしほ

老いらくの元気の秘密それは恋
何気ない会話に拾う五七五

列島を鞭打つように雨風
おはようを合図に今日の幕が開く

百まで生きてやるぞと犬を飼う
句読点打つたら見えた四季の風

シーズンではれてしまったタイエット
博

川柳塔打吹(鳥取)

斉尾くにこ報

誘っても涼しい顔で予約済
万物が涼風を待つこの猛暑
気持ちいい涼しき期待窓開ける
大胆なO金利には泣かされる
大胆が無謀か二十二十年
大胆な人の後ろをついていく
大胆に奪った妻だ離さない
夏バテにママシを絞めて焼いて食う
おりこうと少女を撫でるとセクハラ
そつと撫でたらセクハラだよと呪まれた
中国が無事で羨心したか北
秋の風撫で撫でしたり暴れたり

洋次郎 日呂志 和宏 光久 利三 憲三 道子 弘 紀乃 盛夫 としお 美恵子 和郎 武彦 千賀子 博

心まで撫でられました子の笑顔
先生に頭撫でられスイッチオン
旅をする旅費は要らない地図の上
旅芸人子は全国に友ができ
化粧され女房永久の旅に立つ
行き先は天国地獄未知の旅
旅に出る準備の品は家出のみ
旅行カバンに北京の傷と巴りの傷
夕焼けの色まで違う旅の空
人生の旅の衣も色あせた
ポストまでサングラス履いて旅に出る
あの世行きみんな気楽な一人旅
撫でられたところが綿雲になった

あかつき川柳会(大阪) 山本 昌代報

亡夫の蔵書処分一冊だけ残す
丸暗記入試終れば丸忘れ
蛇口から税金らしきものが出る
ピンチには円陣組んで土気故舞
暮れる陽に無限の恵みアリガトウ
古希過ぎて読書月間マンガ読む
影伸びて抱かれていた夕茜
日が沈む肩の力を抜きながら
本棚の奥にわたしの基地がある
自民亭ゴルフ三味善き政治
救援物資心もこめて被災地へ
丸い物四角に切つて角が立つ
原爆忌(こ)の子残して 読みました
日の丸の期待背に受け目指す金
鉛配りちゃんと外交するおぼん
関空で途方に暮れた訪日客

三津子 美知江 岳人 久芽代 重忠 清 滋 芳光 公恵 泰山 紀の治 完司 くにこ

哀愁が漂うたそがれの背中
今日も無事また一日が暮れてゆく
夕暮れは愛を育むための時間
変人も奇人も交じる輪は丸い
とりあえずビール飲んだら日が暮れる
古本市買つて帰れば売った本
山崩れ写真が見える震度7
もうこんな時間と夕餉の支度する
官僚の息子の下駄は特注で
月天心嘘つきません天も地も
丸秘なら余計知りたくなつてくる
十万円使ってゲット万馬券
年金を配当と言う見栄っ張り
八十年没後の今日も生きる鶴
人生の最後を恋で終わりたい
ひとりてにつく街灯と黄昏る
日が暮れるそわそわしだす人もいる
低い我が家も太陽に照らされる
総裁選どちらもベケと書いている

川柳藤井寺(大阪)

太田扶美代報

正体隠し夜中にしてるポランテア
試飲した猪口一杯が誘い水
ややこし誘いに乗つたふりを
鯛のさしみ正体みたり外来魚
正体を見せぬ様に逃げている
誘われてグチを言ひあう飲み仲間
なおみさんの笑みに涙を誘われる
今更と思う保険に誘われる
誘っても無駄だが声は掛けてみる
正体は狐と狸だった恋

浩子 万作 千代美 敏子 ひろ介 常男 直己 克己 鮎子 ばっは 妙子 英夫 秀夫 康信 栄八郎 喜八郎 舞夢 たもつ ダン吉 雄太 いさお 光男 喜代子 一文 みつこ ちづる フジ子 シルク

じれつたい距離でなかなか誘えない
レトルト食品揃えて妻は翔んでいる
その中に人間さまもレトルトに
初恋はレトルトパックにして保存
一歩

富柳会(大阪) 関 よしみ報

この先もはてな手探り足探り
横笛に後悔がある鬼の面
メガホンと笛と涙と光る汗
敵父のまま八方睨み逝きてなお
消印が元気でいるか消しにくる
忘れない水蜜桃の缶の味
一本の笛夜神楽の終夜
誘いは美しい蜜甘い蜜
胸奥に生きた郷里の祭り笛
不条理な霧の向こうは蜜の味
蜜月も嵐も畳み終の章
笛の音に誘われダンスするコブラ
いま生を受けた画布の少女像
欠けてゆく物を数えている闇夜
傘振って振って雫を消す未練
余部の鉄橋で鳴くキハ汽笛
竜笛を舞う催馬楽の舞楽面
ビッコロのホット一息シンフォニー

川柳花の輪(大阪) 岡本 薫報

サンマ焼く臭につられ猫急ぐ
インタホン顔見て居留守使いわけ
隣部屋何か深刻手はお留守
冷蔵庫開けては締める妻の留守
留守電の田舎ことば聞き返す

秋刀魚焼く煙が秋を引き寄せる
秋茄子とさんまがあれば至福です
匂いたち隣りの夕食丸わかり
激励の一句を添えて友見舞う
病む友の愚痴をゆつくり聞いてやる
お見舞いにお片付けするポラントピア
見舞客食べてしゃべって帰られた
入院で悟る見舞いは金が良い
反対のことは痛いところを突く
戦争は反対死ぬまでを叫ぶ
反対の声より無気味なる白紙
目に留まるゆかた美人の左前
反旗振る機を読んでいる懐手
反対した父も孫抱き恵比須顔
妻に反対そんな勇氣はありません
少数派の反対意見無視される
反戦の九条守る戦中派
旅立ちの瑞祥にする朝の晴れ
内視鏡から送られてきたVサイン
逢える日は胃腸の調子晴れマーク
血の検査米印なく気が晴れた
服一枚買って女の憂さ晴れ
カラオケで十八番3曲心晴れ
晴れた野に夫待ってた朝の夢
快晴を告げる予報士声も晴れ
照る照る坊主ガンバレ明日は運動会
シユプレヒコール空しく響く少数派
対岸の事と思つてする油断
反対とひと声吠えて義理果たす

川柳塔さかい(大阪) 内藤 憲彦報

逆縁の娘を送る秋酉
緑の土手にすつくと燃える彼岸花
すかんだこモヒカンカット虎刈り
好きやから元カレの側通れない
黒の裏白と思つたのにグレイ
姿見にもう嘘つけぬ歳映る
ステキな嫁もらつて息子遠くなる
好きですともつさり言つた時計台
擦れ違ひもつと話せば取れる溝
勢いで買つてしまつた美術品
夕立のような女房のお説教
ほしいのは平和とつましい暮らし
お守りを呉れた女と結ばれる
勢いに乗つた政権すかんだこ
失恋で男心を教えられ
したたかに野草根を張り種守る
教えてる神の暗示に気付かない
遺言書開きおかしくなる絆
子の驍外もある我が家流
焦付きを落とせば策が見えてくる
九条が守る戦争なき平和
教えても無駄なことだと孫の愚痴
亡父の忌を教える萩のほろほろと
おかしいな文句言えないゼロ金利
娘夫婦に守られている同居中
路地裏にあるアナログの人情味
糞虫が風に任せている気楽
片言の手ほどき受ける初スマホ
おかしいなこんなに僕がもてるとは

川柳ねやがわ(大阪) 籠島 恵子報

進 進
みつこ
敏治
扶美代
佳子
時雄
憲彦
さくら
恵子報
さち子
薫
鈍甲
博泉
銀杏
尚世
信子
亜成
仁麗
寿子
秀峰
西雄
かすみ
ルイ子
弘一
郁夫
弘委
高志

守る者要る幸せの熱い汗
守るべきものがまだ有る生きなけりや
継ぎはぎのポケット夢の五円玉
この人の傘のつもりで生きている
9条を護れと萌える百日紅
勢いのイの字あたりを真似てみる

川柳さんだ(兵庫)

田中 章子報

秋の声二十日をすぎてから
病む姉に優しい声をかけている
おばあちゃん僕の声だけおぼえて
声だけにすれば良かった初対面
ばかやろう一喝にある父の愛
便利さが過ぎて我慢を忘れた子
休肝日しのげば明日は美味しい酒
浅野家に学ぶ後世の語り草
我慢なら私負けない戦中派
おかれた立場我慢出来るか耐え抜くか
売り上げを伸ばした靴に暇をやる
独り居の伸ばす手足に秋の風
支持率を伸ばす嘘なら屁の河童
悔しさが記録を伸ばすアスリート
ややこしい影がゆびつり降るだけ
喜寿の坂越えてゆびつり降るだけ
下り坂坂にあおられカツラ飛ぶ
花を見る余裕が出来た下り坂
楽ですが少しさびしい下り坂
よう転ぶ気い付けなはれ下り坂
子育てがビークだったと振り返る
小児科産科どちらも今は下り坂
人生の下り坂にもある試練

朝子 賢子 武彦 修 祥昭 恵子 花門 順子 厚子 微 紀恵 義徳 健二 加代子 勝正 美智子 千賀子 ゆかり 雅尚 光久 祐康 修平 耕治 一子 宣子 好文 迪

土壇場のシニア手強い場数の差
百十五歳シニアと呼ばればはからず
子はみんな妻に感謝のシニア入り
コンビニがあつて楽だとシニア笑む
揉め事にシニアの智慧を一しづく
のど越しの良い言葉ですありがとう
ひっそりと夏の名残りのさるすべり
台風がそって稲田に赤とんぼ
遺伝ではなれない田いで寸足らず
女には惜しい男には尚惜しい
知りたくてわかりたくて君の側
朝刊で今日の曜日を確かめる

豊中もくせい川柳会(大阪)初代 正彦報

嘘吐きが増えてエンマも過労気味
リハビリの試歩へ青空予約する
再婚の話仏前から外し
成長の陰に葬めくゴミの山
パブル期は札の勘定うまかった
人と人平均とって結びつく
忙しい人程だまって動いている
これ以上欲しいものなし空の着
消されたらまだ燃え上る火種はある
身から出た錆はレモンの泡で消す
残り香は全て消しますファブリーズ
小さい秋見つけわたしのテリトリ
忙しいのも幸せかもと仕舞舞呂
座はずす場の雰囲気がそうさせる
ハメ外さぬ程度じゃわたし酔えません(岩玲)
音のない火花に君を想う窓
平均寿命のびた分だけあやかう

博夫 哲夫 優子 ちあき 恭子 美籠 千津子 野薫 歳子 千代美 ひとみ 正和 歌留多 公子 求芽 健二 隆 時子 多美子 武彦 多津子 多佐子 さらり ヨシエ (永玲) 久子 千鶴子 耕治

街の灯が消えて働く知恵あまた
傷ついた翼たんで明日招く
忙しいのに涼しい顔をしてみたい
平均をいつも下げてる方に居る
ガンすらも栄養にした希林さん
人の倍傷ついてます好奇心
この道を進むと決めてから気楽
消しゴムが暴動する私の脳みそ
忙中閑ゆつて爪を研いでいる
しがらみを外しあしたへ深呼吸
平均というぬるま湯に慣らされる

ふうもん吟社(鳥取)

両川 無限報

たかが一字されど一字が句の命
花東に一輪嘘が混じってる
素直さがあれば欠点おぎなえる
膨らませ過ぎたか夢はパンクした
体幹が斜めになって老いを知る
いい街だ他人様にもご挨拶
罪がないと言えば閻魔に笑われる
台風も熱中症で迷走し
急がねば掴んだ虹が消えそうだ
生きたっていいな夕立のちに虹
苦悩した跡まざまざと画布の下
絵の下の画布に迷った下絵あり
官僚のキャンパス壊す色このみ
初恋の君を描けぬ美術館
一枚の画布にあなたを閉じ込める
画布なんか使ったことのない八十路
米朝の画布に日本は蚊帳の外
未完の絵ばかりが溜まる僕の画布

満子 雅美 葉子 すみ子 則彦 美智代 正彦 真理子 美籠 黒兎 見清 凱柳 りんこ 幸子 鐘軌 振作 白兔 回春子 一瑤 天翔 昌鼓 義徳 一平 隆浩 節子 茂登子 宏章

生活の乱れをバラす紙コップ
紙コップ飲んで騒いで使い捨て
紙コップ避難袋に入れている
紙コップこぼさぬように握りしめ
被災地で命つないだ紙コップ
マニキュアは数珠に似合わぬ手で唱え
念仏を十回心静かなり
呪い文唱え過ぎたか呪われる
念仏を唱える孫の頭なで
好きだから恋の呪文を口ずさむ
金持ちになると唱えてボロ着てる
異を唱えそれから無視をされている
幸せを唱えて青い鳥が舞う
正論を唱えて世論に嫌われる
念仏を唱えて釈迦の弟子になる

孝二
薫
由美子
善平
金祥
茶人
房江
大郎
蟹郎
楓花
勲章
みゆき
八千代
敏夫
無限

大山滝句座(鳥取) 新家 完司報

×だつて立ち直つたら+へと
閃きはサイドミラーに突然に
入り組んだ道迷わない酔っ払い
複雑骨折痛さが分からなく痛い
新鮮な閃きベンが間に合わぬ
婆さんが閃き過ぎて草臥れる
ペケペケペケ沖返せオッペケペー
好きだから嫌い嫌いだけれど好き
ペケばかり並ぶ足跡にも光
ペケとペケ一緒にしてもペケだった
嫁に行けしかし寂しい胸の内
ひらめかぬ風呂呂に入つても駄目
ペケ暮らしなれど極楽定年後
百歳の芽を摘むあれもこれもペケ

芳光
くにこ
紀の治
芳山
楓花
石花菜
照彦
正人
麦青
みちを
裕
けいこ
幸子
雄大

ピリツと閃いた頃あったのに
ああ地球地上も地下もこちゃこちゃだ
ウソ重ね複雑にしてすり抜ける
ペケ印背中について離れない
問診でペケ多くあり検査され
メルカリで宿題買った親にペケ
複雑なサイン味方も分からない
ピカピカと閃くときは酔っている

翠洋会(大阪) 大久保眞澄報

係長好きなタイプで気もそぞろ
胸のすくセリフ残して去る親父
痛快な話題を提げた見舞客
なおみ快拳怒つて墓穴掘るセレナ
上位ランク次々倒しなおみ節
生年月日も少し乾いて来たようだ
洗濯がからつと乾く青い空
一呼吸おけば涙も乾きだす
元号が変わる核ない夜明け待つ
セブテンバー夏の疲れがどつと出る
眼鏡ふく仕草で僕の肚探る
白い記憶だんだん増えてうるたえる
生死に係る病もせずに来た八十路
涙の跡照れあつている映画館
何もせぬ一日アリアバイにならず
ゆつせりとトイレに行けるコマーシャル
猛暑から豪雨が過ぎて秋の風
人情に触れて心が和らげる
秋夜長残り時間をふと思つ
財産あり係累はなしです いかか
素敵だと言われちらりと鏡見る

舞夢
げんえい
昭
蕉子
桃花
義
千枝子
日の出
弘子
満作
恭昌
富子
理恵
敬子
すみ子
和夫
善之
志華子
ふりこ
眞澄
大子

係長好きなタイプで気もそぞろ
胸のすくセリフ残して去る親父
痛快な話題を提げた見舞客
なおみ快拳怒つて墓穴掘るセレナ
上位ランク次々倒しなおみ節
生年月日も少し乾いて来たようだ
洗濯がからつと乾く青い空
一呼吸おけば涙も乾きだす
元号が変わる核ない夜明け待つ
セブテンバー夏の疲れがどつと出る
眼鏡ふく仕草で僕の肚探る
白い記憶だんだん増えてうるたえる
生死に係る病もせずに来た八十路
涙の跡照れあつている映画館
何もせぬ一日アリアバイにならず
ゆつせりとトイレに行けるコマーシャル
猛暑から豪雨が過ぎて秋の風
人情に触れて心が和らげる
秋夜長残り時間をふと思つ
財産あり係累はなしです いかか
素敵だと言われちらりと鏡見る

舞夢
げんえい
昭
蕉子
桃花
義
千枝子
日の出
弘子
満作
恭昌
富子
理恵
敬子
すみ子
和夫
善之
志華子
ふりこ
眞澄
大子

好きな椅子いい一日を書く日記
水平線いま太陽が隠れゆく
岸和田川柳会(大阪) 石田ひろ子報

月旅行ツアーも組める近未来
二人見てはずかしそうに出てる月
満月に甘い予感のセレナーデ
亡父母の声しみじみと聴く故郷の月
読経のように鈴虫が鳴く被災地の地
カラオケの虫がマイクを離さない
泣き虫も今は母校の四番打者
満月が二人のデート祝してる
不安気に私見つめる冬の月
禁煙か禁酒か辛さ比べてる
だんじりと神輿やっぱりだんじりや
若いのにと言われて辛い時もある
比べないと決めてからまだ負けてない
優秀な兄貴で影の薄い僕
人生は他人よりマジがいいのかい
一番は私誰とも比べない
持ったものに落とすとして喪の報せ
ホッペにチヌー思わずしたい子の寝顔
手練れの句思わず膝をポンと打つ
いつか思わず妻にがみつく
いっぴぎの蚊の不平不満が耳障り
紅糸曲折あつて人生万華鏡
親不孝通りジグザグ歩くオレ
カーナビもたまにジグザグお手上げさ
震度7ジグザグ割れる液状化
人生はジグザグだから面白い
産声に思わず涙こぼれ落ち

秀夫
誠夫
ふさゑ
恭子
和夫
清
大輔
忠太
珠子
律雄
みつ江
みづ子
昭
ひろ子
白子
ダン吉
愿
和美
英夫
隆昭
香代
洋二
心
規子
笑司
康信
玲子

好きな椅子いい一日を書く日記
水平線いま太陽が隠れゆく
岸和田川柳会(大阪) 石田ひろ子報

秀夫
誠夫
ふさゑ
恭子
和夫
清
大輔
忠太
珠子
律雄
みつ江
みづ子
昭
ひろ子
白子
ダン吉
愿
和美
英夫
隆昭
香代
洋二
心
規子
笑司
康信
玲子



川柳塔WEB句会 兼題「呼ぶ」

*平抜きと佳作は到着順
*webサイトと内容に齟齬がある場合、webサイトが正

9月例会入選句 投句数504句(261名) 平 宗星 栃尾 奏子 共選

平 宗星 選

2歳児の生死を分けた神の声
さようなら呼び合うことはもうなくて
窓で呼ぶ温い訛りに途中下車
おいと呼ぶあなたと返す妻がいた
満月になると私を呼ぶのです
安売りのチラシに呼ばれベダルこぐ
アナタからアンタに変わる倦怠期
呼びかけて跳んでくるのは大ばかり
団欒に母の笑顔が幸を呼ぶ
呼び出すとスーパーマンに見える父
遠くから誰か呼んでる曼殊沙華
呼びかけを続けあなたの雪溶かす
逆風が呼んできたのは底力
産道のさきでパパママよんでいる
口笛吹いてマクダ大使を呼んでみる
米櫃が空で夫婦の嵐呼ぶ
困ったら呼べたらいいな西郷どん
呼ばずともあちら側からくる老後
特別な声色で呼ぶ給料日
旧姓で呼ばれときめくクラス会
呼び掛けにハイと応える白い杖
孫の名を連呼している徒競走
貧乏神呼べば笑顔でやって来る
彼岸花亡母に呼ばれて居る様な
番号で呼ばれて同じ顔になる
とりあえず鞍馬天狗を呼んでみる
お母さん呼べば鈴虫急に鳴く
呼び出しておいてキスさえしてくれぬ
呼ばれても六文銭を渡さない
ケタイがナースコールになる介護
きみの名を呼ぶときに舞う紋白蝶
警官に呼び止められる千鳥足
佳 冬銀河生まれ故郷が呼んでいる
佳 素直だな呼ばれたとこへ行く綿毛
佳 風船を飛ばして彼を呼んでみる
佳 経験が呼んできた折れない翼
佳 背が温い呼ばれたかしら夕陽です
人 満月に呼ばれたようで返事する
地 呼びにきたあなたは白い波になり
天 いわし雲遠い記憶を呼び寄せる

栃尾 奏子 選

さようなら呼び合うことはもうなくて
満月になると私を呼ぶのです
出かけようおいでと風が呼んでいる
呼びもせぬ厄病神がいる客間
肉じゃがのにおいが僕を呼んでいる
波乱呼ぶ鬼がときどき戸を叩く
はっしょにいまがさお呼び待ってます
呼び方が変わる心の距離測る
現実に呼び戻される月曜日
突然の雨がアイアイ傘を呼ぶ
呼ばずともあちら側からくる老後
素直だな呼ばれたとこへ行く綿毛
ポカポカの縁側が呼ぶ日向ぼこ
夜勤明け逃れるナースコールから
呼ばれないままで一日過ぎました
今ここであなたを呼べば負けになる
呼び出しを待って一人になりました
午後十時合図はクラクションでした
もう一度呼んでくれたら決めるから
おーいお茶 空耳だった三回忌
彩が食欲を呼ぶ旬の膳
トランプが言うど何かと呼ぶ波紋
彼岸花亡母に呼ばれて居る様な
山彦の返事を待って下りて行く
番号で呼ばれて同じ顔になる
ヴァイキング会場前へ救急車
もう傘寿まだマドンナと呼ばれてる
ゴキブリも妻の叫びに後退り
泣きながら子供はみんなママを呼ぶ
マッサージチェアが呼んでくるのです
呼んでから気づくあもういないんだ
わたくしが呼ばれています12桁
佳 もしあなた落としましたよ羞恥心
佳 妻を呼ぶ妻がおれ呼ぶ生きている
佳 出席を取りますアイノチカラ君
佳 女子会へ僕が呼ばれたその理由
佳 12枚綴りのギャホーが届く
人 名月が呼ぶか首長竜が飛ぶ
地 ブルブルルこちら10年後のあなた
天 子供食堂あの子も呼んで来て欲しい

麦 乃
乙川 初音
中村 肇
汐 海 岬
絹田 あさ
武本 碧
芝藤 一郎
安藤 汐莉
相葉 俊彦
日野 百合
三善ヒロシ
松島 勇象
安西美智子
まさ と
平井美智子
平井美智子
浜野 律
み か ん
青木 展子
上原 稔
竹中 正幸
竹中 正幸
森 廣子
西沢 葉火
尾崎 良仁
雨森 茂喜
高浜 広川
折鶴 翔
尾崎 一子
菊池 文徳
澁谷さくら
柳田かおる
居谷真理子
春川 秋男
加藤 当白
雨森 茂喜
怜
斉尾くにこ
加藤 当白
黒 し ま

投句方法 【川柳塔】を検索→【川柳塔 WEB 句会】をクリック

senryutou.net

(サイト管理 森山文切)

句会名	日時と題	会場と投句先
岸和田 川柳会	17日(土) 14時締切 人間・染める・さわどい パニック	岸和田市立福祉総合センター 南海電鉄「岸和田」駅東へ5分 〒596-0076 岸和田市野田町2-13-19 中岡香代
川柳塔 みちのく	17日(土) 17時締切 宝・蛇足・いじらしい	弘前市御幸町13-1「大成小学校地域交流室」Tel.0172-36-6614 〒036-8275 弘前市城西1-3-10 川柳塔みちのく事務局 稲見則彦 宛 Tel.0172-36-8605
川柳 ねやがわ	18日(日) 14時締切 寝屋川市民川柳大会	寝屋川市立市民会館3F講義室 (Tel.072-823-1221) 京阪寝屋川市駅(東口)からバス 詳細は119ページ参照 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
川柳 藤井寺	18日(日) 14時締切 このまま・参加・席題共選	藤井寺市生涯学習センター・シュラホール 3F 近鉄南大阪線「藤井寺」駅下車南へ徒歩10分 〒583-0007 藤井寺市林5-8-20-303 鈴木いさお
豊中 もくせい 川柳会	19日(月) 13時30分締切 階段・湧く・じっくり 自由吟	豊中市立中央公民館 3F 阪急宝塚線「曾根」駅 徒歩5分 〒569-0073 高槻市上本町5-26 初代正彦
川柳 さんだ	20日(火) 13時30分締切 駅前・断る・ストレス 秘め事・自由吟	キッピーモール (JR三田駅前) 〒669-1545 三田市狭間が丘5-10-19 谷 祐康
川柳 たちばな	21日(水) 13時45分締切 印象吟・赤(互選)・振る 自由吟	立花公民館(尼崎市塚口町3-39-7) Tel.06-6422-6741 〒661-0953 尼崎市東園田町3-49-5 藤井宏造 Tel.06-6494-5187
川柳塔 すみよし	23日(金) 14時15分締切 造花・恥ずかしかったこと 拗ねる	住吉区民ホール 〒580-0026 松原市天美我堂3-130-2-404 森松まつお
和歌山 三幸 川柳会	24日(土) 13時15分締切 数学・黄・溢れる	和歌山商工会議所 4階 第3会議室 〒640-8570 ニュース和歌山編集部 「和歌山三幸川柳会」宛
はびきの 市民会 川柳会	25日(日) 14時締切 匙・面目・ライン	陵南の森公民館 近鉄南大阪線「高鷲」駅下車 北東へ徒歩10分 〒583-0864 羽曳野市羽曳が丘1-11-8 徳山みつこ
川柳 ふうもん 吟社	25日(日) 13時30分締切 自由吟・自分色・ポタポタ 阻む	開発ビル 2F (鳥取市片原1-107) 〒689-0202 鳥取市美萩野2-171-3 中村金祥
南大阪 川柳会	26日(月) 18時30分締切 珍しい・封筒・エンドレス むせぶ	大阪市立住まい情報センター 5F 研修室 地下鉄谷町線・堺筋線「天神橋6丁目」駅③号出口 〒540-0004 大阪市中央区玉造1-16-13-304 前たもつ
京都 塔の会	26日(月) 14時締切 オレンジ・長・めっさり・席題	京都ハートピア 地下鉄「丸太町」駅⑤出口すぐ 〒607-8231 京都市山科区勤修寺堂田70-16 榎本宏子
川柳塔 わかやま 吟社	休会	

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所(06-6779-3490)へご連絡ください。

11月各地句会案内

(開催日順)

句会名	日時と題	会場と投句先
川柳塔 なら	1日(木)9時30分開場 川柳塔なら 創立20周年記念川柳大会	ホテル リガーレ春日野 TEL0742-22-6021 詳細は川柳塔誌9月号65ページ下段参照 問合せ先 宇賀 史郎 TEL0742-45-9124
城北会 川柳会	3日(土)14時締切 曲げる・はっきり・適当 自由吟	旭区老人福祉センター 3F 地下鉄谷町線「千林大宮」駅③番出口 〒536-0001 大阪市城東区古市1-8-14 江島谷勝弘
倉吉会 川柳会	3日(土)14時締切 仕返し・ほろり・投げる 席題	倉吉市明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡北栄町由良宿2072-17 谷口次男
川柳塔 まつ え社 吟	5日(月)13時30分締切 安い・変化・話・昼	松江雑賀公民館 〒690-1223 松江市長美関町笠浦222-1 相見柳歩
あかつき 川柳会	9日(金)14時締切 食べる・耳・手段・時事吟	大阪保育運動センター(新谷町第1ビル2F) 地下鉄「谷町六丁目」駅③番出口南へ3分(道路向い側へ) 〒581-0014 八尾市中田2-312 前田紀雄
川柳大阪	10日(土)14時締切 開く・感謝・世話	地下鉄・長堀鶴見緑地線 京橋駅「研修室」 〒534-0021 大阪市都島区都島本通4-11-6 山崎珠生
川柳 とんだばやし 富柳会	10日(土)14時締切 包・まさか・自由吟	富田林市立中央公民館 近鉄南大阪線「富田林」駅南口から西へ200m 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 池 森子
六甲会 川柳会	10日(土)14時締切 コンビ・点・いらいら・自由吟	六甲道勤労市民センター 5F E室 JR「六甲道」駅南隣 メイン六甲内 〒657-0011 神戸市灘区鶴甲4-11-11 上田和宏
川柳塔 打吹	10日(土)13時30分締切 酒・支える・ヒクヒク・席題	倉吉市上灘町9 上灘公民館 〒682-0034 倉吉市大原637-3 牧野芳光 方 川柳塔打吹 事務局
八尾市民 川柳会	11日(日)14時締切 快適・やばい・寒い・雑詠	渋川町・安中町集会所 JR八尾駅5分 〒581-0083 八尾市永畑町2-1-7 土田欣之
西宮北口 川柳会	12日(月)14時締切 闇・冷める・そのまま・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急「西宮北口」駅南出口徒歩3分「プレラにのみや」 〒663-8112 西宮市甲子園口北町27-4-602 梅澤盛夫
ほたる 川柳 同好会	13日(火)13時30分締切 平成・折る・えんえん	豊中市立蛭池公民館 阪急・モノレール蛭池 蛭池駅前ビル 5F 〒561-0813 豊中市小曾根2-4-1 水野黒鬼
川柳塔 さかい	13日(火)14時締切 はったり・囲む・折り句・こうち	東洋ビルディング 4F 堺東駅北西改札口から2分 〒599-8103 堺市東区菩提町5-171 矢倉五月
川柳 あまがさき	13日(火)14時締切 使う・本・重い・自由吟	尼崎市女性センター・テレビエ 〒661-0953 尼崎市東園田町3-49-5 藤井宏造 TEL 06-6494-5187

柳界展望

大賞 (日満賞)

斉尾くにこ

デザートは今人生のフルコース

準賞1 吉田 弘子

非常識拾う一斉清掃日準賞2 山中 康子

賞味期限切れた命と一騎打ち

★「第68回富田林市民文化祭川柳大会」は、9月15日富田林立すばるホールで103名の参加で開催。同人成績。

天位 鈴木いさお

ひとり一人にふる里がある母がいる

天位 川端 一步

読み終えて灯を消す時の至福感

★「第32回堺市民芸術祭川柳大会」は、9月16日堺市立梅文化会館で110名の参加で開催。同人成績。

堺市長賞 奥 時雄

ほいほいと戦地へ行った訳でない

秀句 澤井 敏治

おかげさま胸に刻んで

生きる日

秀句 田中ゆみ子

故郷はもう帰れない防護服

秀句 藤田 武人

触ったと言われいやいや触れただけ

秀句 大内 朝子

ほいほいと地球の弾む日を見た

★「しまね文芸フェスタ2018鳥根県大会」は、9月16日浜田市にて開催。同人成績。

天位 斉尾くにこ

母としてふる里になっていますか

天位 新家 完司

予定なし痛痒もなし憂いなし

★「文化祭吹田市市民川柳フェスタ51」は、9月24日吹田市文化会館メイシアター開催。同人成績。

秀句 栃尾 奏子

うちの子も兵隊さんになりました

秀句 山本希久子

直そう

★「第45回東大阪市民柳大会」は、9月29日東大阪市立社会教育センター開催。同人成績。

秀句 中村 恵

開くまで叩き続けている拳

▽動 向△

○平成30年8月1日付、鳥取県川柳作家協会と鳥取県川柳作家連盟が合併。

鳥取県川柳作家協会会長に牧野芳光氏が就任。

▽寄 稿△

○小沢淳氏 (同人・北道) は、平成30年9月12日発行の『道友文芸』に「開拓物語」を寄稿。

▽出 版△

○平井美智子句集「一匹の美学一途に鬼を追う」。

新葉館「川柳作家ベストコレクション」B6判P95。定価1200円+税。

▽ご芳志△

○八木千代さん (参与・米子市) から、高野山基

金として金一封拝受しました。

▽訂正とお詫び△

10月号P122 2段目17行目、池田ヒサコ↓池田批佐子。

▽訃 報▲

○9月5日、田中みねさん (同人・和歌山市) が逝去。享年80。

▽新誌友紹介△

堺市 二階堂美智子 紹介者 森田 旅人

岡山県 藤澤 照代 紹介者 新家 完司

神戸市 米田利恵子 紹介者 西出 楓楽

神戸市 齋藤 隆浩 紹介者 西出 楓楽

富山市 伴 よしお 紹介者 西宮市 高橋千賀子

西宮市 紹介者 北野 哲男

神戸市 奥田 宗光 紹介者 西出 楓楽

枚方市 立石 和子 紹介者 西出 楓楽

次回常任理事会 11月7日 (AM) 10時

第37回 鳥取県没句川柳供養大会

と き 12月16日(祝日)
午前9時30分 開場・受付

ところ 新日本海新聞本社ビル 5階大ホール
J R鳥取駅南(駅裏) 徒歩3分

会 費 2,000円(昼食・作品集呈)
精進落し 3,000円(懇親会希望者)

兼 題 「ちゃっかり」 山野 寿之 選
「通 販」 公納 幸子 選
「四 コマ」 宮本 喜明 選
「あと五分」 萩原 典呼 選
「死 角」 居谷真理子 選
「使い捨て」 牧野 芳光 選
「凶 器」 北川 拓治 選
「敗者復活吟」 新家 完司 選
(この一年間で没になった句から2句吐)

席題なし 各題とも2句吐

投句締切 11時15分厳守(締め切り後・弔辞・焼香)

欠席投句 1,000円(切手可・作品集呈11月末日締切)

投句先 〒689-0202 鳥取市美萩野2-171-3
中村 金祥宛 電話 0857-59-1056

主 催 川柳ふうもん吟社

第42回 寝屋川市民川柳大会

日 時 11月18日(日)
午後1時開場 出句 2時締切

ところ 寝屋川市立市民会館3F 講義室
〒572-0848 寝屋川市秦町41-1
(京阪寝屋川市駅東口から 京阪バス
「太秦住宅行」イズミヤ1番乗り場No.31
か31Aに 乗り市民会館前下車、または
寝屋川市駅下車東へ徒歩15分ほど。)

TEL 072-823-1221

会 費 1500円(発表誌呈)

兼 題 (各題2句 席題なし)
「困る」 高田 博泉 選
「不思議」 大久保眞澄 選
「支える」 藤井 宏造 選
「うっかり」 足立 淑子 選
「頭」 江島谷勝弘 選

投句受付 82円切手5枚同封下記事務所宛
11月15日必着
〒572-0063 寝屋川市春日町9-9
高田博泉 方 川柳 ねやがわ

主 催 川柳 ねやがわ

第7回 卑弥呼の里誌上川柳大会

兼題と選者 (各題2句)
「自由吟」 野沢 省悟・森中恵美子 共選
「何 故」 間瀬田紋章・大西 泰世 共選
「リアル」 吉崎 柳歩・樋口由紀子 共選
「呼 ぶ」 森山 文切・赤松ますみ 共選
「鮮やか」 月波 与生・木本 朱夏 共選

投句用紙 専用用紙(コピー可)または
A4大用紙

参加費 1,000円(切手不可) 発表誌呈

締 切 平成31年1月15日(火)消印有効

投 句 先 〒842-0103
佐賀県神埼郡吉野ヶ里町大曲2426-2
卑弥呼の里川柳会 真島久美子
TEL・FAX 0952-52-1061

賞 各題特選1句・有田焼 15,000円相当
各題佳作5句・図書券
(その他サプライズ賞あり)

※男女を問わず たくさんのご参加をお待ちしています

第10回 新春たましま川柳大会

(10回をもって閉幕することになりました。賞品
多数用意してお待ちしています。)

と き 2019年 1月12日(土)
開場 10時 投句締切 11時30分
開会 13時 閉会 16時頃

ところ 浅口市市民会館金光(旧金光町市民会館)
浅口市金光町古見新田790-1
TEL 0865-42-2845
(山陽本線 金光駅より東へ徒歩5分)

参加費 2000円(昼食・記念品・発表誌呈)

兼 題 (各題2句・席題のみ1句)
「私」 柴田夕起子 選
「女」 丸橋 野蒜 選
「告白」 西村みなみ 選
「泡」 高木 勇三 選
「ずっと」 鈴木 かこ 選
「屋 台」 新家 完司 選
○当日席題 北川 拓治 選

◎出席者のみ事前投句 *ハガキで投句してください。
兼題「10」1句。北川拓治 選。締切11月30日必着

◎欠席投句 1000円。投句締切12月20日。

◎投句先・問合せ先
〒719-0104 浅口市金光町古見新田1325-10
北川 拓治 TEL0865-42-6039

主 催 川柳たましま社

編集後記

★先手打つおんな奥の手
持っおとこ 薫風

★第24回川柳塔まつりの
事前投句は「男と女」。蘭
幸主幹が出题されたが、か
なりユニークな題である。
平成20年に葉原道夫さん
編集の「改訂・増補」橘
高薫風川柳句集」全句作
品」は一級の資料であ
る。編集後記を書く前に
必ず開いてその月に相応
しい作品を選んでみる。
★大会ではさまざま「男
と女」を聴かせて戴いた
が、薫風先生の「おとこ
とおんな」には人生の機
微が見事に凝縮されてい
る。「どうや、かないま
せんやろ」先生の温顔が
浮かぶ。「男と女 川が
流れてゆくように」亡き
小出智子先生作。淡々と
した夫婦のありようが読
みとれる。僅か一七音
字。やっぱり川柳は凄い。
★尼崎市在住の俳人であ
り写真と俳句の融合を

テーマに「写俳亭」の号
をもつ伊丹三樹彦先生は、
今年の二月で満九八歳、
白寿を迎えられた。現役
俳人として今なお作品を
発表。「俳縁写縁の友垣」
は一〇月一日発行の近著。
世界中を飛びたくさん撮
られた写真と俳句は、こ
れまでも作品集として
発刊されている。モノク
ロ写真が時代を物語る。
★伊丹丹生れ三木育ちの「地
縁」を、師日野草城はじ
め楠本憲吉・坪内稔典
等々、人との縁を「人縁」
と称して大切にされてい
る。年齢とともに写され
ることを敬遠している私
は、写真の良さをしみじ
みと実感した。ことに集
合写真は圧巻である。切
り取られた時間。凝縮し
た豊かな時間。「縁」と
いうことばの重み、仲
間の絆、人肌の温みを
ふんわりと感じた一冊。
★9月15日、75歳で亡く
なつた樹木希林は全身癌
を公表しながらも最期ま

ひとこと

スマホ雑感

近年スマホを使う人が激増中と
言われています。2年前の総務省
調査によれば平均保有率57%。そ
の中、大半は若い世代。60歳代で
33%、70歳代では13%です。私は
3年前にガラ携の故障を機に購入
しましたので、高齢者目線で雑感
を述べます。
ガラ携同様の電話・メール機能
に加え、便利な機能があります。
先ず検索機能。電子辞書には
載っていないような新語もまず検
索できます。一般ニュース以外に、

交通機関の時刻・お天気情報も見
やすく便利。カメラ・手帳・歩数
計・電卓・目覚時計としても気軽
に活用しています。

一方、スマホの欠点は電池消耗
が早い事。毎日の充電が欠かせま
せん。簡単なようで、これが意外
と面倒です。ところで、電車に乗
れば多くの人がスマホをみている
姿を見かけますが、最近では違和感
がありません。私も車内では新聞
を読まなくなりました。その分、
家でゆっくり読める時がまさに寛
ぎの時間となっています。

(初代 正彦)

で女優を貫き通した。苦 言う。「このわた。ナマと攻められ何時も辞書を
しさを口にしなかつたと コの腸(はらわた)、或は 繰っています。この漢字、
いう彼女の最晩年の言葉 その塩辛」とある。 △作者は多分「見つけの
から。」おもしろい。さ △句だ。感動のキーワー として楽しんである。
変化がある。 (朱夏) ド」と胸をはる。編集人 としては楽しみでもある。
△「凌霄花」「海鼠腸」は は「読み方は?漢字は正 △思い違いの誤記の例を
読めるでしょうか、書け しいか」と身構える。ノー ご紹介する。茶山花(誤・
でしまします。広辞苑に ベル賞の本庶さんなら「好 サザンカ正しくは山茶花)
は「のうぜんかずら。蔓 奇心を持って自分が納得 山案子(誤・サンザシ・
性落葉樹。中国原産。夏、 出来るまで調べて見よう」 正しくは山査子)等。ま
茎頂に橙赤色の大花を開 △編集日には故事来歴か 遣い等投句の前に今一度、
く。リョウウシヨウカとも ら、最新ニュースから ご確認頂きたい。(憲彦)

「川柳塔」への投句について

- (1) 川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友（誌代半年分以上前納の定期購読者）に限り、本誌綴込みの投句用紙を使用してください。
- (2) 愛染帖・檸檬抄・一路集・インスピレーション・ナビ（印象吟）への投句は、同人・誌友に限ります。初歩教室は誌友のみとします。愛染帖・一路集・初歩教室は川柳塔柳箋（本社事務所取り扱い）、檸檬抄は本紙綴込みの投句用紙を使用してください。
- (3) 各欄への投句は、必ず氏名と住所（県・市名）を明記してください。
- (4) 各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。ファックスでの投句は御遠慮下さい。

川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から15時までにご利用いたします。

作品募集

川柳塔 (8句) 小島 蘭 幸 選
 水煙抄 (8句) 西出 楓 楽 選
 愛染帖 (2句) 新家 完 司 選
 檸檬抄「鮮やか」(2句) 川端 一 歩 共選
 インスピレーションナビ(2句) 山西 泰 世 選
 一路集「重宝」(2句) 佐藤 古 拙 選
 一路集「ロマン」(2句) 小河 柳 女 選
 初歩教室「姫」(3句) 居谷 真理子 担当

1月号発表表 (11月15日締切)

2月号
 檸檬抄「振る」
 一路集「人情」「化ける」
 初歩教室「小さい」

本社11月句会

とき 11月7日(水) 13時開場・13時40分締切
 ところ アイーナ大阪 4階 金剛の間
 天王寺区石ヶ辻町19-12 電06・6772・1441
 おはなし「川柳あらかると9」
 兼席題「
 名前」
 洗う
 ゆるい
 伝える
 無茶」
 小島 蘭 幸 選
 鈴木 幸 選
 吉村 久仁雄 選
 松岡 篤 選
 緒方 美津子 選
 米田 恭昌 選
 三宅 保州 氏 選

会費 1000円 投句料 500円(切手可)
 (各題2句以内)

本社12月句会
 7日(金) 午後1時から
 兼題「破る」「らしい」「向く」
 「若手」「永遠」

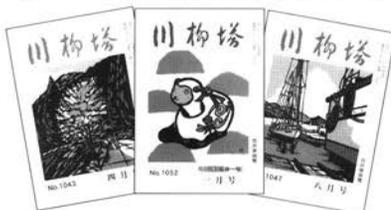
川柳塔WEB句会のご案内

課題「金」 樋口由紀子 共選
 高瀬 霜石
 締切 11月20日 発表 11月25日頃
 投句料 無料
 インターネットで「川柳塔」を検索しWEB
 句会をクリックしてご投句ください。

定価 八百円 (送料88円)
 半年分 五千円 (送料共)
 一年分 九千八百円 (同)
 二〇一八年平成三十年十一月一日発行
 〒543-0052 大阪市天王寺区大道一―一四―一七
 印刷所 美研アート
 編集人 小島 和 幸
 編纂人 木本 朱 夏
 発行所 川柳塔社
 電話 〇六六七九一三四九〇番
 振替 〇〇九八〇四一五八四七九番

川柳・俳句・エッセイ・小説 新聞・広告・ポスター・伝票等

あなたの思いをかたちにします。



美研アート

〒531-0061 大阪市北区長柄西1-1-10
 TEL (06) 4800-3018
 FAX (06) 4800-3028
 E-mail: bikenart@ea.mbn.or.jp

※事務所移転につき住所・電話番号が変わりました。

オニザキのプレミアムロースト

つばきま

杵つき製法の「すりごま」



袋を開けた瞬間に広がる、

香ばしい薫り。舌と記憶に

しつかりと残る、深いコク。

料理をより美味しくする

ゴマを作りたい、真つすぐな

想いから生まれた逸品。

それが「プレミアムロースト」。

素材本来の良さを余すこと

無く引き出した、オニザキの

自信作をお届けします。



株式会社 オニザキコーポレーションセルズ
〒862-0951 熊本市中央区上水前寺1-6-41 OCOビルディング

TEL ☎ 0120-30-5050

自費出版

川柳・俳句・エッセイ・小説

新聞・チラシ・ポスター・伝票等

あなたの思いを かたちにします

具体的なアイデアがある方はもちろん、「こんな出版物をつくりたい」という漠然とした思いだけでも結構です。まずはあなたの「思い」をお聞かせください。じっくりと丁寧にお話を伺いながら、それをかたちにするお手伝いをいたします。

美 研 ア ー ト

TEL 06-4800-3018

事務所移転しました

大阪市北区長柄西 1-1-10 E-mail: bikenart@ea.mbn.or.jp

営業時間 平日 10:00~17:00 定休日: 土/日/祝